

うつせみのあなたに

第7巻

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
もくじ	4
第1部 09.06.27～09.07.06	
09.06.27 空前の「純文学」ブーム	8
09.06.28 「時間」と「とき」	19
09.06.29 「揺らぎ」と「変質」	33
09.06.30 不自由さ（1）	46
09.06.30 不自由さ（2）	56
09.07.01 ぐるぐるゆらゆら（1）	67
09.07.01 ぐるぐるゆらゆら（2）	76
09.07.02 うたう	85
09.07.03 まつはいつまでも、まつ	98
09.07.04 あわいあわい・経路・表層（1）	111
09.07.04 あわいあわい・経路・表層（2）	122
09.07.05 マンネリズム・マネエリスム	131
09.07.06 こんなことを書きました（その12）	144
第2部 09.07.07～09.08.25	
09.07.07 いみのいみ	152
09.07.08 何となく	167
09.07.14 記述＝奇術＝既述	179
09.07.15 3人のゲンちゃん	193
09.07.16 あつきのせい？	207
09.07.17 システムと有効性と比喻	220
09.08.01 気になるというか	230
09.08.02 もう1つ気になることが	232
09.08.03 さらに気になることが	241
09.08.04 できないのにできる	249
09.08.05 何もないところから	263
09.08.06 めちゃくちゃこじつけて	272

09.08.07	銃が悪いのではなく	285
09-08-08	どうにもならないときには	295
09.08.25	こんなことを書きました (その 13)	310
あとがき		
	あとがき	318
	『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル	319
奥付		
	奥付	338

はじめに

はじめに

本書を第7巻とするシリーズは、2008年12月19日から2010年3月11日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第7巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いるという仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「09.07.06 こんなことを書きました(その12)」、そして第2部の最終記事「09.08.25 こんなことを書きました(その13)」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

もくじ

はじめに

もくじ

第1部

09.06.27 空前の「純文学」

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

09.07.05 マンネリズム・マニエリスム

09.07.06 こんなことを書きました (その 12)

第2部

09.07.07 いみのいみ

09.07.08 何となく

09.07.14 記述＝奇術＝既述

09.07.15 3人のゲンちゃん

09.07.16 あつさのせい？

09.07.17 システムと有効性と比喻

09.08.01 気になるというか

09.08.02 もう1つ気になることが

09.08.03 さらに気になることが

09.08.04 できないのにできる

09.08.05 何もないところから

09.08.06 めちゃくちゃこじつけて

09.08.07 銃が悪いのではなく

09.08.08 どうにもならないときには

09.08.25 こんなことを書きました（その13）

あとがき

『うつせみのあなたに第1巻～第11巻』の各記事タイトル

第 1 部 09.06.27～09.07.06

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

◆空前の「純文学」ブーム

2009-06-27 10:11:36 | 言葉

現在、未だかつてないほどの大きな規模で、

* 「純文学」ブーム

が起きているのをご存知でしょうか？ 正確に言えば、

* 「純文学」復興運動

というべきかもしれません。毎日、

* 数えきれないほどの「純文学」の書き手たち

が、

* 数えきれないほどの作品を書いている

のです。いえ、海外の話ではありません。

* この国で起きている現象＝現実

です。嘘ではありません。

*

さて、

*純文学とは何

でしょう？ 古い定義を持ち出しますと、

1) 島崎藤村の『破戒』や田山花袋の『蒲団』あたりを起源にもつ自然主義文学の流れをくみ、身辺雑記的な記述に満ちた私小説、

2) 白樺派と呼ばれた、武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉の流れをくみ、物語性を極力排除し、ひたすら身辺を写生する作法＝手法を迫及した心境小説、

あたりがあります。もう過去の定義であり、これが純文学だというのなら、

*死語

あるいは、

*化石

と言われても当然のものです。

でも、その

*死語と化石が日々多量に生み出されている

のです。嘘ではありません。

この国の、

*どこで？ 誰が？ どんなふうに？

純文学の作品を書き、発表しているのかと申しますと、

*ネット上

なのです。

*ケータイ文学

ですか？ いいえ、違います。少なくとも今、ここで問題にしているものは、いわゆるケータイ文学ではありません。つまり、みなさんが

*ケータイ文学という言葉でイメージするであろう形態の小説

ではありません。ケータイ小説については、「書く・書ける(1)」2009-05-22で私見を詳しく述べています。ご興味のある方は、ぜひ、ご一読ください。

*

で、「純文学の作品」を、ネット上でどうやって検索=探せばいいのかと申しますと、たとえば、

* “小説”

とか

* “ネット小説”

とか、まして、さきほど、今話題にしているものではないと申しました、

* “ケータイ小説”

をキーワードにして、“○○”という具合にくくってググってみるのは、賢明な検索方法とは言えません。では、どうすれば、「純文学作品」に出合えるのでしょうか？

* ブログ

です。

* ブログの日記

なのです。

ブログを主催しているサイト、あるいは、ブログランキングを行っているサイトの、トップページなどで分類されているジャンルで申しますと、

* 「小説」や「文学」ではなく

あくまでも、

* 「日記」

の項目をクリックするべきです。

* 「エッセイ」

も有望です。

とにかく

* 「日記」

です。

さきほどの純文学の古い定義のうちの大切な部分だけを、繰り返します。

1) 身辺雑記的な記述に満ちた私小説

2) 物語性を極力排除し、ひたすら身辺を写生する作法＝手法を追及した心境小説

これって、「ブログの日記」ではないでしょうか？

*

話を少し変えます。

現在、

* プロの小説家たち

のなかで、

* 私小説と心境小説を書いて生計を立てている

人たちなんているのでしょうか？ そうした傾向の作品だけを書いていた場合、その作品たちは、ご飯を食べていけるだけの部数を確保したうえで、

* 販売（出版⇒流通⇒書店に並ぶ⇒お客様に買っていただく）

できるのでしょうか？ 無理でしょう。残念ながら、ほぼ不可能でしょう。

出版界も、現在、大不況の影響をもろに受けています。

*数年前なら、出版社も販売オーケーしてくれた作品

が、現在ではなかなか上梓してもらえない。それが現状です。それだけではありません。とりわけ、

*私小説をとりまく環境は厳しさを増している

と言えそうです。

たとえば、

*柳美里（ゆうみり）氏の場合

を考えてみましょう。さきほどの純文学の定義にもっとも近い小説を書いている作家の1人です。その柳美里氏が、かつて書いたある作品が

*モデル小説

の形をとっていたために、

*プライバシーを侵害された

と主張する人が訴訟を起こし、

*最高裁において出版差し止めという判決

がくだされました。

あの作品は、モデル小説でしたが、

*私小説すべてがモデル小説である

と言えるわけで、あの

*最高裁判決が、私小説の息の根を止めた

と言っても過言ではないのではないのでしょうか。

また、

* 車谷長吉（くるまたにちょうきつ）

という作家・俳人がいらっしゃいます。車谷氏は、

* 「私小説家」を自任している数少ない作家の1人でした

が、

* ある小説での記述の事実関係

をめぐる、ある人から

* 提訴される

という事態にいたり、それが原因で、確か2004年に

* 私小説を書くことを断念すると宣言

なさったと何かで読んだ記憶があります。しかし、かつて、

* すさまじいまでの私小説を書いた、その筆力は今なお健在

であり、エッセイ風の味わいのある作品を書き続けていらっしゃいます。

*

今、紹介した2人の作家の例を見ても分かるように、

* 定義からしてモデル小説になるしかない運命をもった私小説を、出版し、流通させることは、ほぼ不可能になってきている

と言えそうです。

* プライバシーの侵害や、名誉毀損といった人権にかかわる問題を無視することができない

情勢になっているからです。人権意識の高まりと、裁判所での判例の積み重ねが、その背景にあります。

それにもかかわらず、

* ブログという形態で、毎日数えきれない「私小説 or 心境小説」＝「日記」＝「ときにはエッセイ」、が書かれ、ネット上を飛び交っている

のです。なかには、

* 個人を特定されたくない

ため、

* 詳細を改変

したり、

* 匿名、あるいは、ハンドルネーム

で、「日記」というジャンルの文章を

* 公表

なさっている方々がいらっしゃるでしょう。

蛇足ですが、

* 書くという行為において、事実と虚構を分ける

ことには意味がありません。あるとすれば、

* ゴシップ的な意味

しかありません。つまり、

* 「誰々さんが何々したのは、本当か嘘か？」という次元での興味本位の話題でしかない

という意味です。

* フィクションとノンフィクションとの分類

こそ、もはや、

*化石

というべきでしょう。なぜなら、

*書かれたものはすべてが「フィクション＝虚構＝ただの言葉＝嘘＝お話」であり、現実・事実とは「異なる＝とてつもなくズレている」

からです。

*

そうしたややこしい話はどうでもいいです。大切なことを繰り返します。

*現在、この国で、かつての純文学の伝統に沿った、私小説および心境小説が、ブログの日記という形で、多量に書かれている

のです。

これを、

*空前の「純文学」ブーム

あるいは、

*空前の「純文学」復興運動

と言わずして、何と云えばよいのでしょうか？

*プロ vs. アマ

とか

*出版界 vs. ネット空間

などといった

*無粋で無意味な分類＝2項対立

はしないでおきましょう。

ブログという形での「公表」なら、

*裁判所などというお節介なお役所

の世話になることはほとんどないと思います。ただし、

*実名を挙げての個人攻撃や、中傷や、八つ当たりの攻撃をしない限り

です。

自分も、定期的に読んでいる特定のブログ日記があります。日記ですから、

*ある程度の長さを読んでいないと、つまり、ある程度前の記事から読んでいないと、登場人物や設定が分からない

という側面があります。それこそ、

*小説と同じ

です。日記の書き手宛に、

*コメント

を書き込んだり、

*メール

を出すこともあります。

*ハンドルネームをつかっての関係

ですが、フィードバック＝返事があるとやっぱり嬉しいです。もちろん、積極的にかわることなく、ただ、見守っているだけのサイトもあります。

このブログのように、友達のいない

*モノブログ（＝マイペースで孤独なブログ）

もあれば、おたがいに異なる点を見とめ合う形で、いろいろな人とつながっている

* コラブログ (= 仲間の多い、あるいは、仲間を増やしたいブログ)

もあります。そうした友好的なサイトを見つけると、心がなごみます。なお、今つけたブログの分類については、「コラブログとモノブログ」2009-01-31 という記事のなかで書きましたので、よろしければ、お読みください。

*

* 「純文学なんておおげさだよ。しょせん、素人の日記じゃん」

という意見もあるでしょう。でも、

* ブログ日記 = ある種の純文学と、通常、個人がノートなどに書いている日記とのあいだには決定的な違いがある

と思います。それは、ネット空間で、

* 公表されている

という点です。したがって、

* 個人的なメモや記録的な要素が弱まり、第三者の目を意識したうえでの「作為」ないし「演技」「物語性」という要素が強まる。

という特性が顕著になります。言い換えるなら、

* 第三者に伝えようとする意志が、文章を書くスタイルに表れる = 現れる = 出る。

ということです。

* 「作為」・「演技」・「物語性」

とは、

* 「かつて純文学の規範 = 王道とされた私小説と心境小説が排除しようとし、排除し切れなかった要素」 = 「言葉で書かれたものであるあらゆるテキスト (= フィクション) にこびりついている属性」

です。こうしたややこしい話も、どうでもいいでしょう。

*

で、

*「純文学の復興運動」

に疑問をお持ちになっている方は、これを機に、ぜひブログ日記を実際に読みになってみてはいかがでしょうか。さまざまな書き手があります。さまざまな文章・文体・スタンスがあります。なかには、

*かつての私小説や心境小説を彷彿（ほうふつ）させる文章

もあります。

ブログに限らず、ケータイや、ネットを介しての音楽配信、各種のビジネス、オークション、SNS、ツイッター、ネットゲームなど

*ネット上のさまざまな新規の仕組みが、既存の仕組みを変えたり、場合によっては世の中の流れに大きな影響をおよぼしている

ことは、もはや動かせない、そして元に戻せない現実＝事実です。だから、権力・既存体制・既存権益の受益者たちは、本気でビビっているのです。なかには、ネットにすり寄ってくる者たちもいます。

それはさておき、ブログで日記を書いている方たちに、陰ながらエールを送らせてもらいます。

ガンバレ～。このアホも、とちくるったエッセイもどきを書き続けま～す。

ということで、本日はこれで失礼いたします。では、また。

かき回せ ネットの力で 世を変えよ

09.06.28 「時間」と「とき」

◆「時間」と「とき」

2009-06-28 10:18:14 | 言葉

「時間」と「とき」について考えています。なぜ、

* 「時間」と「とき」を分けて表記した

のかと申しますと、何だか両者が違うような気がするのです。どういうふうに違うのかは、まだ分かりません。

* 「まだ」

と書いたからには、

* 「これから先に」

「分かる」ことを想定しているわけですが、心もとない気分です。とはいうものの、まさに、たった今書いた、

* 「まだ」や「これから先に」について考えること自体が、もう「すでに」「時間」あるいは「とき」を思考の対象とする行為である

と思います。つまり、「時間」or「とき」について考える機会と材料は、あちこちに転がっている＝ざらにある、ということです。すると、心強い気持ちになってきます。

で、これまでと同様に、

* 今、ここにある物・事・現象を観察し、手持の知識と記憶を頼りに、でまかせ＝偶然性に身をまかせながら、楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくやろう、お勉強ごっこ」を実践していく

つもりです。それしか、自分には方法が思いつかないだけなのですけど。

* 「ま、いっか」主義＝ブリコラージュ状思考態

でいきます。とはいえ、このブログを書いているアホは、アホなりに本気ですので、気長に付き合ってくださいれば、嬉しいです。

*

そんなわけで、以下に述べるような問いを投げかけられたり、フレーズを見聞きすると、困ってしまいます。

* 「真理 (or 存在 or 運命 or 愛 or 無 or 哲学 or 生きる意味 or 心) とは、何か？」

とか、

* 「真理 (or 存在 or 運命 or 愛 or 無 or 哲学 or 生きる意味 or 心) について語る・考える」

などです。

うーむ。やはり困りますね。というのも、尻尾のないおサルさんが言語とやらを獲得し、晴れてヒト、つまりホモ・サピエンスになったとかいう馬鹿話を前提とするなら、次のようにしか考えられないからです。上述の、

* 「真理 (or 存在 or 運命 or 愛 or 無 or 哲学 or 生きる意味 or 心) などは、すべてヒトという、ずれた生物が口にした、つまり作ったものである、言葉にすぎない、

みたいな気がするのです。

* ヒトには、何でも言葉という形で作ってしまう習性がある

と言えそうです。

「初めに言葉ありき」とかいうフレーズが書いてある世界的なベストセラーがあるとかないとか、聞いたことがあります。それとは、異なるのかもしれませんが、初めに言葉があるなんて、すごく「言えてる」なあと、つくづく思います。

何を言いたいのかと申しますと、言語活動 or 言語能力という、ヒトという生物に固有

の習性が先走りした結果、本末転倒が起こっているのではなかろうか、と懸念しているのです。

たとえば、「真理＝まこと」という言葉を口にするのが先で、その後になって、「その意味は？」という疑問が口にされ、あーでもない、こーでもないで大騒ぎしているみたいに見えるのです。これって、滑稽じゃありませんか？ 見方を変えれば、憐れじゃありませんか？

なにしろ、作っちゃったから、引くに引けなくなって大騒ぎしているのですよ。と言いながら、この駄文を書いているアホも、「○○とは、何か？」になって、ここでやっているのです。ヒトである以上、避けられないのでしょうね。投げた石は自分の頭に落ちてくるとも言えそうです。

話を、少し変えます。

*

このブログでは、以前から、

*あくまでも「言葉」にこだわり、いわゆる「概念」や「実体」には直接的にかかわらない。

という態度をとるように努めてきました。

*「言葉」と戯れているうちに、あとからついてくる形で、「概念」「実体」にかかわることができれば、いいなあ、

くらいの気持ちです。抽象的に、論理的に、あるいは筋道を立てて、体系的に論を進めていくという作業が、苦手だからです。つい、勘・感・観に頼ってしまいます。そのため、支離滅裂で、トリトメがない文章になりがちです。

*論理や筋道や体系化を信用していない

という強い気持ちもありますが、負け犬の遠吠え的な悪態＝罵倒として受け取られるのがオチです。

*

事務的なお話は、このへんで止めておき、本題に入ります。

* 「とき」だらけなのが、ヒトが生きるということである

と言えるように思えてなりません。

で、ふと、思いつきました。漢語系の言葉である

* 「時間」を物理的な time

とし、大和言葉系の語である

* 「とき・時」をヒトが意識している time

として、このブログで、とりあえず、つかいわけてみます。あくまでも、「とりあえず」です。間に合わせです。でまかせです。都合が悪くなったら、つまり、つかえなくなったら、変更するつもりですけど。

*

で、こんなふうに、「時間」と「とき」を分けることで、これまで言いたかったのに、言葉にできなかったことが言える＝書けるようになりました。何を言いたかったのかと申しますと、

* 物理的「時間」と、ヒトの意識する「とき」とが、ずれているのではないか

という、かなり以前、というか、幼い頃から漠然と感じていた疑問というか、違和感というか、不思議な現象なのです。

以前、このブログに「架空書評」を寄稿して下さっていた孟宗竹真（もうそうだけまこと）という詩人兼何かのご職業をなさっている人が、第1回目として投稿して下さった「架空書評：狂った砂時計」2009-01-13 でもテーマになっている、

* 「人間をはじめとする地球上の生物の時間感覚と、物理的な時間のずれ」

という言葉思い出します。今、問題にしようとしているのは、まさにそのことなのです。ご興味のある方は、ぜひ、孟宗竹真氏の上記のブックレビューをご一読ください。

で、今、問題にしているのは、みなさんも、おそらく、日々、お感じになっている現象というか、気分というか、あの

* 「ズレた感覚」

のことです。

* 「うそーっ、もう、『ちびまる子ちゃん』の時間なの？ あれから1週間経ったの？ 信じられない。2、3日前って感じがする」

なんてシチュエーションを、大小合わせれば、自分の場合、それこそ、はっきりなしと言っても言いすぎではないくらい頻繁に経験します。みなさんは、どうですか？ 「はっきりなし」は言いすぎですか？ 「たまに」くらいですか？ 「ときどき」くらいですか？ 「まれに」ですか？ たった、今「○○」と括弧でくくった言葉たちも、「とき」を表す言葉ですね。

* 「とき」とは、きわめて個人的な体験＝現象である

と言いたいのですが、賛成していただけますか？ 個人的だと考えているくらいですから、1人で決めつけるのも気が引けるのです。そう言うわりには、いつも、勝手に＝でまかせに、どんどん決めつけているではないか、と言われれば、返す言葉もありませんけど.....。

自分は友達がいないので、こういう微妙なことを尋ねたり、話す相手が身近にいないのです。この種の質問は、親には、ちょっとしづらいです。こちらの目を怪訝（げげん）な目つきでまともに見ながら、

* 「あんた大丈夫？」

と言われそうだし、高齢の親に要らぬ心配をさせたくありません。

というわけで、「とき」とは、きわめて個人的な体験＝現象である」ということで、話を進めさせてください。

*

ところで、「とき」がきわめて個人的な体験＝現象だという場合の、

* 「体験」と「現象」

ですが、「体験」が個人的＝主観的であるのに対し、「現象」は客観的な響き＝意味合いをもっている言葉ですね。主観も客観も突き詰めて考えると、大問題ですが、ややこしくなりそうなので、今は保留しておきましょう。

で、

*「時間」という物理的な現象と、「とき」という主観的＝個人的体験との「あいだ」に、「ズレ」を感じる「とき」、その「ズレ」は物理的な現象であるというより、むしろ主観的＝個人的体験であると考えるのが妥当であろう。

と思っています。何だか、物理学、あるいは、物理学に関する「言説＝お話の言葉づかい」に似てきました。でも、このブログは、ゲイ・サイエンスをやっているので、

*物理学は関係ない

と、別に言わなくてもいい断りの言葉を、いちおう、申し上げておきます。

で、今、思い出したのですが、物理学や数学では、日常の言語が、つかいものにならないために、特殊な言語をつかうというのは本当なんでしょうか？ そんな話を何かで読んだ記憶が、ぼろりと出てきたのです。思い出したら、すごく気になってきました。

……………

ちょっとネット検索して、お勉強をしてみました。といっても、

*ウィキペディアで、物理学、数学、自然言語、人工言語を検索して、斜め読みして、うんざりして、引っ込んだ

だけです。かつて、ちょっと、かじって、ひどい目にあった

*コンピュータ言語や、それとは全然違うものである、機械語＝マシン語

など、今はきれいさっぱり忘れていた言葉を、検索中に思い出しそうになったのです。だから、ウィキペディアから逃げてきました。このへんの経験については、

* X68000 というPC

がらみで「「人間＝機械」説 (2)」2009-04-24 に、少し書きましたので、興味をお持ちになった方だけ、ちょっと目を通してください。この手の話が苦手な方は、パスしちゃっていっこうにかまいません。

ああいう、話にはついていけません。もっとも苦手とするお話＝フィクションです。ですので、

*物理学も人工言語も関係ない

でいきます。というか、扱えないのです。脳の情報処理能力が低いということです。本当は扱いたいのです。数学や物理学、勉強してみたいです。でも、これまでの経験ですと、駄目なんです。そうした未練があるせいか、

*マシン語＝麻疹語＝魔人語

という言葉が、ノイズのように、またあたりに浮かんできました。これってトラウマになっているということでしょうか。マシン語をやるくらいなら、ヒマシ油かマシン油でも飲んだほうがマジでマシです。それよりピジン語やオジン語やオヤジギャグのほうが自分には楽しいし、合っています。

なお、たった今、書いた部分に、深い意味はぜんぜんありません。魔よけのおまじないの文句みたいなものです。暑くて熱くなり、いつも起している脳の誤作動がエスカレートしただけです、たぶん。と、念のために、書き添えておきます。

*

で、話をもどします。さきほどのフレーズを繰り返させてください。

*「時間」という物理的な現象と、「とき」という主観的＝個人的体験との「あいだ」に、「ズレ」を感じる「とき」、その「ズレ」は物理的な現象であるというより、むしろ主観的＝個人的体験であると考えるのが妥当であろう。

再度読み返してみると、当たり前のことを言っているのに気づきました。犬が西を向けば、尻尾は東を向く、と同じくらい当たり前のことじゃないですか。でも、そういう当たり前に思えることが気になり、つい、こだわってしまうのです。やっぱり、アホですね。それに、そうしたことにこだわったとしても、そもそも、

*物理的な現象

など、このブログで扱えるわけがありません。

*物理学という学問＝お話＝フィクションの訓練

を専門的に受けた人なら、

*物理的な現象を、あくまでも、学問＝お話＝フィクション＝錯覚として、扱える

とは思いますが、素人で、しかも、アホである自分には

*その種の錯覚をいただく

のは無理というものです。そうです。いわゆる、

*「物理学」という「錯覚」をいただけるようになるのにも、訓練と苦節が必要

なのです。というわけで、冒頭からくだくだとつづっている、

*個人的に、勝手に1人でいただくことが可能な錯覚と妄想

の続きを、「ま、いっか」主義＝「ブリコラージュ状思考態」で書いていきます。

*

まず、原点にもどります。上で書いた、

*何か or 誰かを待っていて、時計を見る

にまで、もどりましょう。「とき」を意識するという意味では、格好の題材となる経験＝行為＝状況です。

みなさんはどのような時計をお持ちですか？ 2本の針が右回りにまわる

*アナログ式の時計

とか、

数字が表示されるだけの

*デジタル式の時計

が代表的なものです。

孟宗竹真氏の「架空書評」で出てきた「砂時計」もあります。昔は、日時計、水時計なんてものもあったようですね。高校時代に英語の先生が教えてくれた話があります。結論から言うと

*「とき」は「聞くもの」から「見るもの」へと変わった

ということです。英語で「時計」にあたる単語を挙げましょう。

* clock : 置き時計や掛け時計のたぐい : 語源は、「鐘」:「なぐる、打つ」の意味もある

* watch : 懐中時計や腕時計のたぐい : 語源は、「眠らずに起きている」:「じっと見る、見張る、不寝番をする」の意味もある

で、「とき」とは、次のような順で、ヒトの日常生活において活用されるようになったらしいのです。大昔は別にして、この国やヨーロッパの中世くらいからのお話だと思ってください。

教会やお寺や集会所など、共同体のセンター＝本部で、鐘を打って「とき」を共同体のみんなに知らせる。たぶん、そのセンターには、当時は非常に高価で珍しいものであったと思われる、置き時計や掛け時計のたぐいがあったらしい。⇒ふつうのヒトたちにとって、「とき」は、遠いところにある「鐘の音」として「聞くもの」であった【※どうやら、「鐘（かね）のある所には金（かね）があった」、と言えそうですね。現在でも、東西を問わず、鐘と金が同居する宗教施設が多いような気がします。】

↓

経済的余裕があるヒトたちは、自分の家で、おそらく1台だけ高価な置き時計や掛け時計のたぐいを設置するようになった。⇒一部のヒトたちにとって、「とき」は、ボンボンとかチャリンチャリンとかいう具合に、時計に付属する小型の「鐘の鳴る音」が家のなかで響くという形で、「聞くもの」となったと同時に、「長短2本の針の組み合わせ」として、「見るもの」にもなった

↓

ヒトびとにもっと経済的な余裕ができてくるにつれ、超小型で精巧であるだけに宝石のように高価な、懐中時計や腕時計のたぐいを携帯するヒトが現れるようになった（そういえば、現在とてつもない高価な時計を手首に着けることはステイタスですよ、それに時計屋さんで宝石が売られているのを考えると Time is money. じゃなくて、時計が宝石と同列に扱われていることに「なるほど」と思ったりします）。⇒そのごく一部のヒトたちにとって、「とき」は、手のひらに乗せることができるほどの小型の精密な器械にそなわった、「長短2本の針の組み合わせ」として、「見るもの」にもなった。

以上は、高校の先生から聞いた話と、その後に得た知識を組み合わせ、ただ今即席でつくった、素人の思いつき＝お話＝フィクションです。詳しいことのお知り方は、どうかお勉強なさってください。思いつきとはいえ、それほど、的外れなお話ではないかと思えますけど。

ちなみに、フランス語でも、懐中時計や腕時計のたぐいを意味する語 montre は、「見せる」という意味の語 montrer と同系です。一方の置き時計や掛け時計のたぐいの horologe

は、英語の hour と同系の語です。horloge (「オルロージュ」みたいに発音します) と hour (「アウアー」みたいに発音しますね) って、何となく似てませんか。

両方とも、h を発音していない点に注目してください。英国が、かつて、フランスの北にいた民族に征服されて (※「ノルマン・コンクエスト」と高校時代に「世界史」で習いました)、フランス語が英語に混じったさいの名残だそうです。honest (「オネスト」)、honour = honor (「オナー」) なんかも、そうらしいです。

で、ドイツ語では、この英語の hour と同系の語 Uhr (「ウーア」みたいに発音します) が、置き時計や掛け時計のたぐいと、懐中時計や腕時計のたぐいを意味する語の両方でつかわれています。区別するさいには、前後に何かをつけて造語しているようです。hour と Uhr も似ているような気がしませんか。

ヨーロッパの諸言語は、方言ぼくって、おもしろいですね。昔、独仏語のバイリンガルであるドイツ国籍の人と知り合いになりましたが、その人に言わせると、たとえば、フランス語や英語を知っていると、スペイン語やポルトガル語やイタリア語の新聞なんか、ちょっとしたコツを覚えると、7割くらいは意味がとれると言っていました。

で、英語の hour が気になったので、辞書で調べてみました。

* hour : 時刻、(60分という意味の) 時間、時代、(特別な) 時 : 語源は、「ある特定の時・時期・季節 ← 過ぎ行くもの」

以上です。

*

さて、このように、

* 「時間」や「時刻」や「とき」というものを知る = 意識する

ためには、

* 「聞く」 = 「耳をつかう」と、「見る」 = 「目をつかう」

が大きな役割を果たしていることが分かります。もっとも、以上は、日時計、水時計、掛け時計、置き時計、懐中時計、腕時計といった

* 時計という機械 = 器械 = 計器

によって、

* 「とき」を分けて＝細分化して、「時間」「時刻」として知覚する

行為です。それ以外に、たとえば、

* 腹時計、太陽の位置を見る、他の生物の行動、明暗、寒暖を知覚するという、機械＝器械＝計器に頼らない、「とき」or「時間」「時刻」の知覚の仕方もある

と言えそうです。

*

実は、たった今書いたことは、ある実体験を思い出したものです。

ある時、

* 「消えてしまおう」と思って山に入って、一晩を過ごした

ことがありました。

時計はもって行きませんでした。その時の状態・状況・様子、つまり、ある日の午後から翌日の正午くらいまでのあいだの記憶をたどってみると、やたら、「とき」or「時間」「時刻」が気になったのを思い出します。

* 迷っていた

のです。

* 「消えてしまおう」という気持ちが強くなる

と、「とき」が気になりません。まったく、気になりません。

* 「やっぱり、帰ろう」という気持ちになる

と、「とき」を知りたくなります。むしように知りたくなります。そのうち、こころの迷いだけでなく、道に迷ってしまい、てんでこ舞いしたというお恥ずかしい結末を迎えました。

その結末はさておき、里が恋しくなった＝人生に未練を感じた時に、

* どうやって「とき」or「時間」「時刻」を知ろうとしたか

と申しますと、それが、腹時計からはじまる上述の方法でした。自分はアウトドア的な活動が苦手ですが、今申し上げたような経験があります。

* キャンプや登山や山歩き

などが好きな方なら、ほかにも

* 時計に頼らずに「とき」を知る方法

をご存知にちがいありません。なにしろ、

* 自然は「とき」の「印・徴（しるし）」に満ちている

のです。自分の場合には、あの苦い体験で知りました。

*

で、自分なりに、そのほかにも、「とき」を知る方法がないかと、山のなかではなく、今、PCを前にして考えているのですが、

* 何かが「変化していく＝移り変わっていく」「さま・様・様子・模様」＝「過程」＝「流れ」＝「動き」を知覚する

方法もありそうです。今、あたまたに浮かんでいるのは、

* 食べ物

です。ぶっちゃけた話、お腹がすいているのです。

太古にヒトが、まだ農耕や牧畜という手段を思いつくまえ、つまり、

* 自然界にあるものを採取・狩猟・漁労という手段によって手に入れて、食べていた

という、中学と高校の社会科なんかでならったことを思い出しています。で、当時のヒトたちが、

* 食べるために取ってきたものをじっと眺めている

という様子=光景が、さきほどから、あたまたに浮かんでいます。食べるために取ってきたものをじっと見つめているのは、

*腐ってしまうと困る

から、どうしようかと考えているのです。かといって、食べるのにも限度があります。だから、食べきれないものを見守っています。

*食べ物はいつも手に入るわけではなかった

と思われます。比較的長く保存できるものと、できないものがあります。その保存できないものを、見守る。とうぜん、

*変化

があらわれます。

*腐敗の進行

です。

*夢野久作（1889-1936）の『ドグラ・マグラ』

という奇妙な小説を思い出しました。さらにまた、高校生か大学生の頃に、リンゴが腐っていく過程を撮った短編映画を見た記憶がよみがえってきました。英国かどこかの前衛作品=実験作だったような気がします。こうした

*ものが朽ちていくイメージ=光景も、「とき」=「うつりかわり」と重なる

感じがします。ということは、

*「としをとる」ということも、一種の腐敗だ

とも言えそうな気がしてきました。

* We all live and die. だから、I'm alive. = I'm living. = I'm dying. であり、生と死は連続している。

ということでしょうか。

*

空腹のせいかな、ぼーっとしてきました。あたまの整理をする必要があるみたいです。思いつくままに、大和言葉系の語を並べてみます。

*かわる・変わる・うつる・移る・うつりかわる・移り変わる・すぎる・過ぎる・へる・経る・へだたる・隔たる・ま・まあい・あいだ・間・こく・刻・とき・時

こんなところでしょうか。これらの言葉の羅列をじっと見つめて、「とき」「時間」「時刻」について、引き続き考えてみます。

*

トリトメのない文章をお読みいただき、どうもありがとうございました。では、また。

生まれ死ぬ あいだなどなく 生まれ死ぬ

詠めないが ネット下俳人 自称して

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

◆「揺らぎ」と「変質」

2009-06-29 10:21:31 | 言葉

まず、引用させてください。

★

*「普遍性」の1つである「表象という仕組み＝メカニズム」とは、ヒトをつなぐと同時に、犯す＝侵す＝冒すという怖い側面をもっている。

とも言えそうです。では、ヒトは「表象という仕組み＝メカニズム」という「普遍性」をまえにして、なす術（すべ）をもたないのでしょうか？

そんなことはないと思います。アホの結論として、聞いてください。

*待てばいい。時間をかせげばいい。「表象という仕組み＝メカニズム」は、実は時間にすごく弱い。「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる。これが、「表象という仕組み＝メカニズム」であるなら、「何か」と「その「何か」ではないもの」に「揺さぶり」をかければいい。その「揺さぶり」をかけてくれるものとは、おそらく、「表象という仕組み＝メカニズム」よりも強力な「時間」ではないか。時間の経過とともに、「表象という仕組み＝メカニズム」は揺らぐ＝変化する。言い換えると、「何か」と「その「何か」ではないもの」の両方が、時とともに変質する。

そんなふうに思っています。

*のりくらし。じわりじわり。そうしながら、「表象という仕組み＝メカニズム」を徐々に追いつめ、隔たり＝間＝際を埋めていく。あるいは、間＝際をずらしていく。そのうち、メカニズムそのものが変質していく。

そんなふうに簡単に言えるとも思います。

【中略】

*わあい＝和愛＝輪愛＝和気あいあい

*セサミ・ストリートで、「わあい、わあい」＝「和気あいあい」

* 「間（ま・あいだ・あわい）＝際（さい・きわ）」

* あわいわあい＝淡い間＝時間（とき＋あわい）

とはいうものの、

* いかに淡くても、「あわいわあい」＝時間（とき＋あわい）は強力だ

と信じています。ふと、

* 時の神クロノスが、武器として鎌（かま）をもっていた

ことを思い出しました。

* もっとも時を恐れるのはヒト

です。ということは、

* 時は、ヒトがつくりあげた「表象という仕組み＝メカニズム」をも駆逐してくれる

のではないのでしょうか。ただ、心配なのは、

* 「表象という仕組み＝メカニズム」とともに、ヒトも駆逐される

ということです。つまり、

* 時をじわりじわりと追いつめることで、ヒト自身がじわりじわり追いつめられる。

こともあると言えます。でも、

*結論や結果を急いで、一気になくなる＝無くなる＝亡くなる＝滅亡するよりは、まし

ではないでしょうか。

★

以上です。「時の神＝あわいわあい (2)」2009-06-2 からの自己輸入＝自己引用です。長くて恐縮しておりますが、きのうから、

*物理的な「時間」という現象と、ヒトが知覚し意識する「とき」

について考えている契機となった文章ですので、ご勘弁を願います。上の文章を書いたから、いろいろ考えてきたことを、きょうはまとめてみたいと思います。

まず、当たり前だと思われることから考えてみます。

*今、この記事を書いている自分と、上にコピペした文章を書いていた時の自分とは、「時間」および「とき」を隔てているという意味では、異なっている＝ズレている

と言えそうです。

*森羅万象は常に変化の過程にある

という思いが自分には強くあります。したがって、今、PCに向かって文章を書いている自分も刻々と

* 「変化しつつある」

わけです。もちろん、PCも、そして、PCがつながっているネット空間も、PCの置いてある部屋も、部屋のある家も、家を取りまく環境すべてが、です。

その場合の「変化」というのは、物理的な「時間」という現象上の「変化」と、ヒトが知覚し意識する「とき」における「変化」の2種類みたいなのですが、この両者が

* 「異なっている=ズレている」

と考えられます。というか、ヒトにとっては、そのように

* 知覚され、意識される

という意味です。

* 客観的にどうであるか

は、このブログでは扱うことができません。問題にしていません。最初から、白旗を掲げているようなものです。でも、あえて、気になるので、こだわって、このブログを書いています。まず、そうしたスタンスで書いていることを確認しておきます。

で、上の引用文を書いた数日前であれ、この記事を書き始めたついききであれ、過去に起きたこと、および、過去の自分というものを思考の対象にしようとする時、

* ヒトという種（しゅ）は、時間の処理が知覚のレベルにおいても、意識のレベルにおいても、きわめて不得意なのではないか

と思えてなりません。では、何と比べて「きわめて不得意なのか」と申しますと、

*空間の処理

です。このブログでは、さきほど述べましたように物理的現象や客観的事実を扱う余裕も能力もありません。正確に言えば、

*物理的現象や客観的事実は、おそらく「物理的」「客観的」ではなく「虚構的」なものだ

と考えています。きのうの記事で触れた

*いわゆる「自然言語」と「人工言語」

の話になってしまいますが、ヒトが日常的に使用している言語の不都合な部分を回避する、あるいは、除去するために、ヒトが生み出した人工言語というものも、しょせん、

*ヒトにとっての不都合を解消しようとする、というきわめて人為的な目的のみを達成するだけのものであり、それは、ヒトがイメージする「物理的」「客観的」とは、おそらく異なるレベルにあるのではないか

と考えています。その意味では、

*いわゆる「自然言語」と「人工言語」の差異は、機械、または機械に制御されるシステムというヒトが生み出した「絶対的な他者」、および、たとえば、月、土星、遺伝子、原子、素粒子を含む森羅万象という名で呼ぶことも可能な「絶対的な他者」に、いくらか働きかけることができる限定的な有効性を備えている、という程度の隔たりしかない。

と言えるように思います。だからこそ、

*ヒトは仲間を月面に立たせたこともあり、土星探索機カッシーニが土星の衛星の画像を送り続けているのであり、遺伝子研究は遺伝子操作にまで手を広げつつあり、数知れない原子爆弾がこの惑星に存在しているのであり、また、禅問答や不条理劇にも通じる摩訶不思議な素粒子に関する理論=説=フィクションで、ノーベル文学賞ではなく物理学賞を受賞するヒトがいる

わけです。すごいと言えばすごい (=進歩)、そんだけーと言えばそんだけー (=停滞)、という状況です。

簡単に言えば、

*「人工言語」は「自然言語」の一種 or 変種であり、ヒトの、ヒトによる、ヒトのための言語であり、たとえば、機械 (or 遺伝子 or 素粒子) の、機械 (or 遺伝子 or 素粒子) による、機械 (or 遺伝子 or 素粒子) のための言語ではない。

ということです。もちろん、以上は、私見であり、妄想であり、数学や理系の科目が苦手なアホの嫉妬から来る悪態=罵倒=皮肉であり、駄目押しに言うならアホのでまかせ以外の何ものでもありません。

で、以上のことを前提に話を進めます。

*ヒトは、空間と時間というものを、主に知覚器官を使用して知覚し、そこで知覚された信号を、ニューロンを通して、脳に伝え、脳細胞においてその信号を情報としてデータ処理し、意識というスクリーンに映し出す。ただし、意識というスクリーンは、きわめて気まぐれ=信頼性に欠けていて、知覚されデータ化された情報を反映するとは限らず、知覚されていない、あるいは、データ化されてもいない情報をも、映し出すらしい。

と考えています。これを図式化=チャート化すると、以下のようになります。

(知覚器官で森羅万象の一部を信号として)「知覚する」

↓
(知覚器官で知覚した信号を)「データ化する=情報として受け取る」
↓
(データ化された情報を脳細胞が)「処理する」
↓
(脳細胞が処理した情報を「脳？」が)「意識というスクリーンに映し出す=意識する&イメージをいただく」(※「脳？」は「自我」や「こころ」や「意識」と呼ばれているものに近いと言えるかもしれない)

以上の過程をへて、空間と時間が最終的に、「意識する&イメージをいただく」という段階にいたると仮定してみます。ここでの、

*「イメージ」とは、個人が勝手にいただく、個人差のある、きわめて不安定なものだ

と考えてください。さきほどの文章にある「知覚されていない、あるいは、データ化されてもいない情報をも、映し出すらしい」にあたります。

*「意識+イメージ」の不安定さ=テキトーさ=でたらめさは、ヒトの身体という「ある種の機械=精密なシステム・仕組み」と、ヒトの身体の外側という「偶然性に満ちた時空=環境」とが出合う「境目=境界=縁」で起こる、一種の混乱の結果である

という見方も可能かと思われます。

話を少しずらします。

以前、NHKテレビの講座で、2年ほど手話を勉強したことがあります。その経験と、その経験を通して初めて知ったことについては、「平安時代のテープレコーダー」2009-04-19と「言葉を奪われる」2009-04-20に書きました。お読みいただければ、幸いです。で、その講座で学んだことのうち、きょうのテーマと深い関係がありそうな話をしてみます。

「時間」および「とき」を大雑把に3つに分けて、

* 「まえ・前・未来・将来」 / 「あと・のち・後・過去」 / 「いま・今・現在」

を考えてみましょう。これを手話の動作＝仕草＝身ぶりで表してみると、

* 「まえ・前・未来・将来」は、右手の手のひらを前方に向ける形で、前へ差し出すような仕草となり、(※受講中、ある年度の講師を務められた方は、左利きだったので、「右手」は「利き手」とするのが正確かもしれません)

* 「あと・のち・後・過去」は、右手の手のひらを後方に向ける形で、肩のほうに、あるいは、肩越しに後ろへと差し出すような仕草になり、

* 「いま・今・現在」は、両手のひらでお腹の前の空間をぐいぐいと下へ押さえつけるような仕草になります。

「少しまえ or あと・さき」「1週間まえ or あと・さき」「かなりまえ or あと・さき」は、以上の仕草を基本として、指の数や、仕草の大きさ・微妙な変化＝バリエーションで表していたという記憶があります。詳しいことは忘れました。

以上のことから、そういえば、日本語でも、英語でも、基本的に＝概ね

* 時間と空間に共通して「前」「後」に相当する言葉をつかう

ことができることに気づきました。

* 言葉＝言語という仕組みが、比喩を基盤にしていることを示す好例だ

と思います。で、

* 比喩＝たとえる＝こじつけるという、個々の言葉＝単語を用いた操作は、「AをBにたとえる」という具合に、BとAのあいだに主と従の関係を想定しているのではないか

という疑問がわきました。確認しておきますが、

* Aが従、Bが主

です。その逆ではありません。

たとえば、「歴史（時間）を川の流れ（空間）にたとえる」「人類の進化（時間）を生物の成長（時間および空間）にたとえる」「子どもから大人への成長（時間）を、階段を上る行為（空間）にたとえる」という言い方があります。「AをBにたとえる」というさいには、Bが主で、Aが従だという感じがしませんか。

また、「歴史（時間）を長い紙の年表（空間）として表す」「スケジュール（時間）を手帳（空間）に記す」「時間の経過をカレンダーという形で示す」「時間の経過を時刻（＝ときを刻む行為）として、時計という計器で見える化する」という行為でも、同様な感じがしませんか。

* Aという現象をAそのものを用いて説明できない＝限界があるために、その代わりに、Bという現象に頼る＝助けを求める

とも言えます。つまり、AはBに依存しています。でも、言いたいことはあくまでも、Aなので、主従という関係を持ち出すのは、本当は意味がない＝適切ではないかな、とも思っていますが、ここでは、とりあえず、この図式＝フィクションを採用しておきます。この点は、いずれ、じっくりと考えてみたいです。

で、これまた勘＝でまかせ＝話のでっちあげ、なのですが、上述の限界が理由で、

* やむをえず＝仕方がないので＝残念無念ながら

*ヒトは空間を主に、そして時間を従にして、たとえている

のではないのでしょうか。

*ヒトは、空間的（＝視覚的）イメージを時間的（＝聴覚的？）イメージに優先させる＝ヒトは、時間的（＝聴覚的？）イメージよりも、空間的（＝視覚的）イメージをいただくほうが得意である＝ヒトは、時間的（＝聴覚的？）な情報処理よりも、空間的（＝視覚的）な情報処理のほうが得意である

と単純化してみました。どうでしょうか。全部、「やむをえず＝仕方ないので＝残念無念ながら」なのですが、話がややこしくなるので、それにはあまりこだわらないでおきましょう。なお、

*「時間的（＝聴覚的？）」

については、まだ考えが煮詰まっています。

* 音声が時間的に知覚および認識される

ような気がするので、そうした表記もできるかな、と思っているのですが、

* 記憶という時間的でもあり空間的でもあるものを考えてみると、当てはまらない

という気持ちも強いですが。今は、よく分かりません。つまり、話をでっちあげることができません。今後、もっとよく考えてみます。

さて、ここで話を飛躍させます。申し訳ありませんが、いささか強引＝乱暴＝やりすぎな方法で、考えを進めます。正直申しまして、月曜日は、洗濯、買い物など、こなさな

ければならない家事が多いのです。で、冒頭の引用部分で、いちばん、気になる個所を再度、引用させていただきます。

*待てばいい。時間をかせげばいい。「表象という仕組み＝メカニズム」は、実は時間にすごく弱い。「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる。これが、「表象という仕組み＝メカニズム」であるなら、「何か」と「その「何か」ではないもの」に「揺さぶり」をかければいい。その「揺さぶり」をかけてくれるものとは、おそらく、「表象という仕組み＝メカニズム」よりも強力な「時間」ではないか。時間の経過とともに、「表象という仕組み＝メカニズム」は揺らぐ＝変化する。言い換えると、「何か」と「その「何か」ではないもの」の両方が、時とともに変質する。

以上です。この舌足らずな文章で言いたいことを、補足説明したいと思います。

大雑把な言い方を箇条書きにしてみます。時間的な余裕がないので、この記事のために、きのう用意した走り書きメモを、そのまま写すことになりそうです。横着をして、すみません。

*ヒトにおける「表象という仕組み＝メカニズム」(=「「何か」の代わりに、その「「何か」以外のもの」を用いる操作)は、視覚的なイメージ＝映像＝アイコンを基本とする。(※この場合の、イメージはヒトが個人レベルで勝手にいなく、きままでテキトーなものではなく、複数あるいは多くのヒトたちによって、同様なイメージを喚起するものとして共有されている、映像＝形＝図像＝アイコンを指す。たとえば、文字、数字、記号、ロゴ、静止画像、動画など。)

*さまざまな表象のなかで、とりわけ重要な意味を持ち、使用頻度も高い、言葉＝言語、および、貨幣＝マネーは、文字＝文章＝テキスト、および、数字・数式という、視覚的なイメージ＝映像＝アイコンとして、多数の個人によって共有され、多数の個人のあいだで流通する。

*言葉＝言語、および、貨幣＝マネーは、時の経過とともに、それにまわりついている意味・イメージ・ニュアンス、および、価値が変化・変動・変質する。

*言葉＝言語、および、貨幣＝マネーは、刻々とその意味・イメージ・ニュアンス、およ

び、価値が変化・変動・変質しつつある。

*言葉＝言語、および、貨幣＝マネーには、時間の経過に起因する、不安定さ＝不規則性＝予測不可能性がそなわっている。＝ヒトは、自らの知覚・意識の限界の下に、言葉＝言語、および、貨幣＝マネーには、時間の経過に起因する、不安定さ＝不規則性＝予測不可能性がそなわっていると、思い込んでいる＝錯覚している or 錯覚しているを忘れている、あるいは、故意に意識しないでいる。

*ある時点での「ある特定の言葉＝言語 A-0」、および、「貨幣＝マネー A-0」は、その後の別の複数の時点においては、「ある特定の言葉＝言語 A-1,2,3,4,5...」、および、「貨幣＝マネー A-1,2,3,4,5...」という具合に移り変わっていく。

*表象の代表としての＝ヒトがもっとも大きな影響下にある、言葉＝言語、および、貨幣＝マネーは、時間の経過とともに「揺らぎ」「変質」する。

*表象、および、「表象という仕組み＝メカニズム」は、時間の経過に従属する。

*表象、および、「表象という仕組み＝メカニズム」を生み出したヒトもまた、時間の経過とともに「揺らぎ」「変質」する。

*時間の経過とともに「揺らぎ」「変質」するのは、あくまでもヒトであり、ヒトが生み出した表象、および、「表象という仕組み＝メカニズム」の、時間の経過にともなう「揺らぎ」「変質」は、ヒトが知覚し認識するものである。

*ヒトは、空間的広がりを、ある程度、表現行動＝イメージ＝表象を用いて捏造・再現・再演できても、時間的経過を、わずかでも、表現行動＝イメージ＝表象を用いて捏造・再現・再演することには、きわめて大きな障害＝困難を感じる。

*ヒトは、時間的経過を、空間的広がりに、たとえば＝こじつける＝置き換える＝代用する、作業＝操作に、慣れている。

*ヒトが、時間的経過に比較して、空間的広がりや、信号として知覚し、結果的に脳で意識することを容易に感じるのは、ヒトの脳内にある意識というスクリーンが、いわば、たった1枚のテレビ画面として存在するからである。言い換えるなら、ヒトは、各自がたった1台のテレビ受像機を持ち、たった1枚のテレビ画面しか鑑賞できない=眺められないという、比喩的な表現も可能である。(※この点については、「1人に2台のテレビ」2009-02-09と「人面管から人面壁へ」2009-02-10 in「うつせみのうつお」で詳しく論じています。)

以上です。非常に、粗雑=杜撰(ずさん)=胡散(うさん)臭い=いかがわしい考え方でしょうが、本気で、そう思っております。

きょうの記事は、大雑把なうえに、ややこしいので、これから家事の合間に、読み直し、細部を検討してみます。

超マイペースで、第三者の目を意識する余裕もない、ややこしい文章に、お付き合いくださった方に、感謝いたします。どうもありがとうございました。では、また。

後ろ前 どっちが後ろか わからない

前後ろ どちらが前か わからない

今ここに 在るものだけを ただ見つめ

09.06.30 不自由さ (1)

◆不自由さ (1)

2009-06-30 11:14:34 | 言葉

できません。どうやっても、できそうもありません。このブログの記事を書くさいには、自分自身、つまり、自分の持ち合わせの知識や記憶や、自分の知覚器官を含む身体だけを頼りに、ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもない、と考えたり、でまかせをかますわけですが、

*どうしても、できません。

1) 時間の経過を「とらえる＝知覚する＝意識する」

2) 「とらえた＝知覚した＝意識した」時間の経過を、「想起する＝呼びもどす」

3) 「想起した＝呼びもどした」時間の経過を、「表現する＝しるす＝何かの形で残す＝何か別のものに置き換える」

4) 「表現し＝しるし＝何かの形で残した＝何か別のものに置き換えた」、「想起した＝呼びもどした」時間の経過を、「とらえる＝知覚する＝意識する」

以上のなかで、いちばん難しいというか、ほぼ不可能に感じているのは、2) なのです。個人的には、2) 3) 1) 4) の順で難しいです。

きのうから、2) を何度も試みているのですが、できそうでできない、というか、自分が「望んでいる＝期待している＝できて当然だと思っている」ように、事が運ばないのです。こういうのを

*不自由さ

というのでしょうか。たとえば、中途難聴者である自分は、

*「耳が不自由な人」

と他人様から言われることがあります。

*聴覚の「障害者」あるいは「障がい者」あるいは「障害者」

と言われたり、文字にされることもあります。いわゆる、

*「障害・障害者）」vs.「健常・健常者」という2項対立

は好きではありません。

うさんくさい=嘘くさいからです。この言い方にご不快な気持ちをいだかれた方には、お詫び申し上げます。ごめんなさい。微妙な問題であることは、百も承知しております。ただ、このアホがアホなりに考えていることを、このまま続けてお読みくだされば幸いです。

*

で、

*「障害・障害者」と「健常・健常者」は連続している

と思っております。自分の場合で考えてみます。たとえば、

*「聞こえる」vs.「聞こえない」というのは、「程度の問題」

です。自分は大学に進学して間もなく、「聞こえが変だ」と感じはじめました。

*耳鳴りがする。聞こえにくい。他人の声が音としては聞こえるけど、どういう言葉を発しているのかが聞こえにくい。

という違和感を覚えるようになりました。その時には、横着をして、病院にも行かずに放置していました。後悔しています。

四半世紀以上経った現在では、上記の症状の程度がそうとう悪化しています。つまり、現在では、かなり高価な高性能のデジタル式補聴器で

*聞こえを補っているのにもかかわらず、上記の症状があらわれている=感じている

のです。別の言い方をすると、

*補聴器を外すと、ほとんど何も聞こえません。ただ激しい耳鳴りが始終しています。

という具合です。

*聴力=聞こえの程度は、物理的な方法で計測し、デシベル（※音圧を意味し、dB と記します）という単位で表現する

ことも可能です。また、

*どの音域（音の高さ）が、どれほど聞きとれるかを折れ線グラフで表す

こともできます。自分の場合には、声域と呼ばれることもある、

*ヒトがふだん話す時の音の高さの部分が、ちょうど聞こえにくくなっている

そうです。

*

で、話をもどしますが、

*障害=不自由さという現象を、程度という言葉に置き換えてみる

と、

*ヒトは誰もが、障害者になり得る

という、当たり前の結論にいたります。たとえば、あるヒトが、

*風邪を引いて高熱に見舞われた

とします。

*起き上がって、歩くのさえ、ふらふらして不自由な状態になった時、そのヒトは、障害者であると言える

と、考えています。

また、

*誰もが年をとる

のを、避けることはできません。個人差はありますが、

*年齢とともに体力や身体の諸機能が低下していく

のが、ふつうです。その意味では、

*誰もが、障害者になりつつあると言える

と、考えています。

*

また、

*障害は見えるとは限らない

という点も、忘れられがちな重要な事実です。

*聴覚障害をかかえていること

は、ともすると、第三者には分かりません＝見えません。そのために、日常生活で苦勞することは多いです。初対面の人には、説明しなければ、分かってもらえません。待っていても、誰も助けてくれません。

*どこに行っても、自分から説明しないと、目的や願いを達せられない

のです。

たとえば、一歩、家の外へ出ます。路上、お店、病院、役所、乗物——とにかく人が集まる所では、不自由が絶えません。家にいても、知らない人から電話がかかってくると、相手の声が聞きづらいために苦勞します。言うまでもなく、これも、自分から説明しなければなりません。

*内部障害、あるいは、内臓障害

という言葉をお聞きになったことがおありでしょうか？ 文字で見ると、だいたいのことは想像できるかもしれませんが、

*内臓や、身体内部の機能に障害がある

人たちがいます。その人たちは、たとえば、歩行に苦勞したり、公共の乗物で立っていることが、非常にづらい、あるいは、危険である場合があります。これも、

*見えない＝分かりにくい障害

です。こうしたテーマについては、「聞こえるけど聞こえない言葉」2009-01-10 で書きま

したので、ご一読いただければ、幸いです。

*

さて、

*不自由さは程度の問題である

に話をもどします。冒頭に挙げた、

2)「とらえた＝知覚した＝意識した」時間の経過を、「想起する＝呼びもどす」

3)「想起した＝呼びもどした」時間の経過を、「表現する＝しるす＝何かの形で残す＝何か別のものに置き換える」

という行為は、

*すべてのヒトにとっての不自由さ

以外の何ものでもありません。

具体的に、例を示します。

*あなたは、きのうの夕食に何を食べましたか？

と尋ねられた場合には、答えるのは比較的簡単だと思います。メニューを思い出して、口にするなり、文字にするなり、絵に描くなりできるでしょう。そのさいに、思い出すのは、「映像＝空間的ひろがりを見覚化したイメージ」（※たぶん、静止画像的なものではないでしょうか）であったり、それを「言語化したもの＝要するに言葉」、であるはずで
す。では、

*あなたは、きのうの夕食に何をどういう順番で食べましたか？

と尋ねられると、ちょっと困るのではないのでしょうか。さらに、

*あなたが、きのうの夕食の時間に何をどういう順番で食べたか、そして、その時間に、
どんなことが同時に起こっていたかを起こった順を追って話してください。

などと言われたら、どうお答えになりますか？ 誰かといっしょに夕食をとったのであれば、その相手との会話まで

*再現する

必要が出てくるのです。途中で、電話がかかってきたなら、その内容も再現しなければなりません。また、もしもテレビを見ながらご飯を食べていたとすれば、少なくとも、あなたが見た場面だけでも、

*忠実に再現しなければならない

のです。

たった1人で食べたにしても、食べた順番や、食べた様子を

*ビデオで撮ったみたいに再現

できますか？

*

ひょっとして、みなさんのなかに、

*警察で取り調べを受けた

方はいらっしゃいませんか？ そうした経験のある方なら、上の文章を読んでいて、きっとその時のことを思い出したにちがいありません。

*取調室での本格的な取り調べ

ではなく、ちょっとした交通事故を目撃しただけでも、

*警察官にしつこく質問される

ことがありますよね。あれって、

*すごく難しいこと

ではありませんか？ そんなことは、警察官にとっては、自分の仕事であり、日常茶飯事ですから、よく知っています。だから、

*警察官は「助け舟を出す」とか、「誘導する」とか、勝手に話をつくってくれてから

「な、こういうことだよな」とか、言う

のです。さもなきや、

*起きたことを忠実に再現するなんて、できっこありません。

よほど特殊な、超抜群の記憶力をもったヒト以外には。なかには、いるんですけど、

*あたまのなかにビデオカメラと画像記憶装置を備えたヒト

なんて、1,000人、いや、10,000人、いや、100,000人に1人いるかどうかという感じではないでしょうか。想像できません。

さらに、取り調べでは、

*復唱=同じことを何度も繰り返して質問する

のを重視します。嫌になるくらい、繰り返します。これは、

*ストーリー=物語を定着させる

ためです。

*起こったことを繰り返し説明させることで、矛盾点をついて、嘘を見破る。あるいは、正確な記憶の再現へと修正させていく。

という理屈をよく耳にしますが、はなはだ疑問です。取り調べる側と取り調べられる側とのあいだに生じる力関係(=力の差)が、

*ストーリーづくり=調書作成作業

に、大きく働く=影響をおよぼすからです。これは無視できません。

*ストーリーの真偽は二の次

です。

*もっとも大切なことは、ストーリーを定着させる=何度聞かれても同じ話をできる

ように「訓練＝練習＝リハーサル」することなのです。もちろん、「想定されている＝目的とする」のは、法廷での確認作業です。

*

以上のようなことが堂々と、当たり前みたいに、公然と（※いや、内々に、かな）行われているのですから、

*警察官や検察官による自白の強要や、冤罪（えんざい）が起きる

わけです。だからこそ、

*取り調べの模様をビデオカメラで残しておくべき

です。あるいは、これだけ科学捜査が進歩していたのですから、物的証拠をもっと重視した判決を、最終関門である裁判所がくださるべきです。

でも、

*＜司法の目的は、人を逮捕することではない。まして、処罰することでもない。書類を作成することだ。＞

という鉄則は変わっていないようです。この点に、興味をお持ちの方は、ぜひ、「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16 をお読みください。恐ろしい現実が書いてあります。

取り調べをビデオ撮影するだけでなく、そもそも、形骸化したペーパーワーク偏重に陥っている、

*取り調べという「フィクションづくり」について、専門家がその是非を研究するなり、手法の再検討をするなりするべき

なのです。でも、しないでしょ。なぜなら、（※再度コピーさせていただきますが）

2) 「とらえた＝知覚した＝意識した」時間の経過を、「想起する＝呼びもどす」

3) 「想起した＝呼びもどした」時間の経過を、「表現する＝しるす＝何かの形で残す＝何か別のものに置き換える」

という、おそらく

* ヒト or ヒトの脳が、もっとも不得意とする行動＝操作＝作業

にかかわるからです。これは、

* 「それを言っちゃあ、おしまいだ」のレベル＝次元の話である

と言ってもかまわない、

* ヒトの情報処理能力の「根源的な欠陥＝とてつもない不自由さ」

だと思います。

それにしても、どうして、取り調べが、あのような、ヒトにとってほぼ不可能な形態をとるようになったのでしょうか。できもしないことを、みんなで出来レース＝やらせみたいに行っているなんて。

*

* ヒトって、案外、「抜けている＝おバカさん」なのかもしれない

という思いがあたまをよぎりました。いや、それはちがうと思います、きっと、いや、たぶん、いや、ひょっとして、いや、よく分かりません。

* 覆水盆に返らず

ということわがががあたまをよぎりましたが、もしかして、これじゃないですか？ 何だか知らないけど、こうなっちゃったから、

* これが「正しい」

ということにしておく。

* 後戻り

なんて、できっこない。じゃあ、このままいこう。先送りしましょう。きわめてテキトーな「ま、いっか」主義、事なかれ主義。これこそ、ヒトが

* 文明

とか

*文化

とか

*進歩

って呼んでいるものではないでしょうか。

*ヒトって、案外、「抜けている＝おバカさん」なのかもしれない

って、さっき書いた言葉は撤回します。

*ヒトって、やっぱり、ずるい

に訂正します。「ずるい」がお気に召さない方は、

*ヒトって、やっぱり、賢い

でも、大差ないと思いますので、そう読みかえてください。

と、書きましたが、暑いせいか、「抜けている＝おバカさん」「ずるい」「賢い」ぜんぶが、同義語に見えてきました。ぼーっとしてきました。節電していましたが、我慢できないので、扇風機のスイッチを入れます。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「不自由さ (2)」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしく願い申し上げます】

09.06.30 不自由さ (2)

◆不自由さ (2)

2009-06-30 11:20:19 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「不自由さ（1）」の続きです。】

で、暑いにもかかわらず、この数日間、誰に頼まれたわけでもないのに、

*時間について考える

なんて、

*ややこしい

ことをするようになって、よけい、熱くなって、ぼーっとすることが多いのですが、「ぼーっとする、ゆえに我あり」2009-06-24のなかで、パクリで書いた、

*「ぼーっとする、ゆえに我あり」

ですけど、あれって、そのパクリのもとである、デカルト（1596-1650）の書いたと言われている

* Je pense, donc je suis. (ジュ・パンス・ドンク・ジュ・スイ、みたいに発音しますね) = 英語にすれば、I think; therefore I am.

の訳語として、そのまま採用すればいいのではないのでしょうか。つまり、

*「我思う、ゆえに我あり」

なんて、格好をつけて訳すのではなく、ありのままのヒトの思考と知覚と意識を見つめた場合、

*思う・考える = penser (仏語) = denken (独語) = cogitare (ラテン語) = think (英語)

の訳語は

*思う・考える・思考する = ぼーっとする・ぼけーっとする

でも大差ないということにして、

*「ぼーっとする、ゆえに我あり」

(※センテンスの前半に「我」という主語がないことに注目してください。「ぼーっとしている」ゆえに、「我」という主体の意識も定かではないのです。後半でも、省略して「ぼーっとする、ゆえに在り」でも、いいかなと今になって、「ぼけーっとしています＝思っています＝考えています」。)

でいいのではないか。そのように、「ぼけーっとしています＝考えています＝思っています」。

ちなみに、個人的には、

*わてアホ、そやさかい、わておるんや

が気に入っております。関西人でもないアホの変な＝インチキな関西弁をお許しくさいます。

なお、「ぼーっとする、ゆえに我あり」についての私見について、以上書いたことは、半分、冗談です。もし、混乱させたようでしたら、ごめんなさい。でも、半分は本心です。

*

またもやコピペさせていただきますが、ヒトは、とにかく、

2)「とらえた＝知覚した＝意識した」時間の経過を、「想起する＝呼びもどす」

3)「想起した＝呼びもどした」時間の経過を、「表現する＝しるす＝何かの形で残す＝何か別のものに置き換える」

ことが苦手なようです。

ひょっとして、このアホ＝自分だけかなとも、ぼけーっと、いや(※面倒なので、もうこの言葉はつかいません)、考えていますが、自分だけでもないみたいなので、自分だけではなく、みんなが苦手だということで話を進めさせてください。ごめんなさい。さもないと、前に進めないのです。

*時間の経過を処理するのが苦手であるために、空間のひろがりの処理で代用する。

というのが、ヒトが考え出した知恵なのか、単に、都合上＝成り行きで、そうなってしまったのか分かりませんが、とにかく、そうなっていると考えられます。

これは、勘＝でまかせですが、たぶん、

* 樂をしようとしているうちに、そうってしまった

と考えるのが妥当ではないかと思います。というのは、

* ヒトは「快か不快か」「樂ちんか樂ちんではないか」を原則にして生きている

ように見えるからです。つまり、

* 昔だったら、映画＝活動写真がないから、スチール（still）写真のままでいこう

の乗りで、

* 現在だったら、ビデオ＝動画記録および再生装置がないから、デジカメでいこう

の乗りで、

* 太古において、ヒトは、順番に全部なんて思い出せっこないから、ちょこっとだけ思い出して、言葉（＝単語やフレーズ）か、話（＝物語＝ストーリー）か、絵（＝1枚、または、連続した複数の絵）にしてみよう

の乗りで樂をするように、何となくなってしまった。そんな感じではないでしょうか。いかにも、でまかせっぽいですね、ごめんなさい。でも、わりと本気で、そう想像して＝妄想しています。

*

短く言えば、きのうの記事でも書いたように、

* ヒトは、時間的経過を空間的広がり置き換えてイメージする

ようになった＝そうした習性を身につけた、ということです。では、

* このやり方＝戦略＝惰性＝習性が、どれだけ、有効なのか＝正確さを備えているのか＝テキトーではないのか

を考えてみましょう。単純な例を挙げます。

*揺れるという動作＝運動

がありますね。比較的短い時間のものをイメージしてみましょう。たとえば、

*立ち上がるか、上体だけを起こした状態で、胴体を中心に、前傾姿勢をとり、頭部を時計回りに、ぐるりと回して、一回転させて、元の前傾姿勢にもどす

という動作を試してみてください。

暑くて、からだを動かしたくない方は、あたまのなかで、

*けん玉

を思い浮かべてください。

*十字形のけんを手で握って、糸をたらし、玉が下で宙ぶらりんになる

さまをイメージしましょう。で、

*手を動かして、玉が時計回りにぐるりと回って、一回転する

様子を思い描いてください。

上体を動かすにしろ、玉が動くにしろ、

*一回転＝一周なら、2、3秒のあいだの出来事

でしょう。これくらいなら、あたまのなかで、その

*動作＝運動を、動画的＝連続的に再現する

ことができると思います。

次に、その

*様子を、言葉で表す

とすれば、たった今、上で書いた描写力の乏しい文章みたいになります。では、その

*様子を、絵で書く

とすれば、どうなりますか？ 残念ながら、このブログを書いているアホには、

*絵心

がありません。また、たとえ、下手なりにマウスを動かして、

*お絵描きソフト

で絵を描いたにしても、それを

*この記事に貼り付ける

などという、高等テクニックは知りません。

というわけで、おたがいに想像しながら、話を進めませんか。それしか、方法がないんです。ごめんなさい。

*

で、

*お絵描き

です。肝心なことを確認しておきます。あくまでも、絵＝静止画像です。ビデオで撮るのではありませんよ。

*一回転＝一周

ですが、その動作＝運動を視覚的静止画像としてあたまのなかに描いた場合に、ある困ったことに気づきませんか？

絵で描いてみれば、分かると思いますが、

*左右と前後と区別ができますか？

確かに絵で描けば、正面を中心に考えて、

*こっちは右、あっちは左、こっちが前、あっちが後ろ

なんて決めつけられますが、それは

*決めつけただけで、決まっていることではない

という点が気になりませんか。「ぜんぜん、ならないよ」と言われれば、「はい、そうですか」と答えるしかないのですが、自分としては、非常に気になるのです。

*一回転＝一周という動作＝運動を、空間的に静止画像＝絵として、とらえた場合には、左右前後が決まる＝決めつけられる

のに対し、

*一回転＝一周という動作＝運動を、時間的に連続映像として＝ビデオ的に、とらえた場合には、左右前後は決まらない

と言えるような気がします。

実は、もう1つのフレーズのバージョンがあるので、ご紹介します。

*一回転＝一周という動作＝運動を、時間的に連続映像として＝ビデオ的に、とらえた場合には、左右前後は必ずしも決まらない

です。「必ずしも」がついているだけの差ですが、これは、

*ヒトへの配慮＝観察する側である主体への配慮

なのです。というのも、おとといの記事「「時間」と「とき」」2009-06-28でも、書きましたように、このブログでは、

*物理学は関係ない

し、このアホに

*物理的な現象など、扱えるわけがない

からです。ですから、物理学とは関係なく言いますが、

*ある現象＝出来事を、ヒトが何かの方法で記述する＝表現する＝再現する＝再演する場合には、ヒトの視点＝見方＝視座を無視することはできない

と思っています。で、上の「必ずしも」をつけたバージョンも、併記しておきます。ややこしいので、補足説明します。

*「静止画像＝絵」としてよりは、「連続映像＝ビデオ」としてとらえたほうが、ずっと正確な再現になるが、それでもなお、ヒトは「回転」に「左右前後」というありもしないものを「見てしまう＝でっちあげてしまう」。これは、ヒトの視覚にとって、「視点」という「仕組み＝装置」が絶対的に必要だからである。

ということです。別の言い方でまとめますと、

*回転や揺れといった、「持続した＝時間の連続した」「運動・出来事・現象」を、空間的に描写あるいは再現すると、左右前後という空間的イメージが「あらわれる＝出てくる」が、これは、描写の対象である運動、あるいは、再現の起源となる運動においては存在しない。

と言えそうです。

*

もう2つ、気になる点があります。

*回転や揺れといった、「持続した＝時間の連続した」「運動・出来事・現象」を、空間的に静止した状態で描写あるいは再現すると、その運動・出来事・現象から時間的経過という要素が排除されるために、その運動・出来事・現象が、これから先も繰り返されるようにも見える。さらには、その運動・出来事・現象が逆戻り、つまり、逆方向に回転したり揺れる可能性があるようにも見える。

それに対し、

*回転や揺れといった、「持続した＝時間の連続した」「運動・出来事・現象」を、空間的に連続した状態で（※たとえば動画として）描写あるいは再現すると、時間的経過という要素が反映されるが、その運動・出来事・現象が逆戻りできない、つまり、逆方向に回転したり揺れる可能性はないようにも見える。

以上の2つの文章で「ようにも見える」という表現がつかわれているのも、上述の

*ヒトへの配慮＝観察する側である主体への配慮

です。

*

そういえば、

*現代物理学でも、ヒトへの配慮を取り入れた、物理的現象の「記録＝記述＝フィクション＝物語」が流行っている

ようですが、さきほど書きましたように、このブログでは、

*物理学は関係ない

し、このアホに

*物理的な現象など、扱えるわけがない

ことは言うまでもありません。それはさておき or とはいえ、今問題にしているのは、

*ヒトにとって、どう見えるか＝感じられる

かなのです。あくまでも、

*描写・再現は、ヒトの、ヒトによる、ヒトのための行為

だからです。つまり、

*ヒトのイメージ、印象、感じといった漠然とした錯覚と呼んでもいいものが、大きな意味をもつ

ということです。ただし、さかんに「ヒト」とか「ヒトへの配慮」など書いたものの、この記事を書いているアホの個人的見解＝想像＝妄想にすぎない、とお断りしておきます。

*

ところで、みなさんは、どうお感じになりますか？「そんなふうには、ぜんぜん感じないよ」ですか？ だとすれば、このアホにとっては、「ぎゃふん」ですけど.....。

で、なぜ、以上の

1) (時間的経過を空間的広がりへと転換した場合における) 左右前後の「決定＝捏造

(ねつぞう)」の問題、

2) (静止画像における) これから先の繰り返し、および逆方向するとの「予感＝錯視」、

3) (動画における) 逆戻りの不可能性の「印象＝錯覚」

の3点にこだわっているのかと申しますと、

*時間的経過を空間的広がり、「置き換える＝たとえる＝こじつける」場合には、時間的「前後」(＝「方向」と空間的「前後」(＝「方向」という、「重なる＝かぶる＝ダブる」言葉遣いが、混乱・混同・錯覚を招きやすいのではないかと。

という疑問があるからです。上の文にある「混乱・混同・錯覚」とは、

*ヒトがかかえる「不自由さ」＝「障害」＝「バリアー」

にほかなりません。

*

今、あたまにあるのは、

*円というイメージ

です。気になって仕方がありません。

*「一回転＝一周」という「動作＝運動」、つまり、揺れるという運動を「記述する＝描写する＝写生する」場合には、「前後」というイメージおよび言葉が重要な意味をもつ。なぜなら、ヒトには、時間と空間を、「円形＝円状＝円環」という「イメージ＝比喩＝言葉」を基盤にしてとらえる習性が備わっている。

と考えられるからです。で、以上について、さらに、考えてみるつもりです。

実を申しますと、以上の

*「一回転＝一周」についての「馬鹿話＝でまかせ」は、ネコ(※うちの猫の名前です)と、遊んでいて思いついたこと

なのです。ネコは、こちらが、ものを回す仕草＝動作をすると、強い関心を示します。で

まかせ好きなアホは、「なんでだろう？ ネズミを連想しているのか？」などと、つい深読みをしたりします。

ヒト以外の生き物を観察したり、いっしょに暮らすというのは、いい勉強になります。

*いろいろなことを教えてくれる

からです。もっとも、こちらに

*学ぶ姿勢

がないと学べませんけど。ネコと遊ぶときには、

*「絶対他者」であるネコ

はどんなふうに、この遊びを「知覚している」のか、または、「とらえている」のか、あるいは、「考えている」のかと、つい、考えてしまい、ぼーっとしてしまいます。

扇風機で部屋が涼くなったせいか、ネコが部屋に入ってきました。ちょっと、遊んでもらおうと思います。今、気になっている回転遊びでもしましょうか。

*

散漫な文章にもかかわらず、ここまで我慢して読んでくださった方に、お礼申し上げます。どうもありがとうございました。

では、また。

ネコは猫 絶対他者がここにいる

ネコの目で 1度は見たい アホのつら

ネコは猫 ぐるぐる回る あほはアホ

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

◆ぐるぐるゆらゆら (1)

2009-07-01 11:10:10 | 言葉

きのうの記事を書いてから、家事をしたり、親の介護をしたり、ぼけ一っしたりしながら、ずうっと＝一貫して＝一環して考えていたことは、

*円＝円環＝円形＝円状＝回転＝まわる＝ぐるぐる＝輪＝くるくる

といったイメージというか、静止映像および連続映像でした。おかげで目が回りました。きょうの「記事用の走り書きメモ＝一種の下書きをしたための紙切れ」も、溜まりました。ぐるぐるは、

*夢

にも、出てきました。その夢のなかで、すごくおもしろい考えが浮かんで目が覚め、これはメモっておこうと考えたのですが、面倒くさくてやめたところ、朝、起きた時には忘れていました。残念ですが、仕方ありません。だいたい、これまでの経験では、夜中に起きて

*「こりゃあ、つかえる！」

なんて喜んで書きつけたメモに、ろくなものはありませんでした。と、負け惜しみを言って、慰めています。そんなふうに、さっきまで、あの夢はどんなだったのだろう、と考えているうちに、別の考えが浮かんできました。その時のメモを書き写します。

*夢の視点・主語・作者・登場人物は？

悪筆の走り書きを、キーボードを叩いて、こうやってモニター上の活字に置き換えてみると、また違った感じがします。

*夢って不思議

ですね。実際問題として、

*夢に視点はあるのでしょうか？

*夢に主語はあるのでしょうか？

*夢の作者って誰？ そもそも作者っているの？

*登場人物なんて書いたけど、あれって、そもそも人物なの？

以上のような問題というか疑問について考えるさいには、

*夢を想起=再現しなければならない

のですよね。ということは、

*夢は映像として見るものなののでしょうか？

それとも

*今、こうして「現実」と呼ばれているもののなかに投げ込まれているように、見るものなののでしょうか？

そうではなく

*ケース・バイ・ケースなののでしょうか？

それを確かめるためには、

*夢のなかで覚醒していなければならないということなののでしょうか？ そんなことが、できるのでしょうか？

そんなことを経験したことがあるような記憶もあります。よく覚えていませんけど。

*

で、このところ考え続けている、

*物理的「時間」と、ヒトの意識する「とき」

とも、おおいに関係があるような気がします。こんなふうには、このブログを書いているアホは、

*何でもこじつけて、くっつけてしまう

んです。常習犯というか、確信犯というか、迂闊犯（うかつはん）＝間抜け犯というか、とにかく、そういうビョーキなんでしょう、たぶん。で、さきほどの、

*夢は映像として見るものなののでしょうか？

という疑問ですが、

*夢は持続した映像である

と考えると、

*「現実」と呼ばれている「現象」と似ている

ように思えてきます。

*「意識」というレベルに特権的な地位を与えるなら、「現実」も「想像」も「夢」もほぼ同列に扱うことができる

となり、

*「意識＝存在」というフィクション＝お話＝考え方も成り立つ

でしょう。でも、うさんくさいですね。いかがわしすぎます。えっつ？「おまえが、いつもやっているのと、変わらないじゃないか」ですか？ そうですね。納得しました。

では、いつものでまかせでいきます。夢については、別の機会に、でまかせをかますとして、きょうは、やはり、

*円＝円環＝円形＝円状＝回転＝まわる＝ぐるぐる＝輪＝くるくる

について考えてみます。

*長短2本の針で「とき」を「刻む」アナログ時計に備わっている、文字盤に配置され

た円状の数字を見て、ヒトが物理的時間を「円状」のもの＝円環としてイメージするようになった。

という意味のフィクション＝お話＝考え方を、お聞きになったことがあると思います。

*もっともらしい説

です。つい、うなずいてしまいます。でも、本当かどうかは分かりません。この種の

*フィクションが「正しい」か「正しくない」は、説得力の強さの問題である

と思っています。つまり、口の上手いヒト＝話術に長けたヒトや、文章力のある＝レトリックに優れているヒトが、しゃべったり、書いたりすると、

*「正しく」思える

たぐいのレベルの問題という意味です。要するに、

*プレゼンのうまさ

次第ですね。

そのほか、腕力を用いたり、恐怖心をあおったりして、信じさせる方法もあります。また、洗脳という手段もありますね。フィクションが「正しい」か「正しくない」は、

*検証不可能

だから、今述べたようなレベルで信じさせることしかできません。

*ヒトの世界で、流通する考え方や情報は、すべてがフィクションだ

という見方もできます。というか、個人的には、そうした思い＝感想はかなり強いです。もちろん、この見方もフィクションであるということになります。いかなる考えも、メタな立場＝「対象より上に立ち、見下ろす視座」には立てません。もちろん、たった今、書いた意見もです。以下同文.....。

*

で、自分の場合には、上の「とき」についての説に初めて触れたのは、確か、

* 澁澤龍彦 (1928-1987)

のエッセイを通してでした。

* 澁澤龍彦の文章は、分かりやすく大好きだった

ので、「なるほど」という具合に、

* 時計の文字盤の形態が、ヒトが時間を円環としてとらえるもとになっているという説

を、ころりと信じました。あの人の『集成』(桃源社版・全7巻)のうち、4巻ほどを高校生の時に持っていた記憶があります。当時、そのほか何冊か、エッセイ集や翻訳を買い求めました。

* マルキ・ド・サド (1740-1814) の『悪徳の栄え』

の抄訳なんて、どきどきしながら読みました。

* 『ソドム百二十日』

なんてのも、読んでみると、何だか悪いことをしているようで、よかったです。それが原作だという

* ピエル・パオロ・パゾリーニ (1922-1975) の監督した映画「ソドムの市」

も、エッチでよかったです。おっと、暴走しました。失礼。

*

話をもどします。

* 時間や「とき」を円状のものとイメージし、その流れ=移り変わり=進行=運動を、循環=サイクル=ぐるぐる=ぐるり=回転=円運動としてとらえる

というヒトの習性は、アナログ時計という機械=器械=計器の発明前にもあったと考えられます。ヒトが「時間」および「とき」をどのように、認識するようになったかについては、「時間」と「とき」2009-06-28でも、触れましたので、ここでは、あの記事とは違った面から、考えてみます。

別にお勉強をしなくても、おそらく、21世紀に生きるヒトなら、ほぼ誰でも思いつくのは、

*太陽の動き

でしょう。東から上って、西に沈む。そして、翌日には、また東から上って、西に沈む。この繰り返しです。

*地球は丸い。そして、回転しながら、太陽の周りをまわっている。

という、

*フィクション=事実

は、いろいろな機会に何度か聞かされているはずですから、

*夜のうちに、地球の反対側をまわるような形で、太陽が地球の周りをまわっているように「見える」。でも、「本当は」、地球のほうが太陽の周りをまわっている。そうなのだ。うんうん。

などと、いうふうに、

*自分に言い聞かせる

わけです。このように、ふつう、

*ヒトは自分の体感を裏切る形で、「時間」および「とき」の動きを太陽の動きに重ねて、あたまで理解する。

という認識の方法を選択するのを余儀なくされています。

*天動説と地動説のあいだでからだが揺れつつも、あたまでその揺れを支えてやる=修正してやる

わけです。この種の

*体感を裏切る形で、あたまで理解する

操作は、ほかにもたくさんあるでしょう。そういう操作をしないと、アホとか、馬鹿と

か、いろいろな言葉でののしられます。通知表の評価も悪くなります。ヒトである限り、仕方ありません。

いったい、何を言いたいのかと申しますと、

*ヒトのいづくイメージは、体感だけでなく、他のヒトから与えられた情報=フィクションによっても、形成されざるを得ない

という実情=実状=状態=常態がある、ということです。

*コドモの場合には、他のヒトからの与えられる情報=フィクションを蓄積する途上にある

ために、しばしば、

*体感を強く信じています。

ということは、

*ヒトは、コドモ時代に天動説を信奉し、やがて、天動説に改宗するが、密かに天動説を信奉し続ける。

とも言えそうです。これに類したことは、ほかにもたくさんあるでしょう。

*

ちょっと

*次元というかベクトルは違いますが（※次元もベクトルも、もちろん比喻です、念のため）、

*映画やテレビ

を考えてみましょう。たとえば、テレビを見ている時に、誰かが画面を指差して、あなたに「これは何？」と尋ねたとしましょう。

*「テレビ」

とか

* 「テレビの画面」

とか

* 「ブラウン管」(※うちのテレビは、まだ「ブラウン管」式です)

とか

* 「液晶」

なんて答えてはいけません。

* 「走査線」

とか

* 「画素」

なんて答えてもいけません。

以上のように答えたあなたは、ぜんぜん間違っていないです。でも、駄目なんです。変人扱いされるか、イジメにあうのがオチです。

どうして、上のように答えてはいけないかについては、みなさん、それこそ、体感されていらっしゃるでしょう。あえて、説明はいたしません。以心伝心。阿吽の呼吸というやつです。ねっ？ ねっ？

失礼しました。話を続けます。

では、何と答えればいいのかと申しますと、もちろん、画面に写っている映像を言葉に置き換えればいいのです。

* 「キムタク」

とか

* 「ためしてガッテン」

とか

* 「〇〇のCM」

とか

* 「誰だっけ、この人」or「何だっけ、この番組の名前」or「どこだっけ、この温泉のある町」

とか答えれば、問題はありません。

今挙げた例で、ヒトが、テレビ放送という、いわば「錯覚製造装置」を、

*体感の命じるままに＝体感する通りに＝自分のあたまとからだを信じて、さきほどの質問に答えている

点に注意をはらってください。錯覚を疑わない、ということがポイントです。さもないと、テレビ放送を見ることはできません。

*天動説を体感するのは、逆

です。一見不思議に思えるかもしれませんが、当然のことです。深い意味なんて、ありません。なぜなら、

*テレビはヒトがつくったもの

だから、

*当然であり、不思議ではない

のです。

*ヒトは、ヒトの、ヒトによる、ヒトのためのものをつくる

のです。だから、何の不思議もないのです。でも、ちょっとだけ、不思議ですね。たぶん、ちょっと不思議なのは、

*ヒトがヒトをだますという仕組み＝装置＝メカニズムを用いている

からだと考えられます。

*映画もテレビも、分断された複数のコマを送る＝静止画像を連続して流すことで、映

像=まぼろしを生じさせて、ヒトに「何かがある or いる or 動いている」という錯覚を
いだかせる仕組み=装置である

ことは、みなさんをご承知の通りです。昔、

*幻灯=幻燈 (=プロジェクター)

という美しい語感の言葉があったそうですが、映画もテレビもPCのモニターも、その
延長線上にあると言えそうです。ただし、機械関係のことは、苦手なので、以上の説明
には、事実誤認がある可能性が高いです。間違いがありましたら、ごめんなさい。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数
制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいの
で、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「ぐるぐるゆらゆら (2)」
として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしくお願い申し上
げます】

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

◆ぐるぐるゆらゆら (2)

2009-07-01 11:15:51 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「ぐるぐるゆらゆら (1)」の続きです。】

さて、これまで話してきましたことをまとめますと、

*ヒトは物理的時間の処理に、そうとう苦労している

ということが分かります。逆に or 同時に、

*なかなか器用に健闘している

とも言えます。大切な点は、

*ヒトが自分たちの知覚上の「弱点＝欠陥＝障害＝錯覚」を、ある程度知ることにより、その錯覚を逆手にとる形で、自分たちに「都合のいい＝快い＝楽な」方法を、考え出し＝思いつき、その方法＝アイデアを現実化している

ということです。偏屈者の自分も、これは素直に「すごい」と認め、拍手を送ってやりたいと思います。とはいうものの、拍手を送るにしても、

*同情＝憐憫（れんびん）の念

と

*不安＝懸念＝憂慮

を、いだかないわけにはいきません。

きのうの記事から、重要な部分を引用させていただきます。

*

★で、なぜ、以上の

1) (時間的経過を空間的広がりへと転換した場合における) 左右前後の決定＝捏造（ねつぞう）の問題、

2) (静止画像における) これから先の繰り返しと逆方向の予感＝錯視、

3) (動画における) 逆戻りの不可能性の印象＝錯覚

の3点にこだわっているのかと申しますと、

*時間的経過を空間的広がり、置き換える＝たとえる＝こじつける場合には、時間的「前後」(＝「方向」と空間的「前後」(＝「方向」という、重なる＝かぶる＝ダブる言葉遣いが、混乱・混同・錯覚を招きやすいのではないかと。

という疑問があるからです。上の文にある「混乱・混同・錯覚」とは、

*ヒトがかかえる「不自由さ」＝「障害」＝「バリアー」

にほかなりません。

今、あたまにあるのは、

*円というイメージ

です。気になって仕方ありません。

*「一回転＝一周」という「動作＝運動」、つまり、揺れるという運動を「記述する＝描写する＝写生する」場合には、「前後」というイメージおよび言葉が重要な意味をもつ。なぜなら、ヒトには、時間と空間を、「円形＝円状＝円環」という「イメージ＝比喩＝言葉」を基盤にしてとらえる習性が備わっている。

と考えられるからです。

*

以上が引用です。

ヒトという種（しゅ）の成し遂げた偉業に、拍手を送るさいに、ためらいを覚えるのは、この引用個所に書かれた

*ヒトがかかえる「不自由さ」＝「障害」＝「バリアー」が解消されていない。また、解消される可能性はないだろう。

という思いがあるからなのです。「仕方ないじゃん」という考え方もできるでしょう。でも、そのように、あっさりと諦めてしまってよいのでしょうか？

*そろそろ、ヒトは、以上のような「不自由さ」＝「障害」＝「バリアー」を含めて、さまざま他の「不自由さ」＝「障害」＝「バリアー」に意識的にならなければならない、非常事態に直面しているのではないか。

今述べたことには、まったく根拠はないのですが、アホの「勘」というか、「かん＝疝＝癩」の虫がおこったというか、とちくるったというか、とにかく、このところ、やたら、

*気になって仕方がない

のです。また、引用させてください。「揺らぎ」と「変質」2009-06-29から、必要な部分だけを、以下にコピペします。

*

★* 「表象の代表としての=ヒトがもっとも大きな影響下にある」、言葉=言語、および、貨幣=マネーは、時間の経過とともに「揺らぎ」「変質」する。

* 表象、および、「表象という仕組み=メカニズム」は、時間の経過に従属する。

* 表象、および、「表象という仕組み=メカニズム」を生み出したヒトもまた、時間の経過とともに「揺らぎ」「変質」する。

* 時間の経過とともに「揺らぎ」「変質」するのは、あくまでもヒトであり、ヒトが生み出した表象、および、「表象という仕組み=メカニズム」の、時間の経過にともなう「揺らぎ」「変質」は、ヒトが知覚し認識するものである。

* ヒトは、空間的広がりや、ある程度、表現行動=イメージ=表象を用いて捏造・再現・再演できても、時間的経過を、わずかでも、表現行動=イメージ=表象を用いて捏造・再現・再演することには、きわめて大きな障害=困難を感じる。

*

以上引用した部分のうちで、もっとも重要だと思われるのは、

* 「揺らぎ」という言葉およびイメージまたは運動

なのです。補足しますと、

* 揺らぎ・揺れ・宙ぶらりん・ぐるぐる・くるくる・回転・円・円環・円形・円状・まわる・輪

という、一連の似通った運動が連想されるのです。そして、その運動こそが、

* ヒトにとって、根源的な言葉およびイメージまたは運動であり、ヒトの「行動の指針=支柱=動機」=「無意識の構造=メカニズム」になっている

ような気がするのです。言い換えると、

* ヒトにとって普遍的な、表象という仕組み=「何かの代わりに、「その何か以外のもの」を用いること」と、「ぐるぐる運動」が深くかかわっている

という感じがするのです。

あえて、さらに言うなら、

*言葉＝言語、あるいは、貨幣＝マネーといった個々の「表象」の運動が、ひとり歩きを超えて暴走している。ネズミ花火のように、くるくる回りつつ、あちこちへと移動している。予測がつかない動きを見せている。

とか

*ヒトが、おそらく無意識のうちにつくってしまった、他の生き物よりも複雑化した「表象の仕組み」が、暴走し、ドミノ倒しのようにヒトの行動やこの惑星のさまざまな体系を踏み倒し続けている。

とか

*ヒトだけでなく、ヒト以外の生物までがヒトに付き合わされるという形で、人為的な＝人工的な「表象の仕組み」という回し車のなかで、ハムスターのように、無意識のうちに「回ること」だけが目的化された状況を生きるしかない現在に投げ込まれている。

とか

*宇宙を支配している圧倒的な偶然性が、人為的な必然性＝「表象の仕組み」を装い、ヒトとこの惑星の他の生き物を揺るがしている。言い換えると、ヒトは、宇宙を支配している圧倒的な偶然性を、人為的な必然性＝「表象の仕組み」と取り違えながらも、それをまったく認識＝意識することなく、圧倒的な偶然性に揺るがされ＝もてあそばれ、この惑星の他の生き物と半ば一家心中を図ることを余儀なくされている。

といった気がしてならないのです。

比喩を多用した＝めちゃくちゃなこじつけに満ちた文章を並べましたが、簡単に言えば、

*ヒトは、自分がつくったものに、翻弄され、きりきり舞いしている。

という感じなのです。

で、

*きりきり舞い＝ぐるぐる運動には、切りがないみたいなのですが、実は、「切り」が

あって、いつかは「ぜんまい」が切れそう

なのです。

で、

*そのぐるぐる運動の処理の仕方を、修正する=改変する=変質させる=揺らがせることが、21世紀に入り10年が過ぎようとしている現在、ヒトに求められているのではないか。

と思えてならないのです。

お気づきになったと思いますが、ただ今書いたことは、すごくテキトーだし、とちくるっているとしか思えないし、根拠も示されていない、単なるアホのお話=でまかせ=杞憂=妄想=虫の知らせです。

*ヒトという種は、変わらなければならない

などと書けば、お読みになっている方から、「そろそろオカルトじみてきたね」とか、「今度はスピリチュアルかい」というお言葉を頂戴しそうな気がします。これこそ、完璧に、

*被害妄想

ですね。

*

その妄想を前提に話を進めますが、個人的には、「オカルト」とか「スピリチュアル」と呼ばれているものは、苦手なんです。「よく言うよ」ですか？でも、これまで、一貫して、その種のものには、やんわりと批判的な意見を述べてきたつもりです。「そうかい？じゃあ、潜在的近親憎悪ってやつだね」ですか？そうかもしれません。「潜在的」となると、自分には分かりません。

*独り漫才で、ボケと突っ込みを演じる

のは、これくらいにして、さっきの話を続けます。なにしろ、今書いているテーマが、

*ぐるぐる運動

なので、またしても同じような話になりますが、お許してください。で、話を続ける前に、また引用させてください。

*

*屹立する偶然性＝「宙ぶらりん」って、ひょっとしたら、「身をゆだねる」＝「身をまかせる」性質のものではなく、「身ががんじがらめにしぼる」＝「身を侵す＝犯す」ものかもしれない。「賭け」も「書く」も「占う」も「知る」も「分かる」も、何もかもが、圧倒的な偶然性のまえでは＝もとでは、無力で空しい。

*

上の文章は、「かく・かける (8)」2009-05-19 から、抜き出したものです。キーワードは、

* 「宙ぶらりん」

です。

* ヒトが、糸か紐（ひも）で吊るされてぶらぶら揺れている、あるいは、ゆるく円を描きながら揺れている、というイメージ

です。

* 宇宙を支配している圧倒的な偶然性に身をさらされている＝身をまかせている状態＝常態の比喻

とも言えます。それが、上述の

* 表象という仕組み＝「何かの代わりに、「その何か以外のもの」を用いること」

および

* 「ぐるぐる運動」

と、

* なぜか

重なる＝かぶる＝共鳴する＝共振する＝連動する＝交感する＝シンクロするのです。「交

感する」などと書くと、確かにオカルトっぽく響きますね。自分では、

* 「ま、いっか」主義 = 「でまかせ主義」で書いている

のですけど。

あるいは、

* ぐるぐると、揺れと、宙ぶらりんについて書きながら、ぐるぐる回り = 堂々巡りし、ふらふら千鳥足になり、ぶらぶらゆらゆら揺れているだけ

なのですけど。

とはいえ、上記の

* 「交感する」というちょっと超常現象めいた感じ

も、かぶっていることは否定できません。「交感する」という言葉を書いたとき、あたまにあったのは、

* ボードレール (1821-1867) というフランスの詩人の詩集『悪の華』にある「Correspondances」 (= 「交感」) という詩

です。これまでにブログで取り上げた、デカルトの『方法序説』、リヴァロールの「フランス語の普遍性についての論考」、マラルメの詩などは、学生時代に、フランス人の先生による

* フランス語の授業で、原文で暗唱させられたもの

です。そうした、詩と、散文 (哲学書・小説・科学論文など)

* ささまざまなジャンルの文章の断片 (= 名文集 = 名文選)

を有無を言わず、丸暗記させるというのは、フランス式フランス語教育の特徴のようです。今はどうか知りませんが。

* 暗唱させるという行為は、話し言葉 = 音声为主体として演じる、ある一定の時間的経過 = 持続を、「後に」再現 = 再演させるための、「事前の」リハーサル = 訓練 = ある種の洗脳だ。

と言えそうです。これもまた、

*ぐるぐる何度も繰り返して音読して覚え、レコードや、テープレコーダーや、CD（※これらも基本的に円形＝ディスク状をしています）のように、後になってぐるぐると想起＝再現＝再演する行為

なのです。

こういう場合には、脳は時間的経過をどのように処理しているのでしょうか。空間的広がり置き換えているとは、感じられません。

*口承、ホメロスの叙事詩、アイヌのユーカラ、説話、昔話、口伝律法（くでんりっぽう）、ユダヤ教のトーラーやタルムード

などの言葉が思い浮かびます。そうした膨大な言葉の鎖＝連続を思うと、気が遠くなりかけます。でも、いつか考えてみたいです。

*

それはさておき、とりあえず、

*表象・表象の仕組み／時間的経過・「とき」／宙ぶらりん・圧倒的な偶然性／揺らぎ・ぐるぐる運動・円／想起・再現・再演

といった言葉・イメージを相手に、ぐるぐるゆらゆら戯れながら、きょうも、暑い＝熱い「とき」を過ごし、ぼけーっと考えてみます。まさに、宙ぶらりんの宙ぶり状態です。すべて「とき」におまかせです。

*

お腹が空きました。ごろごろいいます。難聴でも、こういう音だけは、耳鳴りとかぶって聞こえてくるのです。

ここまで、お付き合いくださいまして、どうもありがとうございました。あなたの存在だけが励みです。では、また。

朝六時 ごろごろ鳴るは 腹時計

朝七時 ごろごろ鳴るは ネコの喉

朝八時ごろごろ鳴るは 黒い雲

今気づく ごろごろ鳴るは 耳の中

えんえんと ごろごろ鳴るは ときの音

09.07.02 うたう

◆うたう

2009-07-02 09:20:59 | 言葉

*動きは、ヒトにとって、熱を発するのと同様に常態である

はずです。少なくとも、これまで得た知識を総合すると、そうであるはずは

*あたまでは、納得しているつもりなのに、からだは必ずしも、納得してくれない

ということがあります。動き＝運動というのも、じっとしている時には、なかなか体感＝
納得＝実感しにくい場合があります。強引な言い方をすれば、

*動いているヒト＝主体は、時間という連続性＝持続性を、体感＝知覚＝意識している

ということになりそうですが、それは、当然のことながら、

*何を動きと見なすか＝定義するか次第

です。じっとしていても、自らの鼓動、呼吸、血液の流れ、胃や腸などの動き、皮膚のかゆみ、体内の痛み or 不調といった身体レベルでの広義の「動き」を感じます。

*座禅

というのがありますが、それに作法というものがあるのなら、その作法にのっとって

*じっとしている

場合には、動きというものを感じなくなるのでしょうか。そもそも

*「感じる」「感じない」と意識すること自体が雑念だ

と言われそうな気がします。「師」とやらに、何かを指導されてやるのが、苦手な自分には、座禅の経験がないため、分かりません。あの

*肩をバシッと叩いて、お辞儀をする儀式

も嫌です。

*

儀式・作法・決まりは苦手です。笑っちゃいそうになります。そういう性格のせいか、それとも、ただ縁がないためか、生まれて一度も、お葬式、結婚式のたぐいに出たことがありません。

*無の境地

というフィクション＝お話＝神話がありますが、うさんくさい＝いかがわしいです。あれって、

*死んだ真似 or 死んだ状態のリハーサル

ですか？ 宗教というより、不条理演劇か、風俗関連のお遊びみたいです。死んだ真似は、コドモの頃、よくひとりでやって遊んでいました。今でも、ときどき、ひとりでやっています。漱石の小説にも、死に真似に似た動作＝仕草が、よく出てきます。

*ダイ・イン (die-in)

という抗議の仕方＝示威行動＝示威運動がありますが、苦手です。それが、たとえ、反体制的なものであったとしても、純粹に世の中を良くしようという気持ちから発するものだとしても、

*みんなで一緒にやることに、ファシズム＝全体主義の芽を見てしまう

という、幼い頃からの性癖があるため、怖いのです。懐疑心と警戒心が過度に強く、小心者で臆病なのです。ダイ・イン (die-in) をなさっている人たちの善意は、あたまで分かっている、からだは分かってくれません。鳥肌が立ち、落ち着かない不安な気分になります。こんなふうだから、

* 友達ができない

のかもしれない。

* からだをだますことは難しい

です。

*

抑うつが常態化しているため、

* 死を考える

のが、日常茶飯事になっています。さきほども書きましたが、死んだ真似状態をすることも、よくあります。でも、意識がある限りは、何らかの形で、

* 自分の動き

を感じます。同時に、

* 自分の周り＝外部＝世界＝他者の動き

も感じます。

* 時間を連続性＝持続性としてとらえるさいには、直線的なイメージと、円環的なイメージがある

というフィクション＝お話＝考え方があります。これは、あくまでも、

* イメージの問題

です。このブログは、

*物理学は関係ない＝物理学を扱う訓練を受けていない＝物理学を扱うだけの情報処理能力がない

ですので、いわゆるイメージと言葉だけを相手に＝対象にしています。蛇足ですが、物理学でやっていることも、たぶん、

*「フィクション＝お話＝考え方」づくり

ではないかと想像しております。

*ヒト以外のものが物理学をやっている

のなら、ただ今の想像＝言葉は撤回しますけど。

*

話を少しずらします。きのうから、

*連続性＝持続性という視点から時間を考える

みたいなことをしています。この視点から考えると、

*直線的なイメージと円環的なイメージという2項対立が、あまり気にならない

からです。気にならないのは、鈍いからかもしれません。その鈍さを前提に、話を進めます。

「時の神＝あわいわあい (2)」2009-06-25 の最後の部分がきっかけになって、「時間」と「とき」2009-06-28 から、かなり本気になって、

*物理的な「時間」、および、ヒトが意識している「とき」

について、考え続けているのですが、当初は、直線的なイメージと円環的なイメージという2項対立をさうとう意識していました。で、お勉強が嫌いなので、あらためて本を読んだり、検索したりはせずに、高校生くらいまでに理科や社会科で習ったことや、物心ついてから現在にいたるまでに見聞きしたり、経験したことを思い出しながら、

*たぶん、時間って円環状なのではないか

という考えに傾いていきました。

温帯にあるとされる列島に生まれたせいかな（※最近では亜熱帯じゃないかと、夏になるときに思いますけど）、

*季節の繰り返し＝サイクルを何度も体験してきたこと

が、その考えの大きな支えになっています。

*アナログ時計を見たり、カレンダーを取り換えたりしたこと

は数知れませんが、きのうの記事では、ごり押しに、

*ぐるぐる運動にこだわる

なんてことをやっていた。夢にまで、ぐるぐるを見ました。ネコを相手に、ぐるぐるをして遊びました。目も回りました。そんなわけで、うんざりしてきたのです。

*めまい＝「目が舞うから、めまい、でしょうか？」

を思い出しました。

みなさんのなかに、めまいに見舞われた経験をお持ちの方はいらっしゃいませんか？ 軽いものから、激しいものまであるようです。

昨年2月の終わり頃のことですが、

*ものすごく激しいめまい

に襲われました。マジで死ぬかと思いました。大きな病院で、X線検査、CTスキャン、MRI検査を受けました。けっきょく、脳には異常はみとめられないので、耳のほうに
関係する症状ではないだろうか、

*しばらく様子を見ましょう

という感じで、検査は終わりました。症状もそれ以来、起きていません。

*変だな

と感じたら、飲むようにと医師から言われて、予防薬？ みたいなものを処方されました。

*

激しいめまいについては、もう1つ、経験があります。大学に進学して間もなく、耳の聞こえと耳鳴りが気になっていたにもかかわらず、横着をして放置し、大学卒業後に初めて耳鼻科のお医者さんに診てもらったさいに、

* 耳に水を注がれる検査

をされたことがありました。その検査の時にも、

* 世界がひっくり返っているのではないかと思うほどの激しいめまい

に見舞われました。どうやら、それは

* 平衡機能検査

とって、わざとめまいを起す検査法だと、後になって知りました。めまいはそれほど頻繁に誰もが経験するものではないようですが、嫌なものですよ。

*

もっとも、次のようなこともあります。

* コドモは、自分から目を回すような仕草や運動をしたり、他人によって目を回すような状態にしてもらうのを好む

ということをご存知かと思います。みなさんご自身の、かつてのそうした経験を覚えていらっしゃいませんか？

* メリーゴーラウンド、ティーカップ

なんかも、基本的に、めまいを誘う装置です。

* 観覧車

も上部に行けば、怖くてめまいがするかもしれません。

* ジェットコースター

なんて、もろに目が回ります。

乗り物酔いという症状があるように、

*自分が動く、動くものに乗る

ことにより、

*気分が悪くなる

とか

*目が回る

という生理的な現象が起こります。

また、

*お酒による酔い

も度を越すと同様の現象をもたらします。いわゆる

*「危ない薬」

でも、同様の体験ができるかもしれません。もちろん、個人差はあるでしょうが、

*ヒトは、目が回るような体験を好む

と言えそうです。

で、

*円環状の時間というイメージ

については、こんな感じで、もうたくさんという思いが強いのです。一方の

*直線的な時間というイメージ

に関しては、今のところ、どうでもいいという感じです。それよりも、

*連続性＝持続性という視点から時間を考える

ほうに、現在は興味があります。で、思い出すが、

* アンリ・ベルクソン（アンリ＝ルイ・ベルクソン：Henri-Louis Bergson：1859-1941）
というフランスの哲学者

です。なぜか、ノーベル文学賞の受賞者でもあります。なんででしょう？ この人については、知りません。ただ、

* durée（＝「持続・持続性」：「デュレ」みたいに発音します）

という語の出てくるベルクソンの文章の一節を、大学生時代にフランス人の先生の指示で暗唱させられた。だから、たまたま覚えていて、その語が今になって気になるのです。

きのうの記事でも書きましたが、フランスという国の

* 国語観

つまりは「フランス語観」ですけど、これには独特のものがあって、詩であろうと、小説であろうと、哲学者の書いた論文であろうと、数学の論文であろうと、科学論文であろうと、

* 美しければ暗唱するに値する

みたいな感じなんです。少なくとも、昔、指導してくれたフランス人の先生は、そう言っていました。

* 「だから、どんどんいい文章を暗唱しなさい」

と何度も言われました。

で、その

* 持続性という考え方

ですが、そっちのほうが、物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」を考える時に、

* 個人的にはじっくりくる

のです。さらに言うなら、

* 快い = 気持ちよい = うっとりする = うっふん = あっはん = ほあーん = でれー

という感じなのです。たとえば言うとはほかの言葉に置き換えると、

* 音楽 = 旋律 = 歌 = うなり = 流れ

です。

視覚的には、次のように図式化できます。

流れ + 方向
経路・道筋
音声
快・美・生
意識 + 自由

きわめて個人的な図ですが、ほぼそんな感じです。

要するに、エコーなんか効かせて

* カラオケで気持ちよく声を響かせながら歌っている自分

を思い出していただければ、よろしいかと思います。それです。

歌や音楽には、

* 旋律 = メロディー = 節という道筋みたいなもの

があって、

* それに導かれて = それに手を引かれて = それに乗って = それに運ばれていうという感覚

がありますよね。このブログを書いているオンチでも、それなりに

* 旋律というものに沿って = 乗って歌っている

つもりになります。その

*ある種のお任せ感＝無責任状態

が心地よいのです。

*

で、キーワードである、

*「うたう・うた・うち」

を、広辞苑をはじめとする手持の複数の辞書で調べてみましたので、自分の好きなように以下に、まとめて＝散らかしてみます。

*うたう・歌う・謡う・唄う・謳う・詠う・歌+合う・打ち+合う・訴ふ・訴える

*うた・歌・節をつけて言葉をうたう・音律に合わせる

*うち・打ち・その意味を強めたり、音調をととのえる・打ち興じる（おもろしろがる）の「打ち」・打ち続く（次々と続く）の「打ち」・瞬間的な動作を示す・打ち見る（＝ちらりと見る・見るを強調した言い方）の「打ち」

で、

*「うたう」がどうして気持ちよいのか

を考えてみました。いろいろな思いが浮かびましたが、結論から申しますと、

*今、ここにある・いる、それが続く期待・喜びを、全身で感じる・味わう

という感じです。

*持続性を分節化する

なんて、野暮・無粋・興ざめ・どっちらけなことをするのは、気が引けますが、上のような言語化＝分節化も可能ではないかと思います。

早い話が、みなさん、

*好きな歌をうたってみてください。

それが

*持続性体験=今を生きること

なのです。実際には、

*鼻歌でも、ハミングでも、うなるだけでも、十分だ

と思います。要は、

*旋律に乗ること

なのです。

*旋律は今という瞬間を引き延ばし、どこかへ連れて行ってくれる乗物みたいなもの

です。

*「どこか」は「彼方（かなた）」といった遠い=抽象的な場所ではない

という点が大切です。

*「どこか」は、あくまでも、「今いるここ」であり、「今ここで、期待する=待つ」ことである

あるいは

*「どこか」は、「今いるここ」が、「今いるここ」のままに、びろーんと、のびる=伸びる=延びることである

と言ってよいと思います。そう言えば、

*「うたう」と似た体験に、「待つ」・「期待する」がある

と言えそうです。

以下に、「時間」と「とき」2009-06-28 から、関係のある部分を引用します。

状あるいは直線状の、物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」という考え方＝フィクションにおいては、年（365日）・時刻（「とき」を「きざむ」）・人生（空間的イメージにたとえられやすい、たとえば川、階段、植物、長い物体）・年代（空間的イメージに置き換えられやすい、たとえば年表）・世代（空間的イメージに置き換えられやすい、たとえばトーテム・ポール、系図）、歴史（空間的イメージに置き換えられやすい、たとえば、年表、植物）、過去現在未来（空間的イメージにたとえられやすい、たとえば、円、輪、線、紐、縄、川の流れ）という分類＝分断された言葉＝イメージとして個別に扱われる。

からです。

上の文章で、「物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」＝「持続性」という考え方が具体的な体験を、)

* 「志向している」

と記述されているのに対し、「円環状あるいは直線状の、物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」という考え方＝フィクションは、抽象的なレベル)

* 「にある」

と書かれている点に注目してください。

「言葉の表層＝音（おん）・文字」ではなく、「言葉の抽象的な側面＝意味・イメージ」にかかわっているフィクション＝考え方について記述する場合には、そのように表現するしか方法はないのです。

つまり、

* 具体的な体験をいくら言葉で書き表そうとしても、それは不可能な夢でしかない

のです。そのことに敏感でありたいと思っています。

*

それはさておき、次の点がきわめて重要です。

* 「物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」＝「持続性」という考え方＝フィクションを空間的イメージでとらえるとするなら、それは「重なる・かぶる・ダブる／ずれる・ゆがむ・はずれる」という映像になる。

と言えそうです。歌にたとえて考えてみましょう。

* 歌は、「再現・再演・模倣」＝「重なる」、あるいは、「変奏・編曲・改変」＝「ずれる」という形で現前する。

そして、

* 「うたう」という行為は、「再現・再演・模倣」＝「重なる」、あるいは、「変奏・編曲・改変」＝「ずれる」という形で、具体的に体験される。

のではないのでしょうか。

*

きょうは、これから家事をしながら、「うたう・まつ」について考えてみたいです。

めまいの後に千鳥足でふらついているような文章に、お付き合いいただき、感謝いたします。どうもありがとうございました。

ところで、「鳴く」というのも、「うたう」に通じるものはありませんか。「通じる」なんて、きっとヒトの不遜な＝勝手な＝思い上がった妄想でしょうが、とにかく真似てみて、心地よいことは確かです。空耳かもしれませんが、遠くでネコが鳴くような声がしたので、鳴いて呼んでみようかと思います。

ネコが鳴き 声音を真似て アホが鳴く

にゃんにゃんにゃ にゃにゃんがにゃんで にゃあにゃあにゃ

ねころがり 漱石読んで 猫語訳

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

◆まつはいつまでも、まつ

2009-07-03 09:08:31 | 言葉

マルシアという、ブラジル出身の歌手・タレントがいますね。数年前、テレビのバラエティ番組に、その

* マルシアさん

が出ていて、次のような話をしていました。

ブラジルにいた幼い頃から歌が好きで、のど自慢大会があると、よく参加をしていた。日本で歌手としてデビューするきっかけとなった大会で優勝したさいに歌ったのが、

* あみん、というデュオの持ち歌である「待つわ」（作詞・作曲：岡村孝子）

だったが、その歌詞の意味がよく分からずに、さびの部分の

* ♪ まつわ～

の「まつ」が「松」だとずっと思って歌っていた。そんな意味のことを話していたように記憶しています。歌詞の聞き間違いというのではなく、歌詞の内容の思い違いだったというわけですね。

*

記憶というのは、非常にテキトーで勝手なものですので、難聴者である自分が、その話を

* 聞き間違えたと同時に内容を「誤解した＝想像・妄想で分からない部分を補った」⇒ 聞き間違いをもとに話を無意識にでっちあげてしまった ⇒ でっちあげた話を忘れかけた ⇒ 忘れかけた話を思い出そうとして、さらに記憶を補った＝でっちあげた

という可能性はきわめて高いです。

中途難聴者である自分の場合には、聞こえが不安定で、

* 人の声が音としては聞こえても、意味を持つ声＝話し言葉としては認識されない

ことがよくあります。話している人の声の質、聞いている環境、自分の体調などの要素

によって、聞こえの程度はまちまちです。話している内容が、よく聞きとれない場合には、「補う＝でっちあげる」という「作業＝操作」を、脳が「ほぼ自動的に＝勝手に＝テキトーに」やってしまう癖がついています。

ですので、正確な記憶かどうかは分からないのですが、マルシアさんが、さらに次のように話していたような気もするのです。歌のさびの歌詞を

* 松はいつまで経っても松だ

という意味で解釈していて、変な歌だなと思ってはいた。

この記憶は、今、書いていながらも、自分の「でっちあげ」ではないかという気がします。間違いだったら、ごめんなさい、マルシアさん。マルシアさんが、このブログを読んでいるという確率は、

* 1億分の1もない

とは思いますが、お断りしておきます。個人的には、こういう

* 聞き間違いや記憶違い

の話が大好きです。

* 「正しくない」大好き派

なのです。ちなみに、

* まつ「は」、いつまでもまつ。

の「まつ」を「松」と読むと、英語では、

* Pine trees will be pine trees.

でしょうか。または、「待つ」と読めば、

* Waiting will be waiting.

でしょうか。

* Boys will be Boys. (男の子は、いつまでも男の子。＝男どもの腕白ぶりは、直らな

い。)

という慣用句のパクリなんですけど。

これが、

*まつ「わ」、いつまでもまつ。(※著作権への配慮から、文末の「わ」は省略してあります)

なら、I can wait. I'll be waiting. といったところでしょうか。孝子ちゃんに、そう言われてみたいです。はっきり言って、あの人、好みです。声域も、自分の耳にとっては聞き取りやすいほうですし.....。

いずれにせよ、よく考えてみれば、

*意味がよく分からない母語ではない歌を熱唱していたからこそ、現在のマルシアさんがいる

わけです。その意味では、

* ♪ 待つわ～

が

* ♪ 松は～

として歌われた話は、感動的ではないでしょうか。また、このブログを書いているアホをふくめ、この国で日本語を母語として育った人たちが、

*英語なり、スペイン語なり、中国語なり、イタリア語なり、ドイツ語なりの歌を、その意味や、まして、行間にあるニュアンスや背景など、まったく知らずに気持ちよく、うなっている

といった現象＝出来事は、ざらに起きていると想像されます。この時点でも、さぞかし多くの人が、どこかで、意味がよく分からない歌をうたっているでしょう。

*

こうした、

*意味が分からないのに、うたう・となえる・はなす・くちにする・ひとつたえる・かく・しるす・おぼえる

ということは、

*特殊な話ではない

のです。

*よくある話

なのです。たとえば、

*お経、保育園・幼稚園でのお歌の時間、学校の授業での音読、カラオケボックスでの覚えたての歌の練習、お習字、今流行の写経、文字を習いたてのコドモたち、言葉を習いたての人たち、新聞の音読、プレゼン、役人の書いた答弁書を国会で読みあげる大臣、国会の議場での速記、裁判での答弁書の朗読、自分の書いたブログ記事を読み返しているこのアホ.....

今挙げた例には、明らかに意味が分からずに行っている行為=動作もあれば、意味がある程度分かっているかに思える行為=動作もありそうです。でも、個人的には、これらの行為=動作すべてが、

*意味が分かってやっているようで、そうではない

と思えてなりません。悪い意味で言っているのではありません。

*「良い悪い」といった次元の話ではない

のです。

*意味が分からないけど、やっている

むしろ、それが、

*ヒトという種（しゅ）にとっては、ふつうなのだ

と言いたいのです。このことについては、いつか、あらためて考え、書いてみたいとも思っています。

*

で、

* 「まつ」

ですが、この言葉・イメージについて、きのうから、

* 「うたう」と「持続性 = durée」

とともに、いろいろ考えていました。その過程で、上のマルシアさんの話が、「ぼろりと出てきた = ふとあたまに浮かんだ」のです。「まつ」を、広辞苑などの辞書で引いてみたりもしました。

* まつ・待つ（来ると予期される人や起きるはずの物事を迎えるために時をすごす・これからの出来事について様子をうかがう）・俟つ（たのみにする・期待する・なにごとかの事態の進展をこれからの展開にまかせる）・松（神がその木に降り立つことを「まつ」という説あり・葉が二股に分かれるさまから「また・股」から転じたという説あり）

以上が調べた結果ですが、個人的には、

* まつ・間つ・ま+うつ・間を打つ

とも、感字 = 当て字をしたい気持ちが強くあります。

* 正しくない

に決まっています。でも、それでいいのです。

* 言葉とは、ヒトがつくった、正確に動くときれる機械がつくったものではなく、きわめてテキトーで、ぼけーとする習性があるヒトがつくったものであり、この時点でも、いろいろなところで、いろいろなヒトによって、つくられつつある「動的な = ダイナミックな = 動きつつある = 変化の」過程にあるものである。

と思います。もちろん

* 「正しい」もある

でしょう。でも、

* 「正しくない」もある

のです。ひょっとすると

* 「正しくない」のほうが多い

かもしれないのです。いや、きっとそうです。そうお思いになりませんか？ ヒトって、

* 綱渡りをしている＝宙ぶらりんの状態にある

のではないのでしょうか。

* ヒトは、すべて「何か」におまかせの「状態＝常態」にある。その「何か」が何なのかについても、「何か」にまかせてある。

という感じがしてなりません。

*

で、さきほどの

* まつ・間つ・ま＋うつ・間を打つ

ですが、

* ま・間・あいだ・あわい

という大好きなイメージ＝言葉が、あたまに浮かんで仕方がないのです。

学生時代に、暗唱させられて、言葉の断片として、このアホのあたまに残っている＝こびりついている

* 「durée = 持続性・持続期間・期間」

という言葉ですが、フランス語の名詞でして、動詞形は

* durer = 持続する・続く・長持ちする・しんぼうする・じっとしている

です。英和辞典を引いてみると、古い英語でも、durer が、フランス語とほぼ同じ意味で存在していたみたいです。みなさんのなかには、ここで

* during に似ている

とお感じになった方もいらっしゃるかもしれませんが、その通りのようです。なにしろ、-ing がつけば、「～すること＝動名詞」、あるいは、「～しつつある＝現在分詞」ですよ。で、

* during = ~のあいだじゅう（ずっと）・ある特定の期間のある時に・～のあいだに

のほかに

* endure = 我慢する・持ちこたえる・持続する

も「dure = 固める」というラテン語から来ていると書いてある辞書もあります。

* 「固い・固める」と「続く・持ちこたえる」とが結びついている

みたいです。こじつけやすいイメージですね。

あと

* まつ・俟つ・期待する・たよりにする

の系列＝イメージですと、英語の

* expect = 語源は「何かを求めて外や前方をじっと見つめる」

や

* hope = 語源は「何かを求めて胸が高鳴る」: 「ホップ・ステップ・ジャンプのホップ＝ぴょんぴょん跳ぶと親戚らしい」

や

* anticipate = 語源は「先にとる・先取りする・予想する」

や

* wait = 語源は「待ち伏せする ⇒ 見張る、見守る、じっと見ている」

がありますね。こうやって、日本語や英語における、ほぼ同義の言葉の語源を調べて、その

*言葉のもののイメージ=原風景

を、ながめる=みる=感じるのが好きです。だから、このアホは、

*言葉のフェティシスト

を、生意気に自任したりするのです。言葉を愛しています。

*話し言葉=音声、書き言葉=文字・活字、言葉の意味=イメージ

と、

*たわむれる（たわぶる=ふざけあう=じゃれあう）

とか

*あそぶ（浮世を離れて別の世界に身をまかせて、うたい、おどり、はしゃぐ=ハレつまり非日常的時空に身をゆだねる）

のが、唯一の楽しみなのです。

*

で、このブログを書く

*時間=とき

が、そうした

*言葉との接触=付き合いの「持続しているあいだ =ま・間・あいだ・あわい」になっている

のです。だから、多少長い記事を書くことになっても、疲れはしますが、苦にはなりません。

*いい気持ちで、好きな歌をうたっていたり、ハミングしていたり、あるいは、好きな人を待っている

のと、似ています。

*待つ

に関して言えば、

*会った瞬間よりも、会うまでの待っているあいだのほうが幸せだ

という気持ち＝心理が分かるような気がします。

*「durée = 持続性・持続期間・期間」

というのは、そんな、

*わくわくどきどきじりじり

ではないでしょうか。変なことを書きますけど、

*おしっこを我慢している状態にも相通じる

ものがありませんか？ あれって、まさに

*「待っている」「俟っている」

のですよね。わくわくどきどきじりじり、なんて感じつつ。

*サスペンス = suspense

というのにも、相通じるような気がします。あれこそ、

*宙ぶらりん＝どうなるんだろう＝この結果を知りたいなあ＝この先を見たいなあ

ですよね。

*世界中の多くの人たちが、サスペンス小説や推理小説や謎解き、および、その主の映画・テレビドラマを好んでいる

ということは、先月の後半に、このブログで熱中していたテーマである、

* 普遍性・普遍的

と重なる現象だと言えそうです。この辺の経緯について、ご興味のある方は、「こんなことを書きました（その 11）」2009-06-26 で、簡単にまとめてありますので、よろしければご一読ください。

*

で、きのうからずっと考えていることで、特に気になるものとして、

* 「歌・音楽＝音声の持続」における、「旋律＝経路＝進行方向＝運んでくれるもの＝乗物」

と

* 「歌・音楽＝音声の持続」における、「再現・再演・模倣＝重なる・かぶる・ダブる」および「変奏・編曲・改変＝ずれる・ゆがむ・はずれる・ぶれる」

があります。これを、「まつ」でも、考えてみます。

* 「まつ・待つ・俟つ・期待する・たのむ・頼む・恃む・当てにする・宙ぶらりんになる or される＝あいだ・間・サスペンスの持続」における、「予測・予見・予想・見込み・見通し・見積もり・先読み・下読み・シミュレーション」と、それに対する「演習・練習・訓練・リハーサル・予習・心積もり・けいこ・用意・準備・備え・ウォーミングアップ・段取り・対策・対応・地ならし・お膳立て・布石・身構え・心構え・心積もり・心得」

みたいなものを、あたまに浮かべています。

さらに、でまかせ＝こじつけ＝フィクションつくりをエスカレートさせてみます。とにかく

* 筋＝広義のストーリーのあるもの

を列举してみましょう

* 歌・音楽・踊り・能・オペラ・演劇・物語・小説・神話・経典・映画・テレビドラマ・ゲーム・人生・生活・歴史・未来図

こうなると

* 「何でもあり状態」

になってきます。実際、そうなのでしょう。何でもありい〜って感じです。

*

で、その

*筋＝広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くっついていく・まねる・ならう」という運動・動作

が、すごく気になるのです。ひよっとすると、この運動・動作が、

*わくわくどきどきじりじりの正体

ではないでしょうか。で、上のフレーズをもっと長くしてみます。

*筋＝広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くっついていく・まねる・ならう」という運動・動作を、あたまのなかで、あるいは、身体を用いて、何度も繰り返す喜び・快感に、ヒトは取りつかれている＝依存症になっている＝離れられない＝なしではいられない。

という気がします。これは、

*ヒトのフィクションへの偏愛＝異常な愛着＝依存症と深くかかわっている

とも言えそうです。

*ミメシス・ミーム・模倣・擬態・コミュニケーション・伝達・学び・学習・共感＝感情移入＝empathy・思いやり・同情・関係性・引き寄せ・感染・反復・永劫回帰・円環・輪・鏡・複製・コピー・クローン・生殖・増殖・培養・細胞分裂・挿し木・再生・再演・認証・同定.....

という具合に、イメージと言葉とが、まさに「増殖」し続けます。

*増殖が増殖する。

ということです。で、上記の言葉たちに共通するのは、

*つなげる仕組み＝つなげるフィクション＝つなげるダイナミズム

という点かもしれません。いろいろなものが、つながってしまいます。というより、勝手につなげてしまっているのですけど。いや、そうじゃなくて、

*実際につながっているらしき現象を、今度は言葉とイメージでつなげるという儀式＝操作によって、確認＝納得する。

というのが正確な言い方かもしれません。もちろん、

*「実際につながっている」かどうかは、検証不能だ

ですけど。いずれにせよ、これこそまさに、

*アーサー・O・ラヴジョイ（1873-1962）の著作『大いなる存在の連鎖』（The Great Chain of Being）

です。この本の存在を教えてくれたのは、

*「学魔」の異名をとる高山宏氏

でした。

*何でもつなげてしまう名人

です。何でもこじつける癖は、この人の影響も大きい気がします。高山氏は、

*由良君美（ゆらきみよし）（1929-1990）

の直弟子です。由良君美については、「テリトリー（7）」2009-06-12 という、このブログでは、おそらくいちばん短い記事に書きましたので、お読み願えれば幸いです。再評価されるのを、個人的に切望している人です。

で、その高山宏氏が、四半世紀以上も前に、目の前で、空で＝何も見ないで、すらすらと書いてくれた膨大な数の文献のリストが残っているノートは、今も大切に保存してあります。

*自分にとっては、大きすぎる人でした。

このあいだ、“高山宏”でググってみたところ、目の具合がそうとう悪くなっている、と書いてあるサイトがありました。あの頃も、良くなかったのに……。心配です。あま

りにもの懐かしさに涙がこぼれてきました。ちょっと、きょうは、変かもしれません。毎度のことですけど。

いろいろな言葉とイメージの洪水＝氾濫に、あたまがふらふらしてきました。まわりの空気が暑いのか、自分のからだか熱っぽいのか分からない感じもします。早めの夏バテかも。インフルエンザより、ましかも。いや、そうかどうかは、分かりません。

いずれにせよ、これから、ちょっと休息して、あたまを冷やします。そして、上でつなげた言葉たちについて、考えてみます。

* つなげた言葉たちの鎖をながめ、あたまのなかで持続・再現・再演・反復・変奏してみる

つもりです。

*

きょうは、たぶん、いつもより、さらに散漫な文章を書いたと思います。ごめんなさい。この行まで、読んでくださった方、どうもありがとうございました。では、また。

崖のふち うなる潮風 うたう松

09-07-04 あわいあわい・経路・表層（1）

◆あわいあわい・経路・表層（1）

2009-07-04 09:59:29 | 言葉

今、PC協のアナログ式の置き時計を見えています。文字盤の最上部にある12の真下に「SEIKO QUARTZ」と記されています。単2形の電池で動くものですが、四半世紀以上にわたってかなり正確に

* 「とき」を「きざむ」

という動作＝働きを続けています。長針、短針、そして秒針があります。

*クォーツ時計

というのは、

*電圧をかけられた水晶が規則的に震動する

という現象を基本としているそうです。

*揺れている

ということですね。

*振り子の揺れから、水晶の揺れへ

というわけですか。

*この置き時計の3本の針は、これまでに文字盤をそれぞれ何周したのでしょうか？

機械＝器械＝計器は、ヒトがつくったものです。ヒトは自分の身体および知覚器官、そして都合に合わせてものをつくります。ともすると、

*ヒトは、どこかヒトに似たものをつくる

と、以前から思っています。PC脇の置き時計の文字盤をじっと見つめていると、ヒトの顔に見えてくることがあります。

*文字盤はヒトの顔を模倣している

と思います。針の位置によって、表情が変わります。

時計の針を、英語では needle ではなく、

* hand

と言いますね。そう思って、目の前の時計を見てみると、文字盤の真ん中にある軸のぼつちがヒトのあたまに見えてきました。ちょうど、真上から、ヒトを見下ろした感じです。長さの違う腕 (arm) を開いているように見えます。すると小刻みに動く秒針がうざく感

じられます。やっぱり人面のほうがしっくりきます。

時計をながめていると、同じように文字盤に見入っていたいろいろな時を思い出します。たいていは

*ちょっと目をやる場合は、時刻を知る時

が多く、

*じっと見つめている場合には、何か or 誰かを待っている

ことが多かったように感じられます。

*待っているあいだに、これから起こると予想される出来事をなぞる

という行為があたまのなかに浮かびます。きのうの記事で書いた、

*ミメシス・ミーム・模倣・擬態・コミュニケーション・伝達・学び・学習・共感＝感情移入＝empathy・思いやり・同情・関係性・引き寄せ・感染・反復・永劫回帰・円環・輪・鏡・複製・コピー・クローン・生殖・増殖・培養・細胞分裂・挿し木・再生・再演・認証・同定.....

といった言葉＝感じ＝イメージに類することが、

*脳のなかの「スクリーンという場＝意識」で起きる

のではないかと想像＝妄想しています。

*脳のなかで、何度も何度も、やり直す＝繰り返す

のです。

*時計を見つめるという動作は、人為的に「既視感＝デジャ・ヴュ」を「呼び起こす＝誘い出す」儀式めいた行為だ。

とも言えそうな気がします。

*これまで経験した、さまざまな「まつ・待つ・俟つ」が数知れなく重なって立ち現れてくる

ような感じですが。不思議なことに、

* 「待つ」行為における人為的な既視感＝デジャ・ヴュは、「未来に起こること」＝「未だに起こっていないこと」も「既に見たこと」として感じられる。

のです。

*

きのうから、

*再現・再演・反復・変奏・持続

という言葉＝イメージを相手にたわむれています。

*アナログ時計や、レコードや、CDが円状である

とか、

*デジタル時計が数字の組み合わせのサイクルを演じている

とか、

*映画やテレビ放送が、静止した映像つまりコマを連続させることで、錯覚を起す装置＝仕組みである

とか、

*ヒトは時間を空間的な比喻＝たとえ＝こじつけ＝だまし絵＝錯視で処理する

などといったフィクション＝お話も、それなりにおもしろいですが、時計の文字盤を眺めながら、

*再現・再演・反復・変奏・持続を、具体的な体験として生きるという、これもまたフィクション＝お話でしかないものを、脳 or 意識 or 自我と呼ばれている「得体の知れない＝わけの分からない」場で、演じる＝「なぞる」

ほうが、ずっと刺激的です。ちなみに、今、「なぞる」と書いたのは、

*「経路」が、既に敷かれている＝引かれている

からです。いずれにせよ、少なくとも、

* 「演じる」 = 「なぞる」という体験が「今ここ」である

のです。そのはずで、とはいうものの、

* 「今ここ」を離れ、「かなた=彼方=あなた」へと飛ぶことを思い描く=志向する=思考する

ことも、捨てがたい魅力をもっているのは確かです。

*

で、今、そんな具合に思い描いていること=妄想を以下に書きつづってみようと思います。

きのうは、散漫でトリトメのない文章を書いてしまったので、暴走を防ぐために、とりあえず、見通しを立てておきます。

- 1) 「経路」に沿った再現・再演・反復・変奏・持続という体験について
- 2) 生得的な「経路」について
- 3) 「経路」にはどのようなものがあるか、について

以上の3点に絞って、記事を書いてみます。結果的に書き散らす形になってしまった、

*きのうの記事の注釈

みたいなものになりそうです。では、順番にいきます。

- 1) 「経路」に沿った再現・再演・反復・変奏・持続という体験について

まず、きのうの記事から引用させてください。

★*意味が分からないのに、うたう・となえる・はなす・くちにする・ひとつたえる・かく・しるす・おぼえる

ということは、

*特殊な話ではない

のです。

*よくある話

なのです。たとえば、

*お経、保育園・幼稚園でのお歌の時間、学校の授業での音読、カラオケボックスでの覚えたての歌の練習、お習字、今流行の写経、文字を習いたてのコどもたち、言葉を習いたてのヒトたち、新聞の音読、プレゼン、役人の書いた答弁書を国会で読みあげる大臣、国会の議場での速記、裁判での答弁書の朗読、自分の書いたブログ記事を読み返しているこのアホ.....

今挙げた例には、明らかに意味が分からずに行っている行為=動作もあれば、意味がある程度分かっているかに思える行為=動作もありそうです。でも、個人的には、これらの行為=動作すべてが、

*意味が分かってやっているようで、そうではない

と思えてなりません。悪い意味で言っているのではありません。

*「良い悪い」といった次元の話ではない

のです。

*意味が分からないけど、やっている

むしろ、それが、

*ヒトという種（しゅ）にとっては、ふつうなのだ

と言いたいのです。このことについては、いつか、あらためて考え、書いてみたいとも思っています。

*

以上が引用ですが、「いつか、あらためて考え、書いてみたい」の「いつか」が「きよ

う」になりました。

で、思うのですが、

*ヒトは、自分自身によって or 他人によって、話された or 書かれた言葉を、「分かる」「理解する」「解釈する」ことはできない

という点を確認したいと思います。この場合の言葉は、

*「広義の」言葉＝言語：話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（家庭だけで通じる断片的な手話）、指文字、点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、画像、さまざまな標識や記号や信号、および、あらゆる知覚対象など

と理解してください。ただ、話がややこしくなるので、話し言葉と書き言葉だけをイメージしながら、これから書く文をお読みなっても、いっこうにかまいません。

で、

*「分かる」vs.「分からない」／「理解する」vs.「理解できない」／「解釈する」vs.「解釈できない」という対立は、パーセンテージという形で、ある程度の定量化が可能な次元の「話＝フィクション」ではない。

と思われます。つまり、「あのヒトの話は、90% or 9割くらい理解できたみたい」といった比喩で片付けられるたぐいの問題ではない、という意味です。というよりも、

*ある文章について言うなら、100人のヒトがいれば、100通りの「分かる」「理解する」「解釈する」がある。また、あるヒトが、その文章を仮に100回読んだとすれば、100通りの「分かる」「理解する」「解釈する」がある。そうした次元の話＝フィクションなのである。言い換えるなら、今挙げた2つの例における、100人の100通りの「読み」、および、同一人物の100回の100通りの「読み」における、「分かる」「理解する」「解釈する」という行為の、「ずれ＝差異＝際＝間＝あいだ＝あわい」に関する、話＝フィクションが問題になっている。

ということです。

*

違った例を挙げましょう。

*歌をうたう行為や音楽の演奏が、毎回、「異なる=ずれる」という体験にも、よく似ている

と言える気がします。または、

*ある特定の歌や演奏を収録したCDや、映像付きのDVDを100回再生すれば、100回の「異なった=ずれた」「感慨=印象=イメージ」を、「与えてくれる=いただく」という体験にも、よく似ている

と言えるでしょう。なぜなら、

*ヒトは、各人が異なった「生=持続」のなかにおいて、しかも、各人が刻々と異なった=変化する「生=持続」の過程にある。

からにほかなりません。簡単に言えば、ヒトにとって、

*人生に、同じ「とき・時・瞬間・あいだ・間」はない。

ということです。難しいことはありません。

*誰もが、今、この時点（※実際には、「移り変わり」として体感される）に、具体的な体験として感じ取ることができる

たぐいの現象（※実際には、お話=1つの考え方=フィクション）なのです。

*生=持続=移り変わり=ずれ=差異

という現象（※実際には、お話=1つの考え方=フィクション）については、歌や音楽以外に、次のような例もあります。

*

かつて、印刷術が発明されてはいても、普及していなかった長きにわたる時代に、

*「うつす=移す=写す=映す」

という作業が、いわゆる東洋・西洋を問わず、大きな役割を果たしていました。たとえば、

*話し言葉であれば、口承や口承文学と呼ばれるものとして、説話、先祖の物語、神・

神々の物語＝神話、預言、経典、法典が、口伝（くちづて）という形で、代々受け継がれてきた。

という「歴史的事実（＝フィクション）」があります。ごくふつうのヒトたち＝いわゆる庶民が伝えてきたケースもあれば、ホメロスのように、並外れた記憶力の持ち主が壮大な叙事詩を暗唱していたという話もあります。

*口承・口伝の過程において、ずれ＝差異が生じて、さまざまなバリエーション＝バージョンが存在する結果となった。

という点は、いわゆる文化というものを考える上で看過・無視できません。また、

*書き言葉であれば、口承・口伝されてきたものが文字に変換される＝置き換えられるという作業が行われていた。その結果として製作された書き物＝文書が、印刷、あるいは、筆写という形で、複製されるようになった。

という「歴史的事実（＝フィクション）」があります。具体的には上記の、

*書き物＝文書という形態となった説話、先祖の物語、神・神々の物語＝神話、預言、経典、法典が、書き写されたり、印刷されてきた。その過程において、ずれ＝差異が生じて、さまざまなバリエーション＝バージョンが存在する結果となった。

という点も、さきほどと同様に、いわゆる文化というものを考える上で看過・無視できません。

もう1つ大切な「うつす・移す」という作業があります。「翻訳」です。

*いわゆるお経などの聖典・経典が、いわゆる「原典」からさまざまな言語に「翻訳」された。その「翻訳」がさらに、筆写なり印刷されていった。たとえば、The Bible は、おそらく世界一のベストセラーだと言われている。

ことを思い出しましょう。学生時代に翻訳に興味をもち、

*ジェイムズ・M・ケイン（James M. Cain：1892-1977）作の「the Postman Always Rings Twice」が『郵便配達はいつもベルを二度鳴らす』or『郵便配達はベルを二度鳴らす』という邦題で、田中西二郎、田中小実昌、中田耕治、小鷹信光による訳本として簡単に入手して読めた時期に、読み比べた

ことを思い出しました。

* J・D・サリンジャー (J. D. Salinger : 1919-) 作の「Nine Stories」も『ナイン・ストーリーズ』『九つの物語』という邦題で複数の翻訳が同時に店頭に並んでいた時期があった

ことも思い出されます。

翻訳の読み比べは、いい体験になると信じています。2種類以上の訳本のある海外の作品を見つけたら、ぜひ試してみてください。きっと言葉に対する見方が変わるでしょう。つまり、

* 複数の訳書の「あいだ・あわい」の「ズレ」を知ることで、「分かる」「理解する」「解釈する」について、再考するきっかけとなるだけでなく、再現・再演・反復・変奏の意味も体感できる

と思います。ちなみに、聖書にも英訳と日本語訳に、複数の翻訳があります。読み比べることで、宗教観が変わるかもしれません。

*

話をもどします。かつて、聖典や経典が文字化されていく過程で、

* 「異本」＝「別本」が複数存在し、それを校合(きょうごう)＝校正＝検討することにより、「定本」が製作された。

という事実(※実際には、フィクション＝物語)は、

* 「正しい」「正しくない」／「正と副」／「正と誤」／「正と邪」／「真と偽」／「神と悪魔」／「正統と異端」

といった

* きわめて抽象的な2項対立の物語にかかわる、きわめて具体的な物的証拠をめぐる物語である

と考えられます。つまり、一字一句のレベルでの「ズレ＝差異＝際＝間＝ま＝あわい」を検討するわけですから、きわめて具体的で緻密な作業にならざるを得ません。とはいえ、宗教の話ですから、最終判断は、「正統と異端」という抽象的かつ主観的な2項対立にしたがうのは言うまでもありません。そういう意味です。

駄目押しに言うなら、

*「物語の物語」＝「物語をめぐる物語」という「再現＝模倣＝反復」運動は、言葉を扱う以上、避けられない。

ということです。

また、

*生＝持続＝移り変わり＝ずれ＝差異は、ミクロ的視点に立てば、人生に、同じ「とき・時・瞬間・あいだ・間」はないという現象（＝フィクション）から生じ、マクロ的視点に立てば、さまざまな文化に共通して見られる、「真と偽」に代表される抽象的な2項対立という現象（＝フィクション）として立ち現れている。

と言えそうです。

以上を前提にして、「経路」というお話＝1つの考え方＝フィクションについて、述べたいと思います。ここで、きのうの記事から再度、以下に引用させていただきます。

★で、きのうからずっと考えていることで、特に気になるものとして、

*「歌・音楽＝音声の持続」における、「旋律＝経路＝進行方向＝運んでくれるもの＝乗物」

と

*「歌・音楽＝音声の持続」における、「再現・再演・模倣＝重なる・かぶる・ダブる」および「変奏・編曲・改変＝ずれる・ゆがむ・はずれる・ぶれる」

があります。これを、「まつ」でも、考えてみます。

*「まつ・待つ・俟つ・期待する・たのむ・頼む・恃む・当てにする・宙ぶらりんになる or される＝あいだ・間・サスペンスの持続」における、「予測・予見・予想・見込み・見通し・見積もり・先読み・下読み・シミュレーション」と、それに対する「演習・練習・訓練・リハーサル・予習・心積もり・けいこ・用意・準備・備え・ウォーミングアップ・段取り・対策・対応・地ならし・お膳立て・布石・身構え・心構え・心積もり・心得」

みたいなものを、あたまに浮かべています。

*

以上が引用ですが、

* 「経路」とは、「歌・音楽＝音声の持続」における、「旋律＝経路＝進行方向＝運んでくれるもの＝乗物」にたとえることができる。

と考えています。上述の

* 「広義の言葉＝言語」においても、「経路」が「時間＝持続」として、刻々と進行方向を決定していく。

点がきわめて注目すべき現象（※実際には、お話＝1つの考え方＝フィクション）ではないかと、考えています。なお、「経路」については、「3）「経路」にはどのようなものがあるか、について」で、後述します。

次に進みます。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「あわいあわい・経路・表層（2）」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます】

09-07-04 あわいあわい・経路・表層（2）

◆あわいあわい・経路・表層（2）

2009-07-04 10:04:51 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「あわいあわい・経路・表層（1）」の続きです。】

2）生得的な「経路」について

きょうの記事は、

*きのうの記事の注釈=変奏

となることが明らかになってきました。ですので、横着をして恐縮ですが、またもや、きのうの記事から引用させていただきます。

★*筋=広義のストーリーのあるもの

を列挙してみましょう

*歌・音楽・踊り・能・オペラ・演劇・物語・小説・神話・経典・映画・テレビドラマ・ゲーム・人生・生活・歴史・未来図

こうなると

*「何でもあり状態」

になってきます。実際、そうなのでしょう。何でもありい〜って感じです。

で、その

*筋=広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くっついていく・まねる・ならう」という運動・動作

が、すごく気になるのです。ひよっとすると、この運動・動作が、

*わくわくどきどきじりじりの正体

ではないでしょうか。で、上のフレーズをもっと長くしてみます。

*筋=広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くっついていく・まねる・ならう」という運動・動作を、あたまのなかで、あるいは、身体を用いて、何度も繰り返す喜び・快感に、ヒトは取り付かれている=依存症になっている=離れられない=なしではいられない。

という気がします。これは、

*ヒトのフィクションへの「偏愛＝異常な愛着＝依存症」と深くかかわっている

とも言えそうです。

*ミメーシス・ミーム・模倣・擬態・コミュニケーション・伝達・学び・学習・共感＝感情移入＝empathy・思いやり・同情・関係性・引き寄せ・感染・反復・永劫回帰・円環・輪・鏡・複製・コピー・クローン・生殖・増殖・培養・細胞分裂・挿し木・再生・再演・認証・同定.....

という具合に、イメージと言葉とが、まさに「増殖」し続けます。

*増殖が増殖する。

ということです。で、上記の言葉たちに共通するのは、

*つなげる仕組み＝つなげるフィクション＝つなげるダイナミズム

という点かもしれません。いろいろなものが、つながってしまいます。というより、勝手につなげてしまっているのですけど。いや、そうじゃなくて、

*実際につながっているらしき現象を、今度は言葉とイメージでつなげるという儀式＝操作によって、確認＝納得する。

というのが正確な言い方かもしれません。もちろん、

*「実際につながっている」かどうかは、検証不能だ

ですけど。

*

以上、長々とコピペをして、申し訳ありません。

あまりにも、説明不足の文章なので、どうか「説明責任」をまっとうさせてください。そのために、またもや、引用をしたいのですが、よろしいでしょうか？ えっつ？「気の済むように、勝手にすればー」ですか？ ありがとうございます。

ということで、「ぼーっとする、ゆえに我あり」2009-06-24 から、必要な部分だけを、以下にコピペさせていただきます。短いので、よろしく、どうぞ。

★*言語という表象の仕組み(=「何か」の代わりにその「何か」以外のもの)を用いる)には普遍性がそなわっている

らしい。そのように言えそうです。なぜなら、世界のほぼあらゆるヒトが、手話を含む、広義の言語を程度の差はあれ、用いているからです。で、さらに、

*ヒトは、言語という表象の仕組みを、生後に学習する前に既に生得している

のではないかと考えて仕方がないのです。これは、上述の

*デカルト(1596-1650)

そして、米国の

*チョムスキー(1928-)

という言語学者が共通していただいている考え方みたいなのです。

*

以上が、引用部分です。

で、材料がそろったところで、説明に入ります。結論から申し上げますと、

*歌・音楽・踊り・能・オペラ・演劇・物語・小説・神話・経典・映画・テレビドラマ・ゲーム・人生・生活・歴史・未来図

などの

*筋=広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くっついていく・まねる・ならう」という運動・動作を、あたまのなかで、あるいは、身体を用いて、何度も繰り返す喜び・快感に、ヒトは取り付かされている=依存症になっている=離れられない=なしではいられない。

と考えられます。つまり、

*ヒトにみられる、「フィクションへの偏愛=異常な愛着=依存症」と深くかかわって

る

とも言えそうです。

で、ただ今述べた考え方＝お話＝フィクションを敷衍（ふえん）するなら、デカルトやチョムスキーが、イメージとしていただいていたしていただきたい、

*ヒトは、言語という表象の仕組みを、生後に学習する前に既に生得している

というフィクション＝考え方＝お話と同様に、

*言語という表象の仕組み（＝「何か」の代わりにその「何か」以外のもの）を用いるには普遍性がそなわっている

とみなすこともでき、この考えを、さきほどの「筋＝広義のストーリー」に関する考え方と並べて類推する＝こじつける＝つなげるならば、

*ミメシス・ミーム・模倣・擬態・コミュニケーション・伝達・学び・学習・共感＝感情移入＝empathy・思いやり・同情・関係性・引き寄せ・感染・反復・永劫回帰・円環・輪・鏡・複製・コピー・クローン・生殖・増殖・培養・細胞分裂・挿し木・再生・再演・認証・同定.....

といった一連の言葉＝イメージに共通する、

*「つなげる」という仕組み＝「つなげる」というフィクション＝「つなげる」というダイナミズムという「特性＝属性」には、普遍性がそなわっている

となり、言い換えるなら、

*ヒトは、つなげる仕組み＝つなげるフィクション＝つなげるダイナミズムという特性＝属性を、生後に学習する前に既に生得している

と考えられます。これを、とりあえず、

*生得的な「経路」

という言葉（＝イメージ）で呼ぼうと思っています。

えっ？「それって、引用した文章を組み替えて、つなぎ直ただけじゃないの！」ですか？ お気づきになりました＝ばれました、か？

ごめんなさい。おっしゃる通りになってしまいました。いえ、悪気はございません。いつもの「ま、いっか」主義＝でまかせ主義を実行しているうちに、そうってしまったのです。お許し願います。えっつ？「勝手にすれば～」ですか？ ありがとうございます。

*

では、次に進ませていただきます。

3)「経路」にはどのようなものがあるか、について2)で見てきましたように、

*言語という表象の仕組み(=「何か」の代わりにその「何か」以外のもの)を用いる)

と、

*経路＝筋＝広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くつつく・くつついていく・まねる・ならう」という運動・動作

と、それに深くむすびついている＝重なっている＝かぶっている

*「つなげる」という仕組み＝「つなげる」というフィクション＝「つなげる」というダイナミズムという「特性＝属性」

は、

*ヒトにとって、普遍的なものであるだけでなく、生後に学習する前に既に生得している

と考えられます。そのうち、

*経路＝筋＝広義のストーリー

と、とりあえず呼んでいるものについて考えてみましょう。まず、これらの言葉＝イメージの類語を並べてみます。

*文法・ルール・方向性・規範・進行・流れ・傾向・志向性・指向性・傾き・構造・骨組み・プログラム・回路・型・スタイル・文体.....

といったところでしょうか。簡略化してみると

* 方向・進行——順序・前後——型・形

の3つの要素に分けられるような気がします。

次に、既存の研究分野や学問で使用されてきた、類似の用語＝ジャーゴンや、それと対立する用語＝ジャーゴンを、あえて、ごちゃまぜに並べてみます。なお、

* 類似と対立を併記するのは、両者が必ずしも対立しているとは限らず、むしろ、類似している場合がおうおうにしてある

からです。

* 物語の構造・説話の構造・構造分析・(広義の)文法・動機の文法・生成文法・旋律・節・節回し・メロディー・リズム・フレーズ・ロール・ロールプレイング・役割・役・キャラクター・キャラ・セリフ・司会・司会進行・演出・構成・台本・シナリオ・コード進行・マンネリズム・ワンパターン・ワンパターンギャグ・仲間受けギャグ・十八番(おはこ)・即興演奏・アドリブ・インプロ(即興劇)・自動書記・自動筆記・ノイズ・でまかせ・偶然・ハプニング・アクシデント.....

といったところでしょうか。以上が、「経路」の具体例だと言ってもかまわないと思います。こうしたさまざまな「経路」に共通しているのは、

* 規則性と不規則性

という2つの要素が拮抗していることです。その

* 程度が問題になっている

点が重要です。

* 「経路」において、規則性と不規則性は連続している

とも言え、

* 規則性と不規則性という2つの要素の程度の「差・間・あわい」が、各「経路」の名称を決定している

と言ってもかまわないと思います。突飛な例を挙げますが、いわゆる

* 出来レース=やらせという「経路」は、規則性と不規則性のあやうい綱渡りである。

と常々思っています。

上で列挙した2種類の言葉=イメージのリストを眺めると、

* 「経路」とは、方向=進行、順序=前後、型=形という3要素をめぐる、規則性と不規則性のからみ合いである

という気がします。比喩的に表現するなら、

* 「経路」とは、宇宙を支配する圧倒的な偶然性のなかに投げ込まれた、ヒトをふくむ森羅万象の運動であり、その運動に、ヒトがかろうじて「あわいあわい=淡い間」として意識する必然性の影である。ただし、「あわいあわい=淡い間」が、あくまでも抽象的なものとして、意識される点を忘れてはならない。

と言えるように思います。

*

さて、

- 1) 「経路」に沿った再現・再演・反復・変奏・持続という体験について
- 2) 生得的な「経路」について
- 3) 「経路」にはどのようなものがあるか、について

という具合に、

* きょうの記事は、きのうの記事を引用し、それに注釈を加える

という形式をとっています。お気づきになられた方もいらっしゃると思いますが、これこそ、まさに

* 再演・再現・変奏・反復

にほかなりません。何を言いたいのかと申しますと、

* 記事に書かれている言葉たちに、記事のテーマを演じさせる

という、このブログで、これまで何度も「密かに」試み、時には、その「種明かし」をしたことがある、

* 「意識的な」方法＝戦略＝お遊び

なのです。

* テーマとは、抽象的なものであり、フィクション＝お話＝考え方として、あたまたに訴えるしか「伝える」方法はない。

という宿命＝特徴をもっています。一方、この記事に書かれている

* 言葉たちは、あくまでも、具体的な活字＝文字であると同時に、テーマ＝メッセージ＝イメージを「伝える」という抽象的な側面も備えているという2面性をもっている。

と言えます。きょうの、

* 記事で試みた「意識的な」方法＝戦略＝お遊びは、活字＝文字の表層的なレベルにおける、言葉の具体的な運動＝動き＝表情＝仕草＝めくばせとして、テーマを言葉たち自身に演じさせようとする実験である。

と考えています。

* 実験である限り、評価の対象となり、また、成否の判断をくだされる対象ともなる。

のは、言うまでもありません。今回の

* 再演・再現・変奏・反復というテーマを、言葉が演じてくれた

と、あなたが少しでも体感されたとすれば、それに勝る喜びはありません。このブログを書いているアホは、それくらい言葉を愛しています。

* 言葉が言葉であることを、ヒトが知覚＝意識するのは難しい

のが現実です。

* ヒトは、言葉を前にして、言葉の向こう＝彼方＝あなた＝言葉以外のもの＝意味＝イメージ＝メッセージを見てしまう。

のがふつうです。

*言葉が皮膚＝肌＝裸体をさらしているのに、ヒトはそれを見過ごし、衣装を見てしまう。その意味では、言葉の表層も「あわいあわい＝淡い間」である。ただし、「あわいあわい＝淡い間」としての言葉の表層が、あくまでも具体的なものとして、知覚される点を忘れてはならない。

と言えます。

だからこそ、

*言葉の表情と動きを、体感＝知覚してやってほしいのです。

ややこしいことを書いて、ごめんなさい。この方法＝戦略について、万が一興味をお持ちになった方がいらっしゃいましたら、「あらわれる・あらわす (6)」2009-05-30をお読み願います。そんなくだらないことに興味はないと思われた方は、パスしちゃってください。それが、ふつうだと思いますので。ただ、本人はけっこう、本気でやっているのですけど.....。

*

ここまで辛抱して読んでくださった方に、この記事のなかで書かれた裸体の言葉たちに代わって、深くお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

繰り返し 身をさらしつつ 見逃され

目を凝らし 踊る言葉を 褒めそやす

そこに在る淡いあわいに 目を注ぐ

09.07.05 マンネリズム・マニエリズム

◆マンネリズム・マニエリズム

2009-07-05 10:16:16 | 言葉

皮肉や冗談だと言われるかもしれませんが、

*「ワンパターン」は、褒め言葉だ。

と思っています。あたまにあるのは、水戸黄門や笑点ではありません。

で、

*ユーミン or みゆき or サザン or 陽水の歌はどれも同じように聞こえる

とか、

*スティーヴン・キング or みゆき or 漱石 or 龍 or 春樹の小説は同じような場面や人物が繰り返し出てくる

とか、

*ニナガワ演出のお芝居は見てすぐに分かる

とか、

*スピルバーグ節 or 調

とか

*マイコーの踊りはワンパターンだった

とかいう言葉をよく見聞きします。これらは、

*最高の褒め言葉

ではないでしょうか。

*多くの人に and / or 長く愛される作品には、パターン=文体=文法=流儀=芸風=刻印がある。

あるいは、

*多くの人に and / or 長く愛される作品の作り手には、「パターン＝文体＝文法＝流儀＝芸風＝刻印」がある。

と言えるような気がします。

*「パターン＝文体＝文法＝流儀＝芸風＝刻印」は、「抽象的なレベル＝深層」に潜む「経路」であると同時に、「具体的なレベル＝表層」に身をさらしている「現象・出来事」である。

ために、

*そのジャンルや作品や作り手に、それほど興味や関心のない人によって、「パターン＝文体＝文法＝流儀＝芸風＝刻印」が感知され、ファンに見過ごされる場合もある一方で、熱狂的なファンでなければ分からない場合もあり得る。

とも言えそうです。

たとえば、

*ユーミン or みゆき or サザン or 陽水の歌はどれも同じように聞こえる

といった現象は、興味や関心のない人によって感知される気がします。それに対し、

*スティーヴン・キング or みゆき or 漱石 or 龍 or 春樹の小説は同じような場面や人物が繰り返し出てくる

といった言葉は、同じ作り手による作品をかなり読み込んだ人でなければ、吐けないセリフかもしれません。なお、キング、みゆき、漱石の小説を「読むこと」については、「横たわる漱石」2008-12-26 に書きましたので、興味をお持ちの方は、ぜひ、ご一読ください。

音楽、小説、演劇、映画、ダンスだけでなく、

*スポーツという、まさに「運動＝動き」を鑑賞・観戦するジャンル・領域・フィールド

でも、上で挙げた各種の例と同じような言葉が口にされます。

*いかにもイチローらしいバッティング or 守備の美技

とか

*朝青龍得意の攻め方 or 攻めのかかし方

とか

*片山のフォーム or スイングを真似て盗む

とか言う場合がありますね。

*

ところで、

*才能って何でしょう？

単なる才能ではなく

*天才

と呼ばれる人も、いたりするみたいですね。

言葉だけで知っていて、どんなものか、よく分からないのですが、

*絶対音感、動体視力、知能指数、偏差値 or 標準偏差、記憶力

という尺度みたいなものも見聞きします。

*ジョージ・スタイナー（George Steiner : 1929-）という批評家

が、

*ボビー・フィッシャー（Bobby Fischer : 1943-2008）という米国生まれのチェスプレイヤー

と

*ボリス・スパスキー（Boris Spassky : 1937-）というロシア生まれのチェスプレイヤー

とのあいだで、1972年にアイスランドのレイキャヴィークで行われた世界選手権を取材

した本を書いています。その本を読んだことがないので、正確なことは知りませんが、読んだ人から聞いた話では、

*フィッシャーは、日常生活に支障をきたすほどのかなりの「変人」であるが、チェスの才能は「天才」と言っている

というようなことが、書かれていたそうです。さらに、

*音楽・数学・ゲーム（※チェス、囲碁などの意味です）に秀でるためには、日常生活をおくるさいに必要な資質はいらない

逆に言うと、

*日常生活に支障をきたす人が、音楽・数学・ゲームに秀でる現象がままある

という意味のことが書かれていた、と聞いた記憶があります。

*「変人」とか、「日常生活をおくる」とか、「日常生活に支障をきたす」

と書きましたが、実際には、そのスタイナーの本を読んだ人は、もっと

*過激な＝差別的な＝P C（政治的公正さ）を欠いた表現

を用いて、内容を説明してくれました。いずれにせよ、

*不思議な現象

ですね。

*

上記のお話では、

*狭義の言語、つまり、話し言葉や書き言葉の運用とは異なる、広義の言語の運用が問題になっている

ような気がします。きのうの記事で書いた言葉＝イメージをつかうなら、

*「経路」には、自立性＝自律性＝独立性が備わっているのかもしれない

と思えてきます。あるいは、

*「発達障害」という言葉で一緒くたにされている、さまざまな人たちのいろいろな資質

と関係があるのかなあ、と思ったりします。その言葉でくくられている人たちの

*生=生活=人生=生き様=在り様=からだとあたまとこころ

って、どんなふうになっているのでしょうか。不謹慎ながら、つい「軽い気持ちで」興味をいじめてしまいます。

いわゆる知的障害をもつと言われているにもかかわらず、

*ごく短いあいだに見た光景を、詳細にわたって絵として再現する才能

をもっている人について取材したテレビ番組を見たのを思い出しました。

ただ偏屈なだけの凡人のアホには、想像ができない話です。

*ヒトって、本当に不思議です

ね。

そういえば、中学時代のクラスメートに、ちょっと変わった才能をもった人がいました。

*聞いた言葉を、逆に再現する

のです。

*「あんたのブログはくだらないね」なら、「ねいならだくはグロブのたんあ」という具合

にです。実際には、20秒くらいのあいだに、他人が早口でしゃべった「言葉=フレーズ=文」を、逆に再現していた記憶があります。早口で20秒だと、かなりな文字数になると思います。確かめるのが大変なので、ほかのクラスメートが教科書の文章か何かを読んで、文字を指で指してたどりながら、正しいかどうかを確認していました。

ごくふつうの人だったのですが、その点だけが変わっていました。どうしているので

しょう、あの人は今。

* 回文の名手

にでもなっているのでしょうか。そういえば、回文に特化したブログを、このあいだ、間借りしているこのブログサイトにある

* ランダムブログ

という機能をつかって遊んでいて見つけました。この記事の左側の

* 「goo おすすめ」という欄の下のほう

にありますので、よろしければ、お遊びください。「ランダムブログ」という文字をクリックすると、ほかの goo ブログに飛べます。次に、そのサイトにある同じ「ランダムブログ」という文字をクリックする。これをえんえんと続けるのです。

* 宇宙の圧倒的な偶然性に身をまかせ＝ゆだね、宙ぶらりん状態でひたすら遊ぶ

のです。この遊びは、

* 「イワシの翻訳 LOVE」

というブログサイトを開設なさっている、新進気鋭の翻訳家である「イワシさん」から教えていただきました。なお、この遊びを楽しむのは、この記事を読み終えてからにしてくださいと、嬉しいです。

*

話をもどします。

* 「ワンパターン」は、褒め言葉だ。

そして、

* 「パターン＝文体＝文法＝流儀＝芸風＝刻印」は、「抽象的なレベル＝深層」に潜む「経路」であると同時に、「具体的なレベル＝表層」に身をさらしている「現象・出来事」である。

でしたね。さきほども似たようなことを書きましたが、要するに、

*小説であれ、歌であれ、演劇であれ、舞踊・舞踏であれ、スポーツであれ、多くの人から長く愛される作品や選手には、いわば「刻印」＝「経路」＝「文体」のようなものがある。

と思います。

*「刻印」＝「経路」＝「文体」があるから、「今ここ」と「かなた＝彼方＝あなた」とを同時に、再現・再演・反復・変奏・持続できる

とも言えそうです。

*作品にきざまれた or 内包された「刻印」＝「経路」＝「文法」は、言葉の動きとなって立ち現れ、あなたの「あたま」だけでなく、「からだ」に働きかける。

要するに、

*伝染るんです

と信じています。

*ワンパターン

に似た言葉に

*マンネリ

そして、そのもとになっている

*マンネリズム

という言葉がありますね。

*「あなたの〇〇はマンネリズムだ」

と言われて、

*「イズム＝-ism＝～主義」なんて立派なものがついているんだから、「マンネリ」よりかは、ましかー

なんて思う人は、あまりいないのではないかと、思います。

で、大きめの英和辞典で、

* mannerism (※「マナリズム」みたに発音しますね)

を引いてみると、語義として、「マンネリズム」のほかに、

* 「マニエリズモ」or「マニエリスモ」

とか

* 「マニエリスム」

という

* 「美術用語」

の意味があると分かります。で、

* 「誇張された」「非現実的」「不自然な姿勢」「複雑な遠近」「歪んだ」

などという、個人的にはわくわくする、たぶん一般的にはネガティブな響きをもつ言葉で、説明が書かれています。

さらに、「文学用語」でもあると書いてある大きな辞書もあり、そこには、

* 「異端」「奇想」「凝った」「気取り」

なんて、これまた個人的にはわくわくする、たぶん一般的にはネガティブな響きをもつ言葉で、説明が書かれています。

ぶっちゃけた話が、mannerism は、

* ひんまがった物の見方で、世界を見ている=感じている=とらえている

というわけです。一言でいうなら、

* まがっている

です。

* マナー = manner(s)

や

* マニュアル = manual

や

* マニキュア = manicure

と親戚で、語源的には、

* 「手」を意味する語から派生している

ようです。

* 「て」

を広辞苑で引くと、この

* 「語=音（おん）=文字」の驚くべき多義性=多層性を目にする

ことができます。「て」だけを「テーマ=て=ま=手=手=間」にして、横着をすれば、1日2本立ての記事が書けそうです。横着をしなければ、1週間ほどかけてシリーズが書けそうな気がします。いや、手に余る=手に負えない=てんで駄目だ、かも。

でも、いつか、やってみたいなあ――。

で、日本語の「て」と同様に、

* 「手」を意味する manus というラテン語経由で、英語に「うつった=移った=写った=映った=伝染った」という、man- とか、manu- とか、mani- で始まる語

の多様さにも、驚かされます。そういえば、

* 手って、まがりますよね = 口も「へ」の字」に、ひんまがりますよね = へそもまがる、みたいですよ

と、勝手に納得しておきます。

*

そうなると、このブログでは、

* 「マニエリスム」は褒め言葉以外の何ものでもない

ということになります。これで、決まりです。で、「マニエリスム」といえば、

* グスタフ・ルネ・ホッケ（1908-1987）という人と、「ホッケ教」信者を自任する高山宏氏

を忘れるわけにはいきません。“グスタフ・ルネ・ホッケ”でググるか、もしよろしければ、「かく・かける（6）」2009-05-18 の関係のある部分だけを、ご一読願います。さて、「まがる」に話をもどします。

*

* 「まがる」

を、広辞苑で調べてみましたが、残念ながら、語源の説明がありませんでした。仕方がないので、似た言葉の項を見てみました。念のために、申し添えますが、このブログは、いつもそうなのですが、

* 「正しい」vs. 「正しくない」は関係ない

です。むしろ、

* 「正しくない」に加担＝味方する

スタンスをとっています。さらに、

* 「ま、いっか」主義＝でまかせ主義実行中

でもあります。というわけで、

* 「ま・間・魔」「まあ」「まい・舞・昧・まいう・ま、いっか」「まう・舞う・眩う」「まえ・前」「まお・真央・マオ＝毛・真麻・間男・魔王」「まが・曲・禍」「まがごと・禍言・禍事」「まがまがしい・禍々しい・曲々しい」「真神」「間が空く・間が悪・魔が悪・真が

悪」「魔が差す・魔が指す・魔が刺す・魔が挿す・魔が射す・魔が注す」「まがよう」「まがり・曲がり・曲り・勾り」「まかる・罷る・みまかる」「負かる」「まかす・負かす・任す・委す」「まかぜ・魔風」「まがたま・勾玉・曲玉」

といった感じ＝感字になりました。

正直申しまして、收拾がつきません。ですので、原点にかえります。

*

* 「マンネリズム」と「マニエリスム」と「まがる」

です。で、でまかせをかましますと、これって、

* 「くせ・癖・曲・救世」

ということではないでしょうか。イメージとしては、

* 「癖毛」の「くせ」

です。

* 「手癖」の「くせ」

です。

* 「癖になりそ～」の「くせ」

です。

これって、まさしく、きのうの記事に書いた、あの

* 「経路」

じゃないですかー！

という具合に、このブログには、何でも、強引に、ところかまわず、

* 「つなげる＝くっつける＝こじつける」癖＝曲＝ビョーキ

があるんです。

きのうは

*「わりと」理詰め

かつ

*「かなり」戦略的

に、そして、

きょうは

*「きわめて」でまかせ主義

で、つまり、上述の、

*宇宙の圧倒的な偶然性に身を「まかせ＝ゆだね」、宙ぶらりん状態でひたすら遊ぶ

やり方で記事を書いてきましたが、同じ結論に達しました。

*ワンパターンも、マンネリズムも、マネエリズムも、最高の褒め言葉である

です。なぜなら、

*多くの人に and / or 長く愛される作品には、「くせ・癖・曲」＝「経路」＝「文体」＝「スタイル」がある。

そして、

*多くの人に and / or 長く愛される作品の作り手には、「くせ・癖・曲」＝「経路」＝「文体」＝「スタイル」がある。

からです。

*「文体」と、「肉体・身体」とは、同義語だ。

そう、本気で思っています。

* 「くせ」がヒトの「からだ」に具体的な「うごき」として立ちあらわれた「とき」、その「うごき」は「ねつ」となって「うつり」「ゆき」、それを「うつす」他のヒトたちのところをも「うごかす」。それこそが「わ」にほかならない。

そんな「かん」をいただいています。

*

いいところに、ネコが部屋に来ました。さっそく、ぐるぐるごっこをして、遊んでもらいます。

ここまで読んでくださった方に、感謝いたします。どうもありがとうございました。

よろしければ、このあと、上述の「ランダムブログ」で、ぐるぐるとお遊びください。まわって楽しむ、みなさまに、良きご縁＝円がありますように。

では、また。

まげる手にまなこ浴わせる 猫のくせ

まわりつつ などわで交わす無言の儀

09.07.06 こんなことを書きました（その12）

◆こんなことを書きました（その12）

2009-07-06 08:54:26 | 言葉

「こんなことを書きました（その11）」（2009-06-13～2009-06-25）の続きです。今回は、2009-06-26 から 2009-07-05 に掲載した記事のダイジェスト版です。短い解説とキーワードが書いてあります。

* 「こんなことを書きました (その 11)」 2009-06-26 : 2009-06-13 から 2009-06-25 に書いた記事のダイジェスト版です。

* 「空前の「純文学」ブーム」 2009-06-27 : 複数の「日記」ブログを定期的に読んでいるうちに、かつて「純文学の規範」と呼ばれた、いわゆる「私小説」と「心境小説」を彷彿させるだけでなく、過去の作品群と並べても遜色がないものが散見される状況となっているのに気づいたと述べています。その一方で出版物として、「私小説」が販売されるのがほぼ不可能になっている事態を指摘しています。最後に、ブログで日記を書いている人たちにエールを送っています。キーワードは、「身辺雑記」「写生」「物語性」「ケータイ小説」「ネット小説」「出版界」「柳美里」「モデル小説」「プライバシーの侵害」「最高裁判決」「出版差し止め」「車谷長吉」「提訴」「名誉毀損」「人権」「匿名」「ハンドルネーム」「フィクション」「ノンフィクション」「プロ/アマ」「モノブログ」「コラボログ」「作為」「演技」です。

* 「「時間」と「とき」」 2009-06-28 : 「時の神=あわいわあい (2)」 2009-06-25 の最後の部分がきっかけとなり、この日の記事から、物理的「時間」とヒトが意識する「とき」をテーマに論じています。ヒトが、もろに「時間」「とき」を意識する「待つ」という行為を分析しています。物理的「時間」とヒトが意識する「とき」とのあいだに、ヒトが感じる「ずれ」について、こだわっています。時間を扱うさいには、物理学を無視できないことは承知しつつも、自分には、その学問の素養も適性もないことを自覚し、あくまでも自己流で時間について考え、書いていくとの決心を述べています。時刻が「聞くもの」から「見るもの」へと変わっていた、という歴史的経緯についても触れています。また、ヒトにとっての最大の関心事である食べ物が「腐敗していく」のを見つめるという行為に、時間の知覚を重ねてもいます。キーワードは、「学問」「フィクション」「錯覚」「アナログ時計」「デジタル時計」「clock」「watch」「鐘」「montre」「horloge」「Uhr」「hour」「変化」「移り変わる」「流れ」「動き」「夢野久作』『ドグラ・マグラ』」「としをとる」です。直接書かなかったキーワードは、「ハイデガー」「ジャック・デリダ」「大森正蔵」です。

* 「「揺らぎ」と「変質」」 2009-06-29 : 「時間」「とき」について書くようになったきっかけを述べています。誰もが、日常的に体感できるレベルでの、具体的な「時間」の知覚と意識を対象に、思考しようと努めています。どうあがいても、そうした努力が抽象的にならざるを得ない限界を指摘しています。例として、自然言語と人工言語という2項対立を取り上げています。「前」と「後」という言葉に触れて、ヒトが時間的イメージを空間的イメージに「たとえる」習性があることを指摘し、ヒトは時間的経過の処理に比べ、空間的広がりでの処理のほうが得意なのではないかと推測しています。それは、ヒトが一度に一枚の「テレビ画面」しか意識できない=集中できないからではないか、と論を進めています。キーワードとキーフレーズは、「表象の仕組み」「間 (=ま・あいだ・あわい)」「森羅万象は変化しつつある」「主観・主観的/客観・客観的」「イメージ」「偶然性」「手話」「歴史」「年表」「スケジュール」「手帳」「カレンダー」「表象」「言語」「貨幣」「時間の経過とともに揺らぎ変質する」です。

*「不自由さ (1)」2009-06-30：この日の記事の前編。時間の経過を再現することの、不可能性＝不自由さがテーマです。「不自由さ」を「障害」と比較しながら、両者が「相対的」なものであり、「程度」の問題であると述べています。「とき」の再現の不可能性を、警察での「取り調べ」を例にとって考察しています。キーワードは、「知覚」「意識」「想起」「表現」「聴覚障害」「障害・障害者／健常・健常者」「聴力」「内部障害・内臓障害」「司法」「検察・検察官」「ビデオ撮影」「自白の強要」「冤罪」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」です。

*「不自由さ (2)」2009-06-30：この日の記事の後編。デカルトの「我思う、ゆえに我あり」は「ぼーっとする、ゆえに我あり」と同義ではないかと述べています。「考える・思う・思考する」という行為が、ヒトがふだん意識しているよりも、情報処理能力としてはレベルが低いのではないかという疑問を提起しています。特に、ヒトが時間の経過の処理を、空間のひろがりの処理で代用している事実、に、こだわっています。欠陥ではないかとも述べています。回転という動作を例にとって、読者に、この疑問を共有してもらおうと努めています。キーワードとキープフレーズは、「けん玉」「物理的現象の記述＝フィクション＝物語」「ヒト以外の生き物に学ぶ」です。

*「ぐるぐるゆらゆら (1)」2009-07-01：この日の記事の前編。ヒトが「時間」・「とき」を、円・円環・回転・ぐるぐる・輪として、知覚・意識・イメージ・表現すること、がテーマです。こうした現象が語られ、情報として伝達されるとき、それがフィクション＝物語にならざるを得ない点を確認しています。例として、天動説と地動説を挙げています。フィクションである限り検証は不可能である点にも、こだわっています。フィクションに対抗するものとして、「体感」を挙げ、時には、それが有効な手段となり得ることを指摘しています。テレビと映画が目の錯覚を利用したものである点にも触れています。キーワードは、「静止映像」「連続映像」「夢の視点・主語・作者・登場人物」「夢の想起」「正しい」「正しくない」「説得力」「プレゼン」「澁澤龍彦」「マルキ・ド・サド」「『悪徳の栄え』」「太陽の動き」「幻灯・幻燈」「コマ」です。

*「ぐるぐるゆらゆら (2)」2009-07-01：この日の記事の後編。依然として、ヒトが時間の経過の処理を、空間のひろがりの処理で代用している事実、にこだわっています。時間的前後を空間的前後として錯覚・混同・混乱するのではないかと懸念を示しています。揺らぐ・宙ぶらりん・まわるが、ヒトにとって基本的な動作・運動であるだけでなく、行動の指針・支え・無意識のメカニズムとなっているのではないかと述べています。それに、表象の仕組みがかかわっているのではないかと、とさらに妄想がエスカレートしていきます。言語・貨幣という、ヒトにとって特権的な意味を持つ表象を持ち出し、それが「まわる」「暴走する」というイメージを、さらに妄想しています。表象の暴走を、暴走した言葉に演じさせています。この戦略＝方法が、読者に伝わったかは不明です。ポケと突っ込みをひとりで演じ、記事の内容があやうくなっていくさまを相対化させようと努めていますが、この努力も、読者に伝わったかどうかは、はなはだ疑問です。また、

一連の説明が、一種のオカルトめいたものとして、読者に解釈されることに対し、予防線を張ろうとしています。それが成功したどうかも怪しいです。非常に誤解を招きやすいテーマに、逆に振りまわされています。学生時代にスラング語の授業で、「名文」をたくさん「暗唱する」ように指導された思い出についても語っています。これがきっかけとなり、次に、「口承」という「繰り返し」⇒「暗記」⇒「伝承」のメカニズムを思い出させています。キーワードとキーフレーズは、「偶然性」「必然性」「ヒトという種は、変わらなければならない」「重なる・共振する・交感する・シンクロする」「ボードレール」「『悪の華』」「交感 (Correspondances)」「フランス語教育」「口伝」です。直接書かなかったキーワードは、「アテネ・フランセ」「日仏学院」「蓮實重彦」「マリー＝シャンタル蓮實」「『フランス語の余白に』」「鈴木力衛」「『白水社シートブックスフランス名文選』」「前田陽一」「丸山熊雄」「『新フランス語入門』」「モーリス・パンゲ」「ミヒャエル・ミュンツァー」です。

*「うたう」2009-07-02：ヒトにとって常態である「動き」と、それを知覚・意識することについて考察しています。ヒトにとって、基本的な「動き」である「まわる」を論じ、「めまい」という個人的な体験を語っています。そこから、ヒトが「目がまわる」ことを好む習性に触れたあと、ふいにベルクソンの書いた哲学書の一節にあった、「durée (= 持続・持続性)」という言葉があたまに浮かびました。これも、学生時代に暗唱させられた文章の断片です。それまで、あたまにあった円状、線状の時間というイメージを一掃するほどの強い喚起力をもつ語でした。以後は、流れ・方向・経路というイメージで時間をとらえることに夢中になっています。音楽・旋律へと連想が進み、記事は「うたう」というテーマに引きつけられていきます。このように、記事を書いている過程が、1つの出来事＝事件＝accident＝偶然となっていく展開が理想です。まさに、ジャズのアドリブです。個人的にとっても愛着のある記事になりました。自己満足でしかありませんけど。キーワードは、「座禅」「無の境地」「ダイ・イン (die-in)」「フランス語教育」「カラオケ」「鼻歌」「ハミング」「うなる」「待つ」「期待する」「再現」「再演」「模倣」「重なる」「変奏」「ずれる」です。

*「まつはいつまでも、まつ」2009-07-03：歌手のマルシアが、デビュー前に「待つわ」という歌の歌詞にある「待つわ」を「松は」だと思っただけでうたっていたらしいというエピソードから、「正しくない」のポジティブな面を指摘しています。同時に、「まつ」の多義性と戯れながら、「うたう」「持続性」「待つ」「間を打つ」「ま・間」「俟つ・期待する」と話を運んでいきます。記事のテーマである「旋律・持続」を、つづる言葉たちに演じさせています。言葉の増殖が増殖を生むのにまかせています。その過程で漏れ出た「つながり」という言葉から、「大いなる存在の連鎖」へとつながり、高山宏という恩師の回想となります。高山氏の片方の目が失明したという話をウェブ検索のさいに読んだことに触れ、感傷的になって記事を終えています。キーワードとキーフレーズは、「岡村孝子」「聞き間違え」「誤解」「話をでっちあげる」「意味が分からないことをとなえる」「意味が分からない行為をする」「「durée」「during」「expect」「hope」「anticipate」「wait」「言葉のフェティシスト」「わくわくどきどきじりじり」「サスペンス」「推理小説」「筋」「ストー

リー」「なぞる」「ならう」「まねる」「アーサー・O・ラヴジョイ」「由良君美」です。

*「あわいあわい・経路・表層(1)」2009-07-04：この日の記事の前編。手元にある時計を題材に、「とき」「まつ」について考えをめぐらせています。テーマは、「経路」です。さらに1)「経路」に沿った再現・再演・反復・変奏・持続という体験について、2)生得的な「経路」について、3)「経路」にはどのようなものがあるか、について。以上の3のサブタイトルを「経路」にして、論を進めています。キーワードとキーフレーズは、「クォーツ時計」「揺れ」「機械」「脳のなかで、何度も何度も、やり直す＝繰り返す」「経路」が、既に敷かれている＝引かれている」「歌や演奏が、毎回、「異なる＝ずれる」「うつす・移す・写す・映す」「口承」「口伝」「筆写」「印刷」「複製」「翻訳」『郵便配達はいつもベルを二度鳴らす』『ナイン・ストーリーズ』『異本／別本』『正統／異端』です。直接書かなかったキーワードは、「宮川淳」「豊崎光一」「蓮實重彦」「渡部直己」です。

*「あわいあわい・経路・表層(2)」2009-07-04：この日の記事の後編。3本の「経路」を敷いたのに、相変わらず、「経路」に沿おうとしつつも、脱線する自らの「運転ぶり」にあきれています。最後のほうで、この日の記事が、前日の記事の「注釈」になっていることを読者に「種明かし」し、記事に書かれた言葉たちに、記事のテーマを演じさせるという、このブログのワンパターン＝「経路」について、「説明＝自己注釈」しています。自己解説をして、お恥ずかしい限りですが、言葉を言葉として読んでほしいという、言葉のフェティシズムの叫び＝祈り＝訴えでもあります。かなり本気になって書いた記事です。キーワードとキーフレーズは、「デカルト」「チョムスキー」「ヒトにみられる」「フィクションへの偏愛＝異常な愛着＝依存症」「ヒトは、つなげる仕組み＝つなげるフィクション＝つなげるダイナミズムという特性＝属性を、生後に学習する前に既に生得している」「経路」とは、方向＝進行、順序＝前後、型＝形という3要素をめぐり、規則性と不規則性のからみ合いである」です。

*「マンネリズム・マニエリスム」2009-07-05：軽い調子のエッセイとして書いた記事です。歌、小説、芝居、ダンス、スポーツなどのうち、多くのヒトに長く愛されている作品・ヒト・妙技には、「パターン・文体・文法・流儀・刻印」がある、がテーマです。ヒトのもつ特殊な才能や天才についても、考えをめぐらせています。ここでも、「生得的な「経路」という言葉＝イメージをつかっています。「経路」が「動き」となって立ち現れ、他のヒトにつたわるというメカニズムに注目しています。「マンネリズム」を意味する英語 *mannerism* に「マニエリスム」という美術および文学用語があることに触れ、両者が、「経路」の仲間であると主張しています。大和言葉形の「まがる」「くせ」という言葉に、「経路」と同種の表情・仕草・運動を見えています。キーワードとキーフレーズは、「ジョージ・スタイナー」「ボビー・フィッシャー」「音楽・数学・チェス・囲碁」「ランダムブログ」「イワシの翻訳 LOVE」「グスタフ・ルネ・ホッケ」「高山宏」「ワンパターンも、マンネリズムも、マニエリスムも、最高の褒め言葉である」です。直接書かなかったキーワードは、「実務翻訳・出版翻訳」「児島修」です。

以上です。

第2部 09.07.07~09.08.25

09.07.07 いみのいみ

◆いみのいみ

2009-07-07 09:26:39 | 言葉

意味について考えています。きっかけは、数日前に書いた記事なので、以下に引用させていただきます。

★★

まず、きのうの記事から引用させていただきます。

★

*意味が分からないのに、うたう・となえる・はなす・くちにする・ひとつたえる・かく・しるす・おぼえる

ということは、

*特殊な話ではない

のです。

*よくある話

なのです。たとえば、

*お経、保育園・幼稚園でのお歌の時間、学校の授業での音読、カラオケボックスでの覚えたての歌の練習、お習字、今流行の写経、文字を習いたてのコドモたち、言葉を習いたてのヒトたち、新聞の音読、プレゼン、役人の書いた答弁書を国会で読みあげる大臣、国会の議場での速記、裁判での答弁書の朗読、自分の書いたブログ記事を読み返し

ているこのアホ.....

今挙げた例には、明らかに意味が分からずに行っている行為=動作もあれば、意味がある程度分かっているかに思える行為=動作もありそうです。でも、個人的には、これらの行為=動作すべてが、

*意味が分かってやっているようで、そうではない

と思えてなりません。悪い意味で言っているのではありません。

*「良い悪い」といった次元の話ではない

のです。

*意味が分からないけど、やっている

むしろ、それが、

*ヒトという種（しゅ）にとっては、ふつうなのだ

と言いたいのです。このことについては、いつか、あらためて考え、書いてみたいとも思っています。

★

以上が引用ですが、「いつか、あらためて考え、書いてみたい」の「いつか」が「きょう」になりました。

★★

以上が引用なのですが、

*「★★」 B 「★★」のなかに、「★」 A 「★」

つまり

*「★★」「★」・・・「★」「★★」

というサンドイッチ型の引用になりました。Bは、「あわいあわい・経路・表層（1）」2009-07-04のなかの一節で、Aは、「まつはいつまでも、まつ」2009-07-03の一節です。

*いちばん単純な「入れ子構造」

ということになるのでしょうか。

*BのなかにAが入っている

という構造です。このブログでは、自己輸入＝自己引用をよくやっていますが、こんな場合もあるのですね。今までにも、無意識にやったことがあるのかもしれませんが、きょうは、

*えっつ!?

という感じで意識しました。で、

*このことについては、いつか、あらためて考え、書いてみたいとも思っています。

↓

*「いつか、あらためて考え、書いてみたい」の「いつか」が「きょう」になりました。

↓

*「いつか、あらためて考え、書いてみたい」の「いつか」が、再度「きょう」になりました。

というわけです。2度も引用するなんて、よほど気になる部分を引用したのだと思います。

ここで、

*「引用」

について考えてみましょう。上の例で言うと、

*AをBという形で引用したとき、BはAの「注釈」となる

と言えるような気がします。そう考えるならば、きょうは

*Aの「注釈」であるBを「注釈」するCという「注釈」をつくる

とも言えます。でも、これは言葉の遊び＝レトリック＝論理ごっこであり、

*言葉は何とでも言える

という曲者（くせもの）ですから、別の言い方もできます。たとえば、きょうは、

*Bは無視して、あらたにAを再び「引用」してCという「注釈」をつくる

と言っても、いっこうに差し支えはありません。というか、むしろ、

*ヒトを含む森羅万象は、常に変わりつつある。

という立場から、

*Aを書いた時の自分と、Bを書いた時の自分と、Cを書こうとしている今の自分は、それぞれが異なっている＝変化している＝ずれている

と言ったほうが、A、および、Bに書かれている内容＝テーマ＝意味＝「経路（＝筋道）」に沿っている、と言えそうです。ということは、

*引用とは「注釈」であると同時に「変奏」でもある

とも言えそうです。

*

実は、今書いてきたような、

*形式論理もどきの言葉の操作

が、とても苦手なのです。だから、「形式論理」ではなく、あくまでも「もどき」なのですが、イメージで言うと、「XはY、だから、Zになる」みたいな筋道の立て方が、大の苦手なのです。それよりも、

*勘＝感＝観＝疍を頼りにする

つまり、「Xでえ、Yでえ、Zなんです」みたいな、うじうじした「ま、いっか」主義＝でまかせ主義的な、話の進め方のほうがずっと楽です。みなさんは、どうですかあ？

*

先週の後半あたりから、

*意味って何だろう？

と考え続けています。こういう時には、よく似た感じ＝感字の言葉をさがして、並べてみてじっと見つめながら、「ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもない」をします。

きょうの記事のために、きのう用意した走り書きメモの一部を、以下に書き抜きます＝引用します。

*「いみ・意味・異味・忌み・忌・齋／い・意・異・衣・違・位・囲・謂・畏・唯・移・緯・依・委・為・惟・彙・齋／わけ・分け・訳・別け・分ける・別ける・分かる・判る・解る・別る・分かつ・別つ・わかち・ひきわけ／内容・コンテンツ・メッセージ・ねらい・価値・重要性・区別・筋道・道理・条理・事情・理由・子細・いきさつ／そうか・あ、そう・なるほど・アハッ・ほうー・うんうん・うむうむ・やっぱりね・はーあ・ふーん・ふーむ」

以上の言葉や文字をご覧になって、

*意味の意味

が何となくお分かりになったでしょうか？ それとも、わけ分かんなくなってきたでしょうか？ 自分の場合には、後者、つまり、

*わけわかんない状態

になってきました。ところで、わけわかるヒトなんているんでしょうか？

みなさんのなかで、国語辞典を引いていてがっかりした経験をお持ちの方は、いらっしやいませんか？

*Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、Bが書いてあって、Bを調べたら、Aが書いてあった。

という状況です。かつて、

*個性を打ち出さなければ売れない

というような辞書の販売合戦みたいなものがあった時期がありました。国語辞典であつて、次に英和辞典でもあつたような気がします。言語学の新しい波の成果が、辞書とい

う形で結実しはじめた時期だったのでないか、と今になって思ったりしてしまいます。

個人的な印象＝感想＝思い込み＝思い過ごしかもしれません。いずれにせよ、そうした時期を経て、現在市販されている辞書では、上記の、がっかりする状況はいくぶん改善されたように思います。

* 孫引き

という言葉があります。辞書の場合であれば、

* ある「権威ある＝威張った＝売れ筋の＝学会のボスが弟子や出版社の社員をこき使う形で製作された」辞書

を、他の出版社がそっくり真似たり、ちょっと変えて新発売することです。むかしの辞書は、その「孫引き」が多かったようです。

* 「コピペ」

は、今始まった話ではないということですね。

*

* 現在は、PCとネットがあるため、コピペが飛躍的にやりやすくなった

というのが、正確な言い方だと思います。で、国語辞典を引く場合には、

* Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、Bが書いてあって、Bを調べたら、Aが書いてあった。

は、「いくぶん」減ってきましたが、

* Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、Bが書いてあって、Bを調べたら、Cが書いてあり、Cを調べて見たら、Aが書いてあった。

みたいな状況が出てきたり、

* Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、ちゃんとAの「説明」が書いてある。

みたいな、わりとマシな＝良心的な＝がっかりさせない状況も経験するようになってきました。でも、主流は、やはり、

* Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、Bが書いてあって、Bを調べたら、Aが書いてあった。

のような気がします。

*

で、手持の複数の国語辞典をあらためて飛ばし読みしてみて、辞書に書いてあることは、以下の5つのパターンに分けられるのではないかと、思いました。

1) 見出しの言葉を、別のほぼ同じ長さの言葉に言い換える。=「Aは、Bなのよ。あと、Cとも言えるかも」。

2) 見出しの言葉を、それより長い言葉で言い換える=説明する。=「Aは、XがYしてZとなることなの」。

3) 見出しの言葉をつかった例文を挙げて、ほのめかそうとする。=「Aは、『PがAしたらQが起きた』みたいにつかうのだけど、分かるかしら」。

4) 見出しの言葉の、語源や成り立ちを説明する。=「Aは、もともとHがIするって意味だったの」。

5) 見出しの言葉の、語源や成り立ちを説明する。=「Aは、もともとHがIするって意味だったの。でもね、どこかのアホがAとJが似ているものだから、Kという意味にもなっちゃったのよ=「転じた」=「訛った」=「～の意か」。

そう思うと、

*辞書をつくる

のって大変ですね。でも、

*お手本がある

と、「こんなふうによければいいのか」「こんなふうによれば=ごまかせばいいのか」「こんなふうによてきとーによればいいのか」という具合に、

*真似る

ことができます。要するに、

*辞書にも、以前からあるやり方＝「経路」＝パターンがあり、それを真似る＝なぞる

ことで、何とかなる部分がほとんどを占めている気がします。ということは、

*辞書をつくるさいには、各見出しの言葉の意味を考える必要はない

とも言えそうです。

*意味は、既に決まっている

のです。あとは、

*どう料理するか＝どう差別化するか

ですが、その

*料理法＝差別化の余地は、かなり限られている

と思います。

*意味を、新しくつくるわけにはいかない

からです。早い話が、

*辞書が似たり寄ったりになるのは仕方がない。＝辞書がまちまち・多種多様であったら困る。

ということです。でも、ときどき、1冊の辞書のなかで、

*困った＝変わった語義の説明が見られる

場合があります。「困った＝変わった」というのは主観的なレベルの話です。部分的な話ですけど、

*ちょっと「困った＝変わった」みたいなニュアンスで、よく議論される国語辞典

がありますよね。あえて名指しませんが、

*○○さん

なんて、「さん」づけされている辞書です。ここにもありますが、

*「かぞえ方」

という便利なデータが載っているなので、よく利用します。個人的には、その語義が、特に「困った=変わった=個性的な」ものだという印象はあまりしません。語の説明が、分かりやすく、例文も適切でいい辞書だと思います。

*「困った=変わった」が「高じる=エスカレート=とちくるう」

と

*アンブローズ・ビアス (Ambrose Gwinnett Bierce : 1842-1914?) のものした、『悪魔の辞典』 (The Devil's Dictionary)

みたいになります。いい辞書だと思います。この辞典を手本に自分版の『悪魔の辞典』を目指している人たちがたくさんいました。現在もたくさんいるようです。へそ曲がりとしては、こういう良書が、さまざまな分野でたくさん出てくることを願っています。

*

『悪魔の辞典』とは趣が違いますが、

*フランスの作家、ギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert : 1821-1880) が『紋切型事典』 (Dictionnaire des idées reçues)

という、考えようによっては、ヒトの言語活動を根底から揺さぶるような衝撃的な事典=辞典を著しました。しかし、書かれた当時のフランスの諸風俗に通じていないと分からないところが多くて、現在の日本では受け入れられにくい「作品」です。だからこそ、

*何も考えないで=感じないで、パブロフのワンちゃん状態で行動しているヒトという種 (しゅ) に鉄槌 (てっつい) を下す

ために、誰か、

*新しい『紋切型事典』 (Dictionnaire des idées reçues)

を書いてくれないかなあ、と切に願っています。かつて、自分で書いてみようと思って

取り組みはじめたものの、力不足を感じて挫折したことを思い出しました。この辞典が、現在、つくりにくいのは、

*紋切型＝「ヒトびとの思考停止を常態化させている、ある特定の言葉やフレーズやイメージ」が移り変わる速度が速すぎる時代をむかえている

ことと

*紋切型は、グローバルなレベルよりも、圧倒的にローカルな現象として立ちあらわれる

からです。

*「ウィキペディア」のように日々の更新が可能なネット上の辞典として、多言語バージョンをリンクさせた形でヒトびとに運営させる

という手＝手法＝方法も考えられますが、掲示板みたいに混乱をきたすのがオチでしょう。

*

話が、だいぶずれてしまいました。

このところ、ずっと考えている

*意味

というのは、以上述べてきた辞書的な

*意味ではない

のです。ただし、『紋切型事典』は大いに関係ありますが、そのことについては、機会をあらためて書くつもりです。

なにしろ、ちょっと

*説明しにくい意味

なのです。さきほど書きました、辞書に書かれているパターンで言うなら、

3) 見出しの言葉をつかった例文を挙げて、ほのめかそうとする。= 「Aは、『PがAしたらQが起きた』みたいにつかうのだけど、分かるかしら」。

で説明してみます。冒頭で引用した、

*意味が分からないけど、やっている。

とか

*人生 or 世界 or 宇宙 or 森羅万象に意味なんてあるの？

とか

*この消しゴムの意味

とか

*そんなの無意味だよ。

とか

*意味って何？

とか

*意味の意味

と言う時の「意味」なのです。で、その

*意味が分からないけど、やっている。

という文=センテンス=フレーズにある

*「やっている」

が、何をやっているのかと申しますと、冒頭で引用した、

*お経、保育園・幼稚園でのお歌の時間、学校の授業での音読、カラオケボックスでの覚えたての歌の練習、お習字、今流行の写経、文字を習いたてのコドモたち、言葉を習いたてのヒトたち、新聞の音読、プレゼン、役人の書いた答弁書を国会で読みあげる大

臣、国会の議場での速記、裁判での答弁書の朗読、自分の書いたブログ記事を読み返しているこのアホ.....

といったことに加えて、

*道を歩いている、おしっこをしている、PCのキーボードで文字を書いている、テレビを見ている、庭の草木に水をやっている、ご飯を食べている、お風呂に入っている、財布を覗いて小銭をかぞえている.....

といったことも含む、ごくふつうの動作をするさいに、それを

*意味が分からないけど、やっている。

と言う時の

*「意味」

なのです。

*意味が分からないけど、やっている。=何となく、やっている。

と、単純に=形式的に考えた場合、

*意味とは、分からないものである

と言えるような気がするのです。言い換えると、

*分かるものは、意味ではない。

となります。

*分かったとたんに、意味でなくなる

ものとも言えそうです。

*「それって、「無意味」ってことじゃないの？」

と問われれば、

*「そう、みたいです」

と答えると思います。

* 「そうです」とは、答えない

と思いますけど。どうしてかと申しますと、

* 「無意味」には、意味がある

ために、躊躇（ちゅうちょ）してしまうのです。というのも、広辞苑にも、新明解国語辞典（あっ、言っちゃった！）にも、

* 「無意味」が見出しになっていて、その語義＝意味が書いてある

のです。

* 「無意味」には「意味」がある

のです。

で、その語義＝意味を読んでもみると、このところずっと考えている

* 意味とは意味が違う

という気がします。たとえば、さっき例に挙げた、

* 道を歩いている or おしっこをしている意味

と言った場合には、その「意味」は

* 理由・事情・わけ

という意味にもとれますよね。そういう意味ではありません。

* 意義・価値・重要性

とも違います。いちばん近いのは、

* 「経路」

だと思います。この「経路」という言葉は、先週あたりから、さかんにこのブログでつかうようになったのですが、

*一定した意味がない

のです。でも、すごく気に入っています。

*けいろ・経路・径路・毛色

と、分光=書き分けることができます。最後の毛色なんて、前の2つの書き方とは関係がないはずなのに、つながって=つなげてしまうのが、

*このブログの「経路」

なのです。

*

*「経路」のコア・イメージ(=中心的なイメージ)は、「すじ」=「方向」=「進行」

です。

*「スタイル・くせ・流儀・方法・パターン・旋律・ルール・型・順序・いきさつ・経緯・規則性・必然性の影・持続性」

という意味にもなり得ます。で、

*「道を歩いている or おしっこをしている意味」というフレーズでの、「意味」は「いきさつ」に近い

と思います。その場合の「いきさつ」は「事情」や「わけ」とも言い換えることができそうです。

*どういう、「いきさつ=事情=わけ」で、道を歩いている or おしっこをしているのか？

という文=センテンスがつかれますが、「経路」を尋ねている場合には、歩く場合には、「どこへ行くのか？」=「行き先」、「何のために行くのか？」=「目的・理由」を質問しているわけではありません。

これは、「歩く」という行為に「方向」が伴うために、そういう質問になり得るとい

だけのことです。もっと漠然とした質問なのです。漠然というのは、トリトメがないということです。

*「歩いている」という動作をしている「意味=いきさつ=事情=わけ」を尋ねているのです。答えようがなくなりますね。それなんです。

*歩いている行為に、「意味=いきさつ=事情=わけ」なんてないのです。

*「歩く」という「経路」=「線路」が敷かれている=引かれているから、歩いているだけ

なのです。「おしっこをする」の場合のほうが、「歩く」のように「方向」なんていう要素がないため、分かりやすいと思います。

*出そうだから、出している=出ているだけです。

*「生理的=医学的」な「理由=事情」があるからだとも言えます。その意味では、

*「生理的=医学的」な「理由=事情」は「経路」=「線路」である

と言っていると思います。でも、それが、おしっこをするヒトに、あくまでも、

*意識されない限りにおいて
です。

*「経路」=「線路」は、敷かれている=引かれているが、意識されない。

という点が、きわめて重要です。

*「経路」=「線路」は意識されないから、「無意味」とは異なる

のです。さきほど、

*意味とは、分からないものである

*分かるものは、意味ではない。

*分かったとたんに、意味でなくなる

と書いたのは、そういう意味です。

*

そろそろ、家事をする時間が近づいてきました。

ここまでお読みいただいた方に、お礼申し上げます。どうも、ありがとうございました。では、また。

なぞるとき 立ちあらわれる 意味の影

09.07.08 何となく

◆何となく

2009-07-08 10:04:42 | 言葉

何となく生きている。

みなさんのなかで、そんな感覚をおもちになっている方も、たぶんいらっしゃるかと思います。自分の場合、そんな心もちでいることが、よくあります。さもないと、抑うつが悪化するという事情もあります。とにかく、そうしていると楽なことは確かです。

*「自分が」生きている意味＝「自分の」人生の意味については、あまり深く考えないほうが、生きやすい

と言えそうです。でも、

* 「一般論として」 生きている意味 = 「一般論として」 人生の意味について考える

というズルをすると、話はがらりと変わります。個人的には、これが、

* いい気分転換 = 気晴らしになる

のです。自分が注射 or 手術されるのを考えるのは嫌だけど、世間一般のレベルで「注射 or 手術される」ことを考えると、恐怖心が薄れる、というのに少し似ています。でも、自分が注射をされたり、手術を受けるのが大好きだという人も、世間にはいます。実際、そういう人から話を聞いたことがあります。その人の場合は、歯科医院で抜歯することなのですけど。それは、さておき、

* 「個人の問題」を「一般論」に置き換える

のって、やっぱり、「ずるい」と思います。「ずるい」⇒「ずる賢い」⇒「賢い」とみなすという「ずるい」考え方 = 操作もあります。いずれにせよ、「ずるい」ことには変わりはありません。で、厚顔に = いけしゃあしゃあと、そのズルをしますと、

* ヒトという種（しゅ）は、何となく生きていることができない生き物である。

また

* ヒトという種は、生きていることに意味を見いだそうとする生き物である。

とか言えそうです。これには、

* ヒトは「何となく」なんていって、すっとぼけながら、実は「何となく」なんて生きていない

という前提があります。ヒトという種は何となく生きていない、と言っているわけですから、

* たぶんに、他の生物を見下した言い方だ

とも言えます。でも、見下すつもりなどぜんぜんありません。なぜなら、「何となく生きていることができない」も、「生きていることに意味を見いだそうとする」も、自分にとっては別に優れた資質 = 特性 = 習性だとは思えないからです。むしろ、

*ヒトという種は、惰性で=何となく、「何となく生きていることができない」=「生きていることに意味を見いだそうとする」という行為を、日々実行=実演している。

からです。「惰性」というと、ネガティブな響きがありますね。でも、「何となく」というと、ネガティブな響きは薄れる=「許せる」ような気がしませんか。さらに、次のようにも言えます。

*ヒトという種は、惰性で=何となく=「経路」に沿って、「何となく生きていることができない」=「生きていることに意味を見いだそうとする」という行為を、日々実行=実演している。

*

実は、たった今書いたフレーズが、きょうのテーマ=いちばん言いたいことなのです。ここで、ちょっと脱線させてください。このブログの文章では、やたら、

*「=」

をつかいます。これは、もちろん、わざとやっているのです。なぜ、わざわざそんなことをしているのかと申しますと、わざ=方法=戦略としてやっているのです。言い換えると、

*意味=進行方向を固定させたくない

つまり、文=フレーズ=センテンスを、

*停滞させたい=つまづかせたい=踏みはずしたい=吃音させたい（※「吃音」はあくまでも比喩です。不快な気持ちになられた方に、お詫び申し上げます。ごめんなさい。）

または、

*すっきりさせたくない

からなのです。

*「これしかない」や「簡潔に」や「単純明快に」や「流れるように」の逆

です。すっきりした文章も大好きですけど、

*「すっきり」は、何かをそぎ落とした=何かを排除（=選別）した結果である

および、

* 「すっきり」は、面倒なことを放り出す＝放棄するという横着＝怠惰の産物である

ことを思い出しましょう。彫琢や推敲の結果なんかじゃありません。「ま、いっか」＝妥協＝「テキトーにみつくろう」の結果です。それどころか、ある意味では、

* 「すっきり」は、「ズル・ずるい」と「消す＝殺める」を行った、大雑把で血生臭い結果

とも言えるのです。

* Simple is beautiful.

とは、言葉や文章に関する限り、誠意に欠けた美辞麗句でしかありません。

以上が、冗漫＝冗長＝散漫＝わかりにくい＝ごちゃごちゃした文章を書いているアホの、言い訳＝弁解＝戦略の説明＝「堪忍してちょ」＝脱線です。とはいえ、この脱線は、きょうの本筋と大いに関係があるのです。

*

で、さきほどの「惰性で＝何となく＝「経路」に沿って」に、話をもどしますが、

* 「「経路」に沿って」

と言うと、何だかわけが分からなくなると思います。「経路」というのは、このブログで、最近、このアホが馬鹿みたいによくつかっている、

* きわめて「個人語」的色彩の濃い言葉＝自分で勝手につかっている言葉＝自己満足の言葉＝自分受けする言葉＝他人には通じそうもない言葉

です。

ですので、この言葉がこのブログでどのようなつかい方をされているのかを、ご存じない方、および、きのうの記事を読んだけれど、「経路」なんてどうでもいいとお思いになっている方のために、きのうの記事から、必要な部分だけを少し改変＝変奏＝変装＝編曲して、引用させていただきます。

- * 「経路」には一定した意味はない。
- * 「経路」 = 「線路」は意識されない。
- * 「経路」 = 「線路」は、敷かれている = 引かれているが、意識されない。
- * 「経路」の中心的なイメージは、「すじ = 方向 = 進行」である。
- * 「経路」 = 「意味」とは、分からないものである。
- * 分かるものは、「経路」 = 「意味」ではない。
- * 分かったとたんに、「経路」 = 「意味」ではなくなる。

以上のフレーズ = 言葉を並べたところで、さっきのフレーズ = 言葉を、以下にコピペしますので、申し訳ありませんが、もう一度読んでください。

* ヒトという種は、惰性で = 何となく = 「経路」に沿って、「何となく生きていることができない」 = 「生きていることに意味を見いだそうとする」という行為を、日々実行 = 実演している。

ということなのです。少しは、分かりやすくなりましたか？ 駄目？ じゃあ、駄目押しに、ものすごく、簡単に = すっきりさせてみます。

* 何となく「何となくでない」をしている。

です。矛盾に思えますか？ 論理的ではないとお思いになりますか？ 「矛盾している」とか、「論理的ではない」とお感じになれば、こちらの

* イメージが通じた

と言えそうです。通じたのが、「イメージ」であることに注目してください。「意味」「考えていること」「メッセージ」ではなく、

* あくまでも「イメージ」

です。

* イメージとは、とても、テキトー = 気まぐれ = 大雑把 = でまかせ的 = 頼りにならない = 不安定なものである、と想定している

と考えてください。ですから、

* 「矛盾している」あるいは「論理的ではない」と感じて、いっこうに差支えがない

のです。イメージのテキトーさについては、「あらわれる・あらわす (8)」2009-06-01 で、かなり詳細に論じましたので、ご興味のある方は、ご一読願います。どれくらいテキトーかを知っていただくために、その記事からちょっとだけコピペしてみます。

* imagine のアナグラムは enigma (英語で、謎、謎の人) + i (虚数単位)。image のアナグラムは、magie (仏語で、魔法、魔術)。「マジ」で、あやしい。imago ⇒ amigo (西語で、男性の友人) とはいえ、気を許してはならぬ。

以上のフレーズが、引用ですけど、英語の image の動詞形である imagine が曲者として、

* 言霊の幸ふ国 (=ことだまのさきはうくに) (※意味は広辞苑でお調べください) の言葉で、「分光する=分ける」と、imagine のアナグラムは「imigane =意味がねえ=意味がない=「意味がね、イマイチなのよ、の『意味がね』、あるいは、「iminage =意味なげ=「意味なげに思ゆ or 覚ゆ、の『意味なげ』」とも読める

というテキトーぶりなのです。えっつ? 「テキトーなのは、imagine ではなくて、おまえだろう」ですか? そう言われると、返す言葉がありません。その通りでございます。

*

で、要するに、

* イメージを扱おうとするならば、矛盾、論理、筋道、真偽といった「凡庸な」フィクション=物語の出る幕ではなく、むしろ、去年ノーベル物理学を受賞した3人の日本出身の学者たちによる、受賞の対象となった研究論文に見られる「摩訶不思議な」=「非凡な」=「荒唐無稽ともいえる」フィクション=物語に出てくるたぐいの言葉たちの表情=仕草=動きこそが、主役を演じる。

のです。ですから、

* 「矛盾している」あるいは「論理的ではない」とは、褒め言葉である

と言えないこともありません。

*現代物理学では、イメージが重視されているらしい

と妄想しております。しかも、

*そのイメージは、たぶんに「矛盾している」あるいは「論理的ではない」の乱舞＝不条理演劇＝「伝染るんです or ぼのぼの」＝「わけわかんない」＝「禅問答」（※「禅問答」という言葉はあまり好きではないのですが、理由は禅僧が位が高いほど偉そうにしているからという単純な理由だけなのなのですが、人によっては、この言葉でイメージが分かっていたら気ので挙げておきます）を演じている

みたいなのです。

*現代物理学は、「 $1 + 1 = 2$ 」や「犬が西を向けば、尻尾は東を向く」の世界ではない。

みたいなのです。

と、妄想して＝決めつけて＝思い込んでおります。

くどいですが、もう一度、書きます＝コピペします。

★

*ヒトという種は、惰性で＝何となく＝「経路」に沿って、「何となく生きていることができない」＝「生きていることに意味を見いだそうとする」という行為を、日々実行＝実演している。

ということなのです。ものすごく、簡単に＝すっきりさせてみます。

*何となく「何となくでない」をしている。

です。

★

以上の説得＝説明の方法は、イメージを伝えるために、どちらかというと理屈＝論理に訴えています。倒錯したやり方です。次に、変奏＝変装＝言葉の置換えという方法で、みなさんへの説得＝説明を試してみます。

*「我思う、ゆえに我あり＝Je pense, donc je suis.」by デカルト

↓
「ぼーっとする、ゆえに我あり」 by アホ in 「ぼーっとする、ゆえに我あり」 2009-06-24 &
「不自由さ (2)」 2009-06-30
↓
「何となく、ゆえに何となくにあらず」
↓
「「経路＝線路」に沿って、「経路＝線路」を外れる」
↓
「「線路」に沿いつつ、同時に脱線する」
↓
「「A」でありながら、同時に「Aではない」である」
↓
「「何か」でありながら、その「何か」ではない」

いざ試してみると、依然として、どちらかというと理屈＝論理に訴えています。やっぱり、これしか道＝手はないのでしょうか。それとも、

*人工言語という、フィクション＝いかさまの体系＝「圧倒的な偶然性に支配されている宇宙のなかで、細々と人為的な必然性をつくりあげ、それを信奉しながら、ある程度の有効性に賭けたツール」に頼る

べきなのでしょう。

別の説得＝説明の方法として、今度は、きのうの記事に書いた、辞書での言葉の料理法＝説明の仕方 1)～5) までのうち、

3) 見出しの言葉をつかった例文を挙げて、ほのめかそうとする。＝「Aは、『PがAしたらQが起きた』みたいにつかうのだけど、分かるかしら」。

を試してみましよう。あれっつ！ きのうの記事からコピペをしようとしたら、その記事のなかで

*「意味」＝「経路」

を説明しようとした結果、出てきたのが、上にコピペした、いくつかのフレーズだったことに気づきました。こういうのを

*堂々巡り＝「あら、また、あんたじゃないの」

というのですね。「だめだ、こりゃ」的状況ですね。でも、めげずにやってみます。別の

フレーズで試せば、何とかなるのではないかと、「何となく」思います。では、いきます。

*

*意味は分からないけど、何となく、お経を読んでいる。

*意味は分からないけど、何となく、その歌をうたっている。

*意味は分からないけど、何となく、お風呂に入っている。

*意味は分からないけど、何となく、ご飯を食べた。

*意味は分からないけど、何となく、選挙で〇〇党の(E)Eに投票した。

*意味は分からないけど、何となく、戦争で人を殺めた。

*意味は分からないけど、何となく、この△年間自動車を運転してきた。

*意味は分からないけど、何となく、レジ袋使用をやめてブランド製のエコバッグをつかっていて、たくさんあるダサイもらいもののエコバッグは押し入れに突っ込んだままだ。

*意味は分からないけど、何となく、地球温暖化を助長してきたらしい。

*意味は分からないけど、何となく、大不況になっちゃったみたい。

*意味は分からないけど、何となく、神様を信じていることになっている。

*意味は分からないけど、何となく、この惑星がやばい方向にむかっている気がする。

*意味は分からないけど、何となく、すごく悪い=罪深いことをしている気がする。

もう、これくらいで、よろしいですよ。

*何となく「何となくでない」をしている。

の意味が、体感できてきたのではないのでしょうか。

次に、ヒトにとって、わりと苦手な時間的経過の処理に挑戦しましょう。いえ、難し

いことではありません。ここでは、ただフレーズの最後=文末をちょっといじるだけです。

*何となく「とんでもないこと」をしている。

*何となく「とんでもないこと」をした。

*何となく「とんでもないこと」をしてきた。

*何となく「とんでもないこと」をしつつある。

*何となく「とんでもないこと」をするだろう。

*何となく「とんでもないこと」をし続けてきた。

*何となく「とんでもないこと」をし続ける。

*何となく「とんでもないこと」をし続けるだろう。

こう並べてみると、空間的な広がりだけでなく、時間的な広がりも体感できて、

*「何となく」は「とんでもない」ではないだろうか？

と「何となく」思えてきませんか？ きょう、みなさんに、このアホがどうしても、訴えたいことは、それなんです。

この記事の冒頭で、いきなり、

*「何となく」は「とんでもない」のだ。

なんて申しあげても、

*「はあ？」で、片付けられてしまった

にちがいはありません。それが、とうぜんだと思います。自分でも、いきなり、そう言われたら、

*「はあ？」

ですもの。今なら、

* 「何となく」は「とんでもない」のだ。

と書いても、それほど抵抗感＝「わけわかんない」はないのではないのでしょうか。

* 知らず知らずのうちに、大変なこと＝罪なことをしている

とか

* 無意識のうちに、多大な影響＝危害＝被害を及ぼしている

とか

というふうに読みかえていただいても、大差ありません。

*

ここでまた話は、ずれますが、

* 「何となく」の正反対

であるはずの

* 間違っことは何もしていないのに＝然るべきことをちゃんとしているのに＝言われた通りにしているのに、やることなすことがうまくいかない

という状況がテーマになっている小説を思い出しました。きのうの記事でも出てきた、

* ギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert : 1821-1880) 作の『ブヴァールとペキュシェ』(Bouvard et Pécuchet)

です。個人的には、この作品は小説ではなく、

* 宗教色のない、むしろ、自然科学的な意味での、一種の「預言書」

だと思っているのですが。テーマが大きすぎて、ここでは扱えませんので、万が一ご興味のある方は、実物をお読み願います。あえて、言えば、

* ヒトは、何となくうまくやっているつもりで、何となく途方もなくズレたことをやっ

ている

みたいな「お馬鹿な」＝「真面目な」話を書いてあります。

*

で、

*「何となく」は「とんでもない」のだ。

に話をもどします。大切な点は、

*「何となく」が、きょうの日替わり定食のメニュー的「経路」の意味

なのです。ごちゃごちゃぐだぐだ書いていますから、もう、お忘れになったと存じますが、さきほど、

*「経路」には一定した意味はない。

と書きましたように、「経路」は、その日によって意味が変わることがあるのです。ですから、「きょうの日替わり定食のメニュー的」という修飾語をつけました。たとえば、これから先の記事で「経路」の意味が変わっている可能性は高いと言えます。

ちなみに、きのうの記事では、

*「経路」は「意味」という「意味」だ。

みたいなことを書いていました。きょうは、

*「経路」とは、「何となく」であり「とんでもない」だ。

です。見通しとしては、今後、

*「経路」は「刻印」である。

みたいな話になる感じがします。

*刻印＝DNA＝運命＝宿命＝「どうにもとまらない」＝「因果」＝「業（ごう）」＝GO＝さだめ＝「リセット不可能性」＝「駄目」……

という連鎖があたまたま浮かびます。あくまでも、見通しですので、変更もあり得ますけど.....。なお、こうした一連の言葉たちが、出てくる心境については、「カジノ人間主義」2009-01-30 という、個人的に非常に愛着のある記事と呼応しているのです、ご一読いただければ幸いです。その記事では、「経路」が

* 「出来レース」

という言葉で登場しています。

*

ところで、最近、

* 自然言語と人工言語

について、すごく気になって仕方ありません。めちゃくちゃ苦手な人工言語をちょっと「お勉強」してみたくなりました。で、しばらく、その「お勉強」に専念し、このブログはお休みさせていただきます。

こんにやく、いや、絹ごし豆腐ほどの柔（やわ）な根性しかないアホのすることですので、すぐに挫折するのは目に見えていますが、いちおう、やってみます。

*

ごちゃごちゃぐだぐだした文章を、我慢して、ここまで読んでくださった、心優しいあなたに、感謝いたします。どうもありがとうございました。では、また、再開＝再会
のときまで。

何となく それでは済まぬ 出来レース

09.07.14 記述＝奇術＝既述

◆記述＝奇術＝既述

2009-07-14 14:29:52 | 言葉

*記述

という言葉が気になったので、

*広義の人工言語

について、この数日間、

*「お勉強」

をしていました。

何をしていたのかと申しますと、物理学、化学、生物学、数学、論理学、遺伝子工学、プログラム言語、機械語に関する本を図書館で借りてきて、拾い読みをしていました。

*拾い読み

は正しくない言い方かもしれませんが、実際にしていたのは、

*本の表紙を見て、本を開き目次を見て、ぱらぱらめくってみて、しんどそうだなあと
思い、本を閉じる。

次に

*本のなかに書いてあることを、でまかせで想像し、走り書きメモをつくる。

という作業です。1人分の図書カードで10冊借りることができるので、親のカードもつかって、計20冊の本を借りてきて、そんなことをしていました。

コドモの頃は、本をろくに読みもせず読書感想文を書いていました。学年あるいはクラス単位で、どこかへ見学に行ったらレポートを書いて発表する場合にも、

*見たり聞いたことではなく、想像＝空想＝妄想したことを書く

という作業をしていました。そもそも、見学先で、説明を聞いたり、見ろと言われたものを見ていないのです。みんなから離れてどこかに隠れていて＝さぼっていて、見学が終わるのを待っていたり、みんなと一緒にいても、自分の興味のあるものしか見ていない、という有り様でした。だから、先生が期待しているものは書けません。

でも、書かなければなりません。だから、でまかせに書きました。

*いわばウソを書く

わけですから、先生から注意されたり、書き直しを指示されたり、最低の評価をもらってました。でも、

*自分が悪いことをしている

という意識はありませんでした。

*間違ったことをしている

とも思っていないませんでした。

*人の話＝説明を聞くのが苦手だった

のです。

*よくウソをつくコドモだった

が、正確な言い方かもしれません（※言うまでもなく、現在は、「よくウソをつくデタラメオヤジだ」です）。今、思い返すと、授業中も注意が散漫でした。どうやら、コドモの頃から持続力と集中力に欠けているようです。そういえば、持久力も欠けていました。長距離走では、いつも「どべ」＝最下位でした。

*

でも、中学、高校へと進むにつれ、

*教師が指示したことをし、教師が期待する内容の解答やレポートを書く

ようになりました。ものすごく苦しく、しんどかったです。

で、大学に入って、ようやく再度好きなことができるようになりました。在籍した文学部文学科では、

*かなり厳密な方法と、かなりテキトーな方法

の両方が、実践されていました。厳密な方法とは、

- 1) 日頃から文献を正確に読み、読んだものは記録としてデータを残しておく
- 2) 研究発表の際には、1)で参照した文献について、データに基づき、注を付け出典を明記する
- 3) 自分の研究領域の参考文献のデータ (= bibliography) を作成しておく

作業です。でも、これらは、卒論を書く時だけにやったくらいです。ふだんは、

* 想像=妄想=捏造=ウソ=でまかせ=でたらめのやり放題

でした。外国文学科の授業では、訳読が中心となります。学生は、テキストの

* 逐語訳や、原文から逸脱しない解釈

を求められます。学部生だと、高度なことはやりませんから、テキストに何とかやり過ぎしていました。自分の場合、基本はでまかせでしたが、大学の教師も概してテキトーな人が多いですから、授業中に、こちらが相当でたらめな解釈や意見を口にしても、

* 「なるほど」とか、「はい」とか、「ほう」とか、

型どおりの曖昧な反応をするだけでした。

* 「本当に、そう書かれていますか?」とか、「根拠は?」とか、「なぜ、そう言えるの?」とか、「もっと詳しく説明してください」とか、「それはあなたの意見ですか、それとも、何かに書かれていた見解ですか?」

なんて、言う人は少数でした。もちろん、明らかな誤訳は訂正されましたけど。

で、卒業後1年間ぶらぶらしたのちに、大学院に3カ月間だけ、在籍していました。今思うと、すごく興味津々で高度な内容の授業を受けていたのですが、たった3カ月でやめたのですから、でまかせの発表をする機会もありませんでした。

*

とにかく、

* 読む

ということに関しては、他人がかかわった場合には、昔からそんな調子なのです。自分が好きで読んでいる本だと、さらに読み方が杜撰（ずさん）＝大雑把になります。

*正確に＝きちんと＝厳密に読むより、想像＝空想＝妄想するほうが、ずっとおもしろい＝気持ちがいい＝楽だ

からです。早い話が、根が無精で横着なんです。このブログの記事を何回かお読みになった方は、今、きっと大きく頷かれているでしょう。

常々、

*自分のあたま＝脳は、池か沼だ

と思っています。

*池 or 沼の周りに茂っている草木の葉っぱや茎や根が、風に飛ばされたり、あるいは、朽ちて、水に流されて運ばれてくる。それが水面に浮かび、やがて底へと沈んでいく。水面にあるものには手を出さない。沈殿し、「腐敗しかけた＝池 or 沼の生態系の一部になりかけた」ものを、使用し＝引用し、想像＝でまかせ＝妄想しながら、ブリコラージュ＝組み合わせ＝作文する。

という感じです。

さらに言えば、

*オリジナリティはなし、というか、そんなものはウソ。作者もない、というか、そんなものは言葉の綾、つまり、ウソ。組み立てた＝つづったヒト（つまり、このアホ）ならいるみたい。でも、そのヒト（＝アホ）の固有名詞なんてどうでもいい。人格や見解や視点や思想などは、幻想。つまり、ない。言葉を使用して、ある作業が行われ、作業の結果である言葉だけが残る。

というのが、自分にとって、

*書く

という作業の意味です。この意味においては、それ以上でも、それ以下でもありません。

*

話は変わりますが、

* 翻訳

という作業でお金をいただいていたことがありますが、これは、苦しいです。上のブリコラージュ=作文のようにはまいりません。自分なりに、努力して、原文に忠実に沿って訳したつもりなのですが、

* 意識

なら、まだしも、いわゆる

* 超訳

とか、

* ○○節（※○○には自分の名字が入ります）

だと言われてしまうのです。こうなると、商品価値はゼロになります。そういう自分の癖は、よく分かっているつもりなので、かなり神経を使いました。具体的に言うと、いったん

* 超訳した原稿を、直訳調に書き換える

という二重作業をしていました。お仕事ですから、致し方ありません。いつか、

* 翻訳

という作業について、書いてみたいと思っています。

*

で、話をもどします。

図書館から借りてきた 20 冊の本を、ぱらぱらめくり、

* あたまのなかに残っている断片的な言葉

を頼りに、メモをつくっていました。このブログでは、自己輸血=自己引用をさかんに

していますが、自分の書いた、あるいは、自分で書き写したもの以外の文章やフレーズを、

*書き写す

という作業は好きではありません。上述の池 or 沼の比喻でいうと、「水面にあるものには手を出さない。沈殿して、「腐敗しかけた＝池の生態系の一部になりかけた」ものをつかって」書きたいという気持ちが強いのです。この思いは、走り書きメモをつくる時も同じです。

*あたまのなかにないもの＝思い出せないもの＝自分のなかで「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」になっていないものは、織りたくない＝紡ぎたくない＝つづりたくない＝書きたくない

のです。繰り返しになりますが、

*オリジナリティや作者といった抽象的なこと＝ウソ＝神話＝与太話

とは、関係ありません。むしろ、

*自分にとって、言葉とは、今、ここに書かれてある具体的な「文字＝活字」であり、今、ここで想起される具体的な「音声」としての言葉であると同時に、おそらく死ぬ間際までついてくる、今あたまのなかに具体的にありと感じられる「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」である。

と言ったほうがいいのかと思います。言い換えると、

*たとえ、書かれた具体的な「文字＝活字」、および、想起される具体的な「音声」としての言葉であったとしても、自分のなかで「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」として存在していないものは、自分には関係がないものだ。

という意味です。伝わりにくい比喻ですよ。別の比喻をつかうと、こうなります。

*自分が空（そら）で言えない＝暗唱していない科白（せりふ）は、人生という舞台上で吐けない。

という感じでしょうか。お芝居に出た経験はないので、でまかせで言いますが、

*科白というのは、あたまのなかに書かれた文字を読むのではなく、自然に＝何となく＝まるで必然のように＝その場面を待っていたように、出てくる

のではないのでしょうか。

*「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」というのは、それに似ている

のではないかと、想像して=思い込んでいます。

で、

*書く

という作業は、その「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」から、掬い取るようにして、

*単語と語句をつなぎ、変奏=変装=変相=編曲してセンテンスにする

行為です。さきほどの、池 or 沼の比喩を再度つかうなら、

*「自分のあたま（=脳）という池 or 沼の底に沈殿している澱（おり）」=「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」をかき混ぜて、箒（ざる）か篩（ふるい）で漉（こ）し、目に残った滓（かす）を指先でいじりながら、織物（おりもの）=文章を、塗りたくる=つづる

というイメージです。

*書く

行為=作業に関しては、その他のいろいろな比喩を用いて何とでも言えそうです。何しろ、もとが「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」なんですから、当然でしょう。

*

で、話をもどしますが、ブログの記事用に走り書きメモをつくる際にも、今、書いているこの記事を作文するのと、基本的に同じことをしています。その結果、

*「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」が「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」のまま、記事になっているではないか。

と言われれば、返す言葉はありません。せいぜい、「ごもっともです」と言えるくらいでしょうか。

で、20冊の本を読んでいて、いや、「見ていた」ので、この数日間に、

*でまかせ走り書きメモ

が、たくさん溜まりました。ということは、自分なりに、「お勉強」をしたわけです。誰に頼まれたわけでもないのに、本を「見て」、メモをつくっていただけですが、さすが疲れました。

*自分の気になる＝興味ある本

しか借りてこなかったのが、嫌な作業をしていたわけではありません。それなりに、興味深かった＝おもしろかった＝刺激になったことは確かです。さもなきゃ、やりません。何しろ、このアホは、半端じゃなく根性がないのです。

で、今、思ったのですが、自分がこの記事で何度か書いてきた

*「お勉強」

と括弧でくくっている言葉の中身は、

*他人が書いた本の文章を「見て」、それをまとめる

という作業です。その中でいちばん大切な箇所は、

*「他人が」

です。自分の思いでは、

*自と他というのは、連続している

のですが、

*他には、自の思いに賛成してくれない＝自の思いどおりにならない、という特性が備わっている

のです。それは、おそらく当たり前のことなのでしょう。でも、ブログで自己輸血＝自己引用ばかりしている、自家中毒症の（※比喻ですが、不快な気持ちになられた関係者の方に、お詫び申し上げます。ごめんなさい。）＝引きこもりの状況にあるアホにとっては、

*「自の思いに賛成してくれない＝自の思いどおりにならない」他者の言葉に触れる

ことが、貴重＝希少な体験なのです。

とはいえ、「お勉強」と称して、やっていた作業とは、

*「見ただけ」で、読んでいないに等しい本について、でまかせでメモを書く

だけです。これは、

*他に触れたようで、実は自を地でいっているだけだ

と言えそうです。しょせん、

*ヒトは、他者とは出会えない

なんて一般論でズルをするのではなく、ここは潔く＝厳密に

*アホは、他者とは出会えない

と言うべきでしょう。やっぱり、

*アホは、アホ

ですね。ちょっと、おまけに付け足して、

*アホの極致＝きわみ

って、ところですか。

*

で、

*自分がやっぱりアホだという再認識

以外に、もう1つ収穫がありました。いろんな本を「見て」みて、

*ヒトの世界には、たくさんの記述の仕方がある

らしい、ということが、

* 「何となく」分かった

感じがするのです。そういえば、もう1つ、おもしろい=くだらない収穫、いや、発見がありました。

* 「記述」は、「奇術」であり「既述」である。

ということです。これを知って内心ほっとしました。以前から、そうじゃないかなあ、と薄々思っただけ=想像して=妄想していたことだったからです。順を追って説明しますと、まず、

* 「奇術」であるとは、手品とほぼ同義であり、種（たね）=仕掛け=からくり=ズルがある。

ということです。また、

* 「既述」であるとは、文字通り、既に述べられていた=もう言葉で語られていた=とっくに言われていた or 書かれていた=「ひょっとしたら、そうじゃないかなあって思っていた通り」=「やっぱり」という状況をさす。

という意味です。これまで何度か、このブログで書いてきたことであり、いろんな人が、これとそっくりなことを書いたり言ったりするのを見聞きした覚えがあります。つまり、当たり前=常識=「common sense」=共通認識=共同幻想というやつです。

言うまでもなく、たった今述べたこと=記述したことも、まさに「既述」であり、

* すごく当たり前のことを確認しただけ

という理屈になってしまいます。くどいようですが、あえてまとめますと、

1) 「記述=奇術=既述」自体が、言葉であり、「記述=奇術=既述」という行為には、言葉を用いる（※要するに、「記述」は「記述」である）。

2) 「記述」で使用される言葉は、表象=「何かの代わりに「その何か以外のもの」を用いる」=フィクション=物語=ウソ=種がバレバレの手品である（※要するに、「記述」は「奇術」である）。

3) 「記述」で使用される言葉は、ヒトが考えそうな、ほぼすべてのことを「経路」=「出来レース」として、既に語ってしまっている（要するに、「記述」は「既述」である）。

んです。だから、

*「記述」は、「奇術」であり「既述」である。

わけですが、これ以上、当たり前のことではないほど当たり前で、がっかりしてしまいました。以前から思っていたことが確認できたという安堵感が、一転して、「ガチョーン」＝「夢もチポーもないよ」＝「そりゃないぜ、セニョール」（※古いギャグばかりでごめんなさい）になってしまいました。正直申しまして、

*もっと違った世界＝未知の世界＝「何だろう、これは？」＝絶句＝「……………」＝「!？」＝「魔法との出会い」を期待していた。

だけに、

*へこみました、

さすがに。

でも、

*既知に未知を期待していた、機知のかけらもない○チ○イ

である自分が甘かったのですから、自業自得＝致し方ありません。文字にしろ、数字にしろ、記号にしろ、数字や記号の組み合わせである数式にしろ、化学式にしろ、コンピューター言語にしろ、そして、遺伝子の情報を記述するために用いられている「言語」にしろ、

*人工言語は、あくまでも or しよせん「言語」である。

そして、

*言語は、生得的に敷かれた「経路」＝生得的に備わった既知である。

そして

*人工言語と自然言語の分類も、でたらめ＝恣意的＝人工的＝人為的である

ことを忘れていたのですから、やっぱり、

*アホの極致=きわみ

です。これじゃ救いがありません。救いがないと、抑うつが悪化します。

*

で、自分はアホを自任し自称しているのですから、アホの極致=きわみは、

*「アホ道」を究めている

とも言えるわけで、

*自分への褒め言葉だ

と勝手に理解して、ただ今、抑うつ悪化に必死で対処しているところなのです。

きのうの午前、親の介護をいつも手伝ってくれている人に、親のことを頼んで、リュックサックを背負い、バスに乗って、図書館に本を返しに行ってきました。20冊は重いです。もう、とうぶん図書館へは行きたくありません。

*「記述」は、「奇術」であり「既述」である

ことを発見=再発見し、

*人工言語があくまでも、「言語」である

ことを思い出した。それだけのために、先週ときのうの2日、それぞれ往復分のバス代という痛い出費をしてしまいました。

親の年金で暮らしていますから、毎月使える金額が決まっています。臨時に出た分は、何かを削って補わなければなりません。いちばん簡単に削れるのは、食費です。自分の食べるおかずの分だけ、減らせばいいのです。

きのうの正午過ぎ、帰ってきて玄関に入ると、廊下の端っこだ、ちょうどネコがご飯をもらっているところでした。とても、おいしそうでした。こっちは、もちろん、本を借りに行った日と同様に、昼食は抜きです。

ネコがご飯を食べているのを眺めながら、以前に一度だけ、ネコの残したキャットフードを少し食べた時のことを思い出しました。

きのうは、ぜんぶ、きれいに食べてくれました。それで、へこみが少し和らぎました。

ネコの皿 片付けながら 目に涙

お間抜けな話ですね。

*

で、今、気になってならないのは、

*「記述」は「既述」である

ということなのです。きのうも帰りのバスのなかで、お腹が空いたなあと思いながら、そんなことを考えていました。大した問題ではないみたいですけど、

*ヒトは、あらかじめ、自分の脳 or 意識に敷かれた=引かれた「経路」以外のものをなぞることはできない

と言い換えると、大きな問題である気がします。

*これからはバイオテクノロジーが、他の分野とからみ合い、ときには先導する形で、急速に重要性を増していく

といった意味のことが、きのう返してきた本のどれかに書いてありました。少なくとも、手元にあるメモには、そう書かれています。それはそれで結構な話なのですが、バイオテクノロジーの分野でこれから何か分かったとしても、それは

*分かるべくして分かっている

ひっくり返せば

*分かることしか分からない

言い換えれば、

*そこにあるのに、ヒトには分からない=見えないことが常態化している

ということになりそうです。もったいないと言えば、もったいないし、仕方がないと言えば、仕方がない。そもそも、そのようなことは、将来のバイオテクノロジーの進歩の

話以前に、

*もう既に今、起きている

みたいなんです。というか、

*これまでに、何度も繰り返されてきた

みたいなんです。ありゃあ！これって、まさに、

*何となく、「何となくでない」をしている

じゃですかー。

自分の分のおかず代を犠牲にして、せっかく図書館へ行ったのに、話が前回の記事にもどっただけではないですか。

*

やっぱり、アホですね。

それにしても、この部屋、暑いです。PCが作動していると、その熱でよけい暑くなります。

「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」した文章を、ここまで読んでくださった方に、お礼申し上げます。どうも、ありがとうございました。では、また。

09-07-15 3人のゲンちゃん

◆3人のゲンちゃん

2009-07-15 14:59:23 | 言葉

以前、

* 「信号学」

と

* 「信号論」

なんて言葉をつくって、

* 「学問ごっこ」

をして、はしゃいでいました。まさに、

* テリトリー本能＝なわばり行動＝マーキング行動＝「汁・おしっこ・知る・印（しるし）・標（しるべ）」＝「地・知・血＝地を知って血を流す」

ですね。このへんの独り受けギャグ＝アホの自己満足ギャグに、ご興味をお持ちの方は、「かく・かける（4）」2009-05-16と「地と知と血（2）」2009-06-22をご一読願います。こんなくだらないギャグはどうでもいい、とお思いの方は、どうかこのまま読み進みくださいませ。

で、「学問ごっこ」ですが、このアホもしょせんヒトの子＝アホもいちおうヒトのはしくれ、というわけです。ああ、恥ずかしい。でも、恥ずかしいのって大好きです。そんなアホの馬鹿さ加減をご覧になりたいご奇特な方が、万一、いらっしゃいましたら、「スポーツの信号学（1）」2009-05-05を一瞥＝一蔑し、

* 「この、アホめっ」or「この、ぬけさくうー」

と、罵倒＝叱咤激励してやってください。「この〇そ暑いのに面倒くさい」とお思いの方は、他のサイトに飛ばずに、どうかこのまま読み進みくださいませ。

で、性懲りもなく、恥ずかしながら、「恥ずかしいのって大好き」企画＝「太宰治生誕100年を記念しての自意識過剰的・自虐的・道化的性向を見直そうキャンペーン（別称：「生まれてきてすみません」運動）」の一環としての「学問ごっこ」をしてみます。えっつ？「勝手にやれば～」ですか？お許しをいただき、ありがとうございます。

*

今回は、

* 「記述論」

または

* 「記述学」

または

* 「一般記述学」(※どうして「一般」を付けたのかと申しますと、“記述学”でググって見たところ、既に使用中=occupied だったから頭に何かを付けよう、それだけの理由なのです。大した意味はありません。ちなみに「記述論」も使用中みたいですけど、「ま、いっか」でいきます)

でして、英語では、

* descriptionology

あるいは

* general descriptionology (※どうして「general」を付けたかは、上記の「一般」の際の理由と同じです。検索の結果、記述=既述でした。)

となり、フランス語では、

* descriptionologie

を予定しており、ドイツ語では、外来語扱いで、そのまま

* Descriptionologie

とするか、ゲルマン系の語を勝手に=でたらめに、接木=造語して、たぶん

* Beschreibungswissenschaft

あたりが、適当=テキトーではないかと考えております。

*

冗談＝本気はさておき、ヒトという種（しゅ）が、何かに取り付かれた＝憑り付かれたかのように、せつせと、やっている、

*記述 or 記述法 or 記述術 or 記述癖（※右にいくほど、胡散（うさん）くさく＝いかかわしく響きませんか？ 大差ないんですけど）

という作業＝いとなみ＝行為＝行動＝習性＝「くせ・癖・曲」について、考えています。こんなことをやっているのも、きのうの記事で、恥ずかしくも（＝「恥ずかしいのって大好き」＝失礼しました）書きましたように、

*広義の「人工言語」という「言葉＝物語＝ガセ＝フィクション」

に振りまわされ、20冊もの本を見て≠読んで、過去数日間、せつせとメモを「つくっていた＝記述していた」後遺症みたいです。このとちくるいは、暑さのせいばかりではない気がいたします。

で、暑いのですが、とちくるいついでに、ちょっと本気で

*記述という、わけの分からないヒトの行動

について、考えてみようと思えました。実際、

*記述

って、

*分かるようでよく分からない

のです。みなさん、どうお思いになりますか？

*

ところで、

*唯〇論

って、ありますね。「なる（8）」2009-04-01で、暑かった、失礼、入力間違いです、扱ったテーマです。で、「記述」について考えていて、その「唯〇論」が不意にあたまに浮かび、思い出したのですが、

*唯幻論と唯言論とのあいだで論争があった

とか、なかったとか、そんな話がありました。昔の話です。いわば、

*ゲンちゃんとゲンちゃんとの喧嘩

です。声に出せば、同じ「ゲンちゃん」なんだから、それに、両方とも結局は同じことなんだから、喧嘩はやめましょう。当時、そう思ったことも、思い出しました。

*「げん・幻・言」、ついでに、「現・減・元・源・眩・眩」

と並べてみると、どうにでも、話＝フィクション＝物語＝口上＝こじつけ＝でまかせを、かます＝つくる＝捏造することができそうな気がします。つまり、

*唯幻論＝唯言論＝唯現論＝唯減論＝唯限論＝唯元論＝唯源論＝唯眩論＝唯眩論……

という感じです。さらに言うなら、「ゲンちゃん」でも、「ケンちゃん」でも、「ゴンちゃん」でも、「アンちゃん」でも、「ワンちゃん」でも、同じ「こと＝操作＝作業＝手仕事＝ブリコラージュ＝お話」づくりができそう、いや、きっとできます。というか、たぶん、できるようになっているのです。ぶっちゃけた話が、

*何でも言えるのが言葉である＝言葉を用いれば何とでも言える

という、例の話です。

*色即是空（しきそくぜくう）

じゃありませんが、

*幻即言＝言即幻＝原則幻＝原則言＝元素苦言＝げんそくげん＝んげえくっそうんげえ

です。マジな話、そうお思いになりませんか？

ゲンちゃん同士の喧嘩がどういう内容だったかは忘れましたが（※喧嘩、口論、議論、論争、紛争、殺し合い、戦争に内容や意味なんてないので、何かと理屈＝言葉をつけても、みんな忘れてしまいます。傷ついた人、殺められた人がいたという記憶だけが残るのです）、

* 言と幻が「素材＝原料＝材料」なら、こんな話になり得る

という横着な乗りで、勝手に考えてみます。

*

まず、

* 「言は、物＝物質＝具体的」 vs. 「幻は、現象 or 意識＝こと＝抽象的」

と形式的＝図式的に処理しておきます。

蛇足とは思いますが、誤解を避けるために、申し添えますが、言＝言語＝言葉は、話し言葉＝音声＝空気の振動、書き言葉＝文字 or 活字＝刻んだり引っ搔いた跡 or インクのかすなど、という具体的な物質です。したがって、知覚の対象になります。見たり鼓膜を振動させたり触ったりできない、意味やメッセージのことではありませんので、よろしくご理解とご了承をお願いいたします。なお、意味やメッセージは、幻さんの担当のようです。

ここで、視点＝支点という点を考慮しなければなりません。最初から、どちらかに加担＝支持＝配慮する形になっては、2人のゲンちゃんが、ひがんで腹を立てますので、公平にいきましょう。

* 言から見れば＝言に重点を置けば、すべては言＝言語＝言葉である。

となり、

* 幻から見れば＝幻に重点を置けば、すべては幻＝幻想＝まぼろしである。

となります（※同じなんですけどねー。事務的に、そういうことにしておきます）。で、

* 言が、特権的＝メタな立場にある、根拠＝基盤＝背景＝理由として、ヒトは広義の言語＝言葉でしか関係を築けないし、言葉によってしか知を継承できないという説＝フィクション＝イメージ＝物語がある（※「説＝フィクション＝イメージ＝物語」という言葉をここに持ってくることには、言ちゃんの強い抵抗が予想されますが、無視します）。

一方、

* 幻が、特権的＝メタな立場にある、根拠＝基盤＝背景＝理由として、ヒトはしょせん

本能が壊れた生き物なのだから「狂え！ 狂え！」という説＝フィクション＝イメージ＝物語がある（※「説＝フィクション＝イメージ＝物語」という言葉をここに持つてくることには、幻ちゃんの強い抵抗が予想されますが、無視します）。

となります。

さて、今、上で並べた2つの文章ですが、同じことを言っています。意識的に＝故意に、同じことを言わせた、同じことを書いた、やらせだ、出来レースだ、八百長だ、とも言えます。何とでも言えます。いずれにせよ、

*両者が同じことを言っている

というのが顕著にあらわれている個所は、

*ヒトは広義の「言語＝言葉」でしか関係を築けない＝ヒトは本能が壊れた生き物だ

という部分です。

*ヒトにおける、言語の存在＝本能の壊れ

と単純化すると分かりやすいと思います。あとは、いわゆる、

*「卵が先か、にわとりが先か」の問題

です。今、「先」という言葉＝イメージをつかいましたが、問題になっているのは「前後関係」という「比喩＝話を進めるうえでの柱・基盤・骨組み」です。

*「前・後」という言葉＝イメージは、時間的経過と空間的広がりという、時空＝宇宙空間の両方の側面に対し、ヒトが共通して用いているという点が、きわめて重要である。

ことについては、「「揺らぎ」と「変質」」2009-06-29で、詳しく論じましたので、ご興味のある方は、ぜひ、ご一読願います。

ここでは、

*「言語の存在＝本能の壊れ」のどちらが先かは検証も実証もできないし、結論も出ない＝出しようがない

と言うにとどめておきます。こういう議論に熱を上げる、血の気の多いヒトたちのお仕事＝あたまの体操・攪乱・攪拌・混乱＝おそらく世界的規模のガス抜き or ロボコン or

合コンです。例の、「熱い！ヤバい！間違いない！」的錯乱状況= orgy です。ただ今のフレーズは、もちろん、冗談=荒唐無稽=支離滅裂=景気づけ=暑さ冷まし、です。不快な記憶を呼び覚まされた、元関係者の方にお詫び申し上げます。ごめんなさい。

2人のゲンちゃんをめぐる喧嘩の仲裁は、以上です。

*

みなさん、ここで、この記事のタイトルをご覧ください。

* 3人のゲンちゃん

となっています。そうです、

* ゲンちゃんは、もう1人いる

のです。ひょっとすると、もっといるかもしれませんが、4人になると「四」で験（げん）=縁起が良くないし、5人だと、ただでさえ暑いのに扱いきれなくて誤認（ごにん）する恐れがあるので、3人にとどめておきます。

では、ご紹介いたします。

* 唯現論のゲンちゃん

です。

* “唯現論”

でググると、使用中= occupied ですが、そのご使用中のゲンちゃんのごことは、存じ上げません。世の中には、同名のヒトがたくさんいます。ここでの、ゲンちゃんは、

* 「げん・現・現実・事実・うつつ」という連鎖

を信奉してしまして、さきほどの「言」と「幻」にならってフレーズ化しますと、

* 現から見れば=現に重点を置けば、すべては現=現実=「今、現に在る事実・状態」である。

となり、また

*現が、特権的＝メタな立場にある、根拠＝基盤＝背景＝理由として、ヒトは現実に「現在する＝現に存在する」事象以外を認識できないという説＝フィクション＝イメージ＝物語がある（※「説＝フィクション＝イメージ＝物語」という言葉をここに持つてくることには、現ちゃんの強い抵抗が予想されますが、無視します）。

ともなります。

で、この現ちゃんの意見ですが、上述の言ちゃんと幻ちゃんの言っていることが同じだったのと同じく、同じことを言っています。事務的な手続きを繰り返しますと、いちばん大切だと思われる

*ヒトは広義の「言語＝言葉」でしか関係を築けない＝ヒトは本能が壊れた生き物だ＝ヒトは現実に「現在する＝現に存在する」事象以外を認識できない

という部分が同じことを言っています。さらに単純化すると、

*言語の存在＝本能の壊れ＝現実の認識

は同義です。

「どこが同じなんだ？」「なぜ同義なんだ？」と疑問をいただいている方のために説明しますと、3人のゲンちゃんは、

*ヒトには、知覚、および、認識の両面において、限界＝欠陥がある。

言い換えると、

*ヒトは、全知全能ではない。＝ヒトには、出来ないことと、分からないことがたくさんある。

あるいは、

*ヒトは、この惑星に生息する一介の生き物にしかすぎない。

と認めている点で、同じだという意味です。

決定的に、同じなのは、

*唯言論＝唯幻論＝唯現論が、どれも「ゆいげんろん」と読める。＝3人とも、「ゲンちゃん」だ。

という点です。というのは、もちろん、冗談でして、そうではなくて、

*唯言論＝唯幻論＝唯現論が、どれも「唯〇論」である。＝3者とも、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」と言っている。＝できもしないことを言っている。＝夢を語っている。＝希望を述べている。

という点が同じです。蛇足ですが、

*すべてを「げん」に還元（かんげん）する（※「還元主義＝reductionism」の「還元」です）。＝すべてを「げん」で説明する。

ことはできません。なぜなら、

*たった今、記述した立場＝考え方は、言＝言語だからであり、幻＝幻想だからであり、現＝現実だからである。

からです。

*問題は、「唯」と「すべて」にある。

と言えます。

*「唯」と「すべて」は、肯定に見える＝思えるが、実際には否定である。「唯」と「すべて」という言葉＝イメージで、何かを特権化する＝メタな立場に置く＝上位に置くという作業を行ったとたんに、ヒトは不可能性に直面している＝もてあそばれている。

事態に陥ることを、忘れてはならないと思います。早い話が、

*「唯」と「すべて」という言葉＝イメージは、「ヒトにとって荷が重すぎる」＝「ヒトには扱えない」。

ということです。

*

ここで飛躍しますが、だからこそ、

*ヒトは、必死で記述する。＝記述するしか方法がない。＝記述することで自らの「無力＝無能＝敗北」を認めている。

のです。

*万が一、ヒトが全能に近い存在であれば、記述などという、まどろこしい=ほぼ愚かな作業に、没頭=熱中しない。

とも言えます。したがって、

*メタな立場にたつ=この惑星の王者を気取るなんて、10年早いどころか、100万年早いと言ったとしても、言い過ぎ or 言い足りない。

と言えそうです。ちなみに、100万年後にヒト=ホモ・サピエンスは太陽系に存在していないだろう、という説=お話は、ガセとは言えない気がします。で、話をもどして小さくしますが、

*「唯〇論」という言葉=イメージは、ジョーダン=戯言=ガセ=いわゆるひとつの「お話」である or にすぎない。

と言えるのではないのでしょうか。ですので、もし、

*「唯〇論」という文字が入ったタイトルの書物

を目にしたら、いわゆる、

*トンデモ本

だとお考えになっても、かまわないと存じます（※念のために書き添えますが、トンデモ本というレッテルを貼られた本たちは愛すべき存在だと考えております）。このブログが、いわゆる、

*トンデモブログ

であるとお考えになっても、かまわないのと同じです。

*

とはいうものの、3人のゲンちゃんは全知全能でなく、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」という立場には全然ないにもかかわらず、それなりに有効性=効果=影響力を備えていて、ヒトびとのためになっていることは確かです。

*誰がいちばん偉いか

なんて考えることはありません。それぞれの活躍の場はあるわけです。ですから、その位置関係が、

言—現—幻

なのか

現—言—幻

なのか

現—幻—言

なのか

言

／＼

現—幻

なのかは知りません。

みなさん、お気に入りの立場から、お好きな位置関係＝パターンをお選びください。もちろん、これ以外にも、チャート化＝図式化は可能でしょう。

*何とでも言える＝書けると同時に、どんなふうにも描けるのが、「記述」の特性だ。

と言えます。

それはさておき、現実問題として、要は、

*ヒトは生きていくうえで、自分にとって「気持ちいい＝快である」ゲンちゃんと付き合い合えばいい。

のです。ただし、

*「唯〇論」の、「唯」は外しましょう。「〇論」だけで、いいじゃありませんか。

そうすれば、唯言論、唯幻論、唯現論、が全部、「げんろん」となります。「げんろんの

自由」は保障されています（※公平を期するために、あえて「言論の自由」とは記述しませんでした。気遣いと気配りが何よりも大切でございます）。

*

あっ、ネコが部屋に入ってきました。あっ、暑いから逃げていきました。追いかけて、遊んでもらいます。

では、事務的で恐縮ですが、きょうのまとめに入ります。

以上、見てきましたように、ほんの3例ですが、

*ヒトの世の中には、いろいろな「世界＝宇宙＝森羅万象」の記述の仕方がある。

ようです。注意すべきことは、

*「絶対」、「完全」、「唯一」、「すべて」といった類の言葉を発しない

謙虚さを持つことではないでしょうか？ たぶん、おそらく、メイビー、パハップス、そういう類の言葉＝イメージは、ヒトにはふさわしくないのではないかと思われるみたいなんですけど.....。

いずれにせよ、

*言・幻・現のうち、どれがいいかなんて、「とろい」＝間が抜けた＝答えなんて出ない議論をする

よりも、

*妥協して「トロイカ体制」を敷く

か、

*トロイカより、「エロイカ（＝英雄⇒独裁者）に支配されたい願望」＝ファシズム＝全体主義＝思考停止状態・常態に陥らないように警戒する

か、

*そんなきな臭いことにはかかわらず＝変な形で頑張らずに、せいぜい自分のPCがトロイの木馬にやられていないか気を配る

か、

*「トロイ（ア）戦争」は本当に起きたのか、をネット検索して調べるか、議論する

などして暇つぶしをするか、

*「トロイカとエロイカでは、どっちがとろいか?」「さあ?」「トロイカよ」「なんで?」「三人四脚では、動きにくい」なんて、くだらないオバハンギャグをとばす

か、

*「トロイカとエロイカでは、どっちがエロいか?」「さあ?」「エロイカですねん」「なんで?」「英雄色を好む」なんて、どうしようもないオヤジギャグをとばす

か、

*回転寿司のカウンターで「トロとイカのどっちにしようか」なんて、うじうじしながら迷っている

ほうが、よほど建設的ではないかと存じます。で、いろいろ「おふざけ」を書きましたが、

*相手の上に立とうとか、どっちが偉い or 正しい or 優れているかを命をかけてまで争うとかは、やめましょう。お遊び感覚=楽問=ゲイ・サイエンスなら、いいですけど。

と言いたかっただけです。

*

というわけで (※「どーゆーわけなんだ~!?!」)、

この暑いなかを、このトンデモブログのこの行まで、お付き合いくださった方に感謝いたします。どうも、ありがとうございました。では、また。

ネコやネコ どこが涼いか 教えてちょ (←「スズイ? どこの方言なんだ~!?!」「でまかせっス。暑いんで勘弁してちょ」)

09.07.16 あつさのせい？

◆あつさのせい？

2009-07-16 15:25:38 | 言葉

まず、一句。

おかしいな みんなあつさのせいにする

さて、きのうの記事の続きを書きます。具体的には、上に書きました、「俳句のなりそこない＝川柳もどき・がんもどき＝要するに単なるフレーズ」を、何通りかに解釈し、それにコメントを加えてみます。

*モニターにあらわれた画素のかたまりである活字＝文字＝言葉でしかないフレーズ

の、意味とメッセージとイメージとニュアンスなどをめぐる、

*多義性＝多層性＝豊かさ＝厚み＝あつさ＝テキトーさ＝あつくるしさ

を、まのあたりにすることにより、

*ああ、あつい

と、みなさんに体感していただきたいのです。

*ちょっと待ってください！

「こりゃあ、あつそうだ」と予感なさり、他のサイトへと、クリックして、ぴゅーっなんて、避難＝非難なさらないでください。斜め読み or 飛ばし読みなされば、すぐに済みますので、すこしお付き合いいただければ、幸いです。

では、まいります。

★

おかしいな みんなあつきの せいにする

解釈（１）：「笑っちゃいそうだよ。皆が何でも暑さのせいになっている」

そうですね。何だか、ヤケクソ気味になって、笑えてきませんか。こう暑いと、誰もが、何か不都合や不具合や失敗や事故や事件があるたびに、

* 「暑いからだ」

なんて、

* 条件反射的

に口にしてしまいます。でも、実際、言えていませんか？ 暑さがリミットを超えると、仕事にしろ、勉強にしろ、遊ぶにしろ、ぼけーっとするにしろ、やる気が失せるし、体調に気を配らないと

* 重篤な＝篤（あつ）い熱中症

に見舞われる恐れがあります。

★

おかしいな みんなあつきの せいにする

解釈（２）：「何だか変な気がするなあ。皆が何でも暑さのせいになっているけど……」

暑いから、ろくなことがないのだ。ええい、面倒くさい。景気が悪いのも、政局がめちゃくちゃなもの、このところ便秘気味なもの、さっき階段でけつまずきそうになったのも、

* ぜんぶ暑さのせい

にしてしまえー。

そう言いたくなる気持ちは、よく分かりますよね。とほいうものの、

*変じゃありません？

特に、この数年間の異常な暑さ、自然現象だと済まして、「澄まして=すっとぼけて」
いられるでしょうか。

*地球温暖化だって？

勘弁してよー、このくそ暑いのに。熱くなるのはやめようよ。でも、ちょっと心配だな。
がんがんエアコンを効かせた（=二酸化炭素を多量に排出する）部屋でなら、考えられ
そう。そんな気持ち、正直申しまして、分からないでもないです。

★

おかしいな みんなあつさのせいにする

解釈（3）：「絶対、変だよ。皆が何でも暑さのせいになっているけど、こうなったのは、
ひょっとして人間の面の皮が厚いからじゃないのかなあ」

なるほど。暑いのに、よくそこまで

*熱く篤く考える

ことができますね。ヒトの厚顔さ、つまり、ヒトの

*面の皮が厚い

ことにまで考えがおよぶなんて、宗教心が篤い方なののでしょうか。確かに、この惑星の
地という地を我が物だと「心得ている=心得違いをしている」ヒトは、

*「厚かましい=鉄面皮な」生き物

だと思います。ヒトという種（しゅ）の

*「人」情の篤さ=厚さ

に期待することは無理なののでしょうか。

★

おかしいな みんなあつさの せいにする

解釈（４）：「変だよ。皆が私のことを熱すぎるって、非難するんだもの」

ほうー、そういう解釈もあるんですね。

*熱いヒト

は確かに、世の中にたくさんいます。ヒトという種は、いろいろなものに熱くなります。

*熱中症や熱射病ではなく、「熱中病」

とでも言うのでしょうか。

*他人様（ひとさま）のさまざまな事情を無視して、「GO! GO!」とか「イエーイ」なんて叫んで、ひとりだけ熱くなって突っ走ってしまう。

または、

*かっかとして、のぼせてしまい、唯〇論的発想＝「私が絶対に正しい」信仰＝「すべて私にお任せあれ」状態に陥る。

これが、「熱中病」というビョーキの特徴のようです（※「熱中病」は比喩としてつかっておりますが、もしも、「熱中病」が医学の専門用語あるいは診断名として存在しているようでしたら、関係者の方々に、予めお詫び申し上げます。ごめんなさい）。なお、この

*「熱い」

に関しては、「論理の鬼」2009-01-02 という記事のなかで、

*哲学・論理・数学・自然科学・機械・コンピューター

などからめて論じておりますので、ご興味のある方は、ぜひ、ご一読願います。「暑い時に熱いなんてご免だよ」とお思いになられている方は、もちろん、パスしちゃってください。

★

おかしいな みんなあつさのせいにする

解釈（５）：「変だわ。私のお化粧ってそんなに濃いかしら。香水も強すぎるかしら。彼氏（or 彼女）ができないのは、そのせいだなんて絶対に変！」

ありゃあ！ そうですかー、

*厚化粧

と解釈なさったわけですね。実にユニークな状況ですね。いや、そうでもなさそうです。よくありがち、でも、ご本人だけが意識なさっていない。そんな状況が、周りに散見されることを思い出しました。

ところで、この記事を書いているアホは、

*お酒と煙草の臭い or 匂いと、強い香料（男性用、女性用を問わず）の臭い or 匂い

に、めちゃ弱いのです。ですので、昔から、その種の臭い or 匂いがする場所を避けてきました。

*飲み会やコンパのたぐい、冠婚葬祭、会社などの組織

とほぼ無縁のまま、これまで生きてきたのは、こうした生理的傾向が大きな要因だったようだと思います。ですので、現在も、男女を問わず、

*濃い=厚い

お化粧の方は苦手です。

そういえば、ふと、

*かつてタモリが司会をしていた「ボキャブラ天国」

か、何かで見聞きした替え歌の一節を思い出しました。

*♪こ～いわ～、わたしのこ～いわ～

と、ただ今、あたまのなかで誰かの声が、がんがん響いていると思うのですが、あれって、

*小岩（こいわ）という東京都にある駅

でロケをした、ローカル＝「ご当地」ギャグだったような記憶もありますし、正確なことは忘れましたが、とにかく

*「こ～いわ～」は「濃いわ」

でありまして、何が「濃いわ」なのかに関しては、

*どこかにある体毛を指していた

ちょっとエッチな趣のあるネタだったような気がします。イメージが2つに分裂しているのは、難聴のせい？ それとも、単にエッチなせい？ あるいは、

*あつさのせい？

★

おかしいな みんなあつさの せいにする

解釈(6):「お菓子否(おかしいな)＝お菓子いらない、みんな、わたしのお腹の皮の厚さのせいにするんだもん。だから「あんた or おまえ」はもてないんだよ、とか言って」

いやー、参りました。

*いな＝否

ですか。確かに、そうも読めますよね。個人的には、こういう「読み」って大好きです。そこまで解釈をなさった方、1日で、ようござんすから、このブログで記事を書いてみませんか？ えっつ？「ったく、くだらない。あんただけで、けっこう」ですか？ 納得。で、この解釈へのコメントですが、

*ダイエットをして、減量しましょう。

これくらいしか、コメントできません。すみません。ちなみに、自分の場合、現在の体重は47キロほどしかありません。身長は高くはありませんが、理想的な体重より相当少ないです。以前は60キロ近くあったのですが、今では、がりがり状態です。減食ではなく、「別の＝広義の」意味で、ダイエット＝食餌療法をするべきだと思っております。

★

解釈とコメントは、以上です。もちろん、もっといろいろな解釈が可能ですが、やっぱり、

*暑いので、

これくらいにしておきます。まさに、

おかしいなみんなあつさのせいにする

です。

*

どうでしたでしょうか？

* 5・7・5という短いフレーズの、多義性=多層性=豊かさ=厚み=あつさ=テキトウさ=あつくるしさ=うっとうしさ=うざさ

を体感していただけましたでしょうか？「それ以前の問題として、くだらなすぎるよ」ですか？ ごもっともです。返す言葉もございません。

で、冒頭に書きましたように、きょうの記事はきのうの続きなのです。きのうの記事から、必要部分を以下に、コピペさせてください。

★

*言から見れば=言に重点を置けば、すべては言=言語=言葉である。

*幻から見れば=幻に重点を置けば、すべては幻=幻想=まぼろしである。

*現から見れば=現に重点を置けば、すべては現=現実=「今、現に在る事実・状態」である。

言

／＼

現 — 幻

★

以上（★と★の間）が、引用です。

で、大切なことは、引用部分の3つのフレーズは

*同じことを言っている。

という点です。すごく短絡的で簡略化した説明をしますと、

*ヒトの「意識＝認識」には「出入口＝スクリーン＝フィルター」が1つしかないため、言も幻も現も「区別できない」。「区別できない」とは、「分けられない＝分からない＝同じ」ということ「である＝でしかない」。

「みたい」になります。あくまでも

*「みたい」

です。

*「見たい」けど、「見えない＝分からない」

とも言える「みたい」です。ですので、「みたい」としか言いようがありません。

ヒトがしゃかりきになってやっている、

*「記述する」という行動の前提＝基盤である「見る」という行為においては、「見方＝考え方＝視点＝視座＝見る位置」によって、「いろいろに見える」という仕組み＝メカニズムが働いている。

とも、言えそうです＝言える「みたい」です。これって、すごく当たり前のことなのですけど、どう考えても＝どう見ても、

*ヒトは、その「当たり前」を意識していない

「みたい」なのです。

たとえば、さきほどの、

*おかしいな みんなあつさの せいにする

というフレーズは、

*言＝言葉

ですから、声に出して読めば、

*「言＝言葉＝音声＝空気の振動・波」として、鼓膜を震動させ、聴覚という知覚機能によって、ヒトに知覚される

と言えます。そのフレーズがP Cのモニター上に表示された場合には、

*「言＝言葉＝文字・活字＝画素」として、目の網膜に映し出され、視覚という知覚機能によって、ヒトに知覚される

と言えます。

*「言＝言葉」は、ヒトの知覚器官によって知覚される「具体的＝物質的な」「物」です（※意味やイメージやメッセージは、「言＝言葉」そのもの）ではありません。

同時に、

*おかしいなみんなあつさの せいにする

というフレーズは、ヒトが「言＝言葉」として知覚することによって、

*「幻＝幻想」

として意識＝認識（or 知覚？）されます。正確には、

*幻＝幻想＝意味＝解釈（≡可能性としてのメッセージ・メッセージもどき・非メッセージ的メッセージ）＝イメージ（＝個人レベルで勝手にヒトがいだくもの）（※この辺がごちゃごちゃした記述になっているのは、要するに、これらが、文字通り「まぼろし」だからです。「狂え！ 狂え！」的状況だからです。）

です。

*「幻＝幻想」は、知覚されると主張するヒトがいるとはいえ、複数のヒトに共有される体験である事例がきわめて少ないため、そうした体験は錯覚である可能性がきわめて高い。

したがって、

* 「幻＝幻想」は、「意識＝認識」の対象となる抽象的な「こと・現象」である。

と言えそうです。さきほどのフレーズの6通りの解釈は、直接、知覚することはできず、いったん、「言＝言葉」として知覚されたうえで、みなさんの目に届いたはずで

* 以心伝心

あるいは

* テレパシー

は残念ながら、起こっていません。

ただし、さきほどのフレーズを読んで、上記の6つの解釈とは別に、みなさんが、それぞれ個人的に、「解釈＝意味＝イメージ」、つまり「幻＝幻想」を「持たれた＝いだかれた」際に、どんなことが起こっているのかと申しますと、ヒトであるみなさんが、

* 1) モニターの「言葉＝文字＝活字」を知覚し、2) 「データ化＝情報化」し、3) 「あたま＝脳＝意識」が、2) の「データ＝情報」を認識する

というプロセスを経過したのちに、

* 「幻＝幻想」は、「意識＝認識」という過程に存在すると想定・仮定される「出入口＝スクリーン＝フィルター」で処理される。

つまり、

* 「幻＝幻想」が、「意識＝認識」において立ち現れる。

と言えそうです。ややこしいので、たった今、書いた文を説明させてください。正確には、

* a) 「幻＝幻想」は、「意識＝認識」という過程にあると想定・仮定される「出入口」を通る。＝ b) 「幻＝幻想」は、「意識＝認識」という過程にあると想定・仮定される「スクリーン」に映し出される。＝ c) 「幻＝幻想」は、「意識＝認識」という過程にあると想定・仮定されるフィルターで濾（こ）される。

です。もっとも、a) b) c) は、このブログを書いているアホが勝手に想像＝妄想した

比喩です。比喩＝たとえ＝仮定ですので、

* どれがいいかなあ

と、これまた勝手にうじうじと迷っているだけです。いわゆるひとつの単なるお話＝フィクション＝でまかせ＝ガセ＝与太話にすぎません。とはいうものの、アホがアホなりに本気で考えているところが、

* 「ほんまもんやから、こわいわー」

ですけど.....。

*

以上の、「言＝言葉」と「幻＝幻想」という、「レベル＝フィクション＝考え方」で起こっている現象を、

* 「現＝現実」という「立場＝視点＝視座」から「見る」と、すべては、「「現実 or 事実」という枠のなかで」起きている現象になる。

と言えます。

* 「言＝言葉」はあくまでも「言＝言葉」として、「幻＝幻想」はあくまでも「幻＝幻想」として、「「現実 or 事実」という枠のなかで」とらえる。

のです。すごく実利的＝すごく実用的＝すごく現実的（※「現＝現実」の話をしているのですからトートロジー＝同語反復ですけど、単なるイメージとしてとらえてください）＝「ちゃっかりしている」＝「何が起きても、何を見ても動じない」スタンスです。

それもそのはず、

* ヒトは、日常生活においては、「現＝現実」という「立場＝視点＝視座」から、「周り＝他者＝世界＝宇宙＝森羅万象」を、「見ている」

ので、こんなに

* 強気＝厚かましい＝厚い＝熱い＝ついでに暑い・篤い＝身の程知らず＝「何となく、「何となくでない」をしている」＝「何となく「とんでもない」をしている」

のです。なお、「何となく」については、「何となく」2009-07-08 という記事を、「何とな

く」で結構ですので、お読みいただければ嬉しいです。

*

さて、

*言ちゃん、幻ちゃん、現ちゃん、という3人の「ゲンちゃん」

をめぐっての、きのうのお話＝紙芝居で、このアホは

*「こうへいくん＝公平くん」

を演じ、3人を同列に扱っていました。きょうは、3人の役柄を説明したいと思います。

さきほど述べましたように、

*通常、ヒトは、「現＝現実」のレベルでかなり強気に生きている、あるいは、そのつもりでいる。

しかし、

*「裏＝内心＝無意識」では、かなり「幻＝幻想」にどっぷり浸かっているが、そのようには、考えないように努力しているヒトが多い。

逆に、

*「幻＝幻想」のなかで生きていることを売り物にして生計を立てているヒトも一部いる。

一方、

*ヒトをとりまく「世界＝宇宙＝森羅万象」を、ヒトは広義の「言＝言葉」として知覚するしか方法を持たない。

おそらく、そのせいで、

*ヒトは、かなり必死になって、「世界＝宇宙＝森羅万象」を記述しようとしている。言い換えると、「世界＝宇宙＝森羅万象」を、「暗号」に見立てて＝たとえて＝こじつけて、「解読」しようとしている。

これは、

*「世界＝宇宙＝森羅万象」の一部である or 一部でしかないヒトが、身の程＝分際をわきまえず、「世界＝宇宙＝森羅万象」そのものになろうという「意志＝願望＝志向性」を持っていること＝「病（やまい）の1つの「あらわれ」＝兆候＝症状」である。

とも言える。そうした、

*意志＝願望＝志向性＝病は、とりわけ、宗教や科学と呼ばれている分野に顕著に観察される。

と言えそうです。

以上が、3人のゲンちゃんの役割についてのお話＝紙芝居＝与太話でした。

というわけで、

おかしいなみんなあつさのせいにする

というより、

やっぱりね みんなあつさのせいだわい

と言えるみたいな気がします。きょうの記事をお読みになり、

*「あつさ・暑さ・厚さ・熱さ・篤さ」という言葉の、多義性＝多層性＝豊かさ＝厚み＝あつさ＝テキトーさ＝あつくるしさ＝うっとうしさ＝うざさ

を体感していただけたとすれば、それに勝る喜びはありません。

*ああ、あつい（※ひらがなであることに注目してください。日本語の文字体系ではひらがなが、本来のことば＝音声＝音（おん）に一番近い「書き言葉＝表記法」です。だから、これも「あつい」のです。）

と感じていただければ、それだけで嬉しいです。

*

ところで、一句。

梅雨明けて 鳴き出したのは スピーカー

【注：この記事が書かれていたころには、近いうちに総選挙があるらしいという憶測が飛び交っていたようです。だからスピーカーなのであり、以下に書かれているように、激しい選挙戦が行われる暑い夏になりそうな気運が高まっていたのだと思われます。】

一歩外に出るまでもなく、家でテレビのニュースを見ていて感じますが、今年は、とりわけ熱くて、厚くて、篤くて、暑い夏になりそうな気配です。みなさん、どうか、くれぐれもご自愛ください。

このあつくるしい文章を、ここまで我慢してお読みくださった方に、お礼申し上げます。どうも、ありがとうございました。では、また。

09.07.17 システムと有効性と比喩

◆システムと有効性と比喩

2009-07-17 16:26:18 | 言葉

きのうの記事の続きです。図式化しますと、言ちゃん、幻ちゃん、現ちゃんという3人のゲンちゃんの位置関係を、

言
／ \
現 — 幻

から、

言 — 幻 — 現

あるいは、

言→幻→現

として考えてみる＝見てみる、という話でした。なぜ、このような図になるのかに、ご興味をお持ちの方は、きのうの記事をご一読願います。

きょうは、

言→幻→現←幻＝げん→げん→げん←げん

みたいな話になると思います。

で、今、あたまのなかにある3人のゲンちゃんをめぐっての「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」した、

*言葉になる前の「何か」＝「分けられないもの・分からないもの」＝「イメージ+言葉の断片」＝「熱」＝「実体を欠いた運動」を、「見ようとしている」＝「耳を傾けている」＝「感じ取ろうとしている」＝「分けようとしている・分かろうとしている」

ところです。

*今、ここにあるもの・こと・現象を見つめ、手持の知識と記憶を呼びさます

というのが、このブログのスタンスです。

*横着＝安上がり＝テキトーな方法

だとは思いますが、一方

*崖（がけ）つぶち的でしんどい作業

でもあります。

でも、好きでやっていることなので、疲れても苦にはなりません。で、頼るもの＝支えてくれるものとしては、記事を書くために書き溜めた走り書きメモがありますが、そのほかには、自分のからだとあたましかありません。

いったんは踏んばるわけですが、力が出ないために、頑張るのはやめて、

*偶然性と、勘・感・観・問と、身をまかせる

つまり、

*まける

のです。その結果が

*でまかせ=出任せ=「出る」に「任せる」

です。これって、自分の人生そのものです。振り返ってみれば、ずっとこんな具合に生きてきました。

と、自分のスタンス=やり方を、確認し言い、自分に聞かせたところで、本題に入ります。

*

きのうの記事で、

*言=言語=ことばも、幻=幻想=まぼろしも、現=現実=うつつも、同じだ

という意味のことを書きました。言い換えると、この3者=3人のゲンちゃんたちが、どうからみ合っているかについて、書いていたのです。もっとも大切なのは、

*言と幻と現が切り離せない。

という点です。なぜ、この3者が切り離せないかというと、

*ヒト「が」、しがみついて「放さない=離さない」=ヒト「に」、しがみついて「放さない=離さない」

からです。ヒトという種（しゅ）が存在しなければ、言と幻と現なんて、意味がないし、だいいち、存在しないはずですよ。

このように、

*ヒトにおいて切り離せない=ヒトが不可分なものとして認識している「もの・こと・現象」たちを、とりあえず「システム」と呼ぶ。

ことにします。言と幻と現に関して、比喩を用いるとすれば、

*水分を含んでびったり重なり合った3枚の枯葉

です。腐敗が進行し始めた枯葉がいいですね。くっついてなかなか剥がせません。ただし、これは比喩です。このように、

*「何か」を説明しようとする場合には、「何か」自体を、しつこく丹念に「描写」＝「写生」する

方法と

*「何か」の代わりに「その「何か」以外のもの」を、安易に「描写」＝「写生」する

方法があります。前者は、実に大変な作業で

*しつこく丹念に苦勞して、記述する

ことになります。不可能に近い、切りのない作業です。一方、後者においては、前者の記述＝描写＝写生にともなう、気の遠くなるような作業を簡便化するという目的があるために、

*あまり深く考えることなく安易に、記述する

傾向がみられます。それりゃ、そうですね。わざわざ、どこかからややこしいものを持ってきて、それをを用いて説明するなんて馬鹿なことはしません。比喩として使えそうなものを持ってくるのです。だから、やらせであり、出来レースを企んでいると言えます。

*比喩は記述の手間を省くために使うツールである。

と言えそうです。これまでに、何度か書いてきたことですが、

*比喩を用いる場合には、Aの代わりにBを用いていることを忘れ、AではなくBの話になってしまっているという愚に陥らないように警戒すべきである。

点を忘れてはなりません。そのことに注意しながら、

*水分を含んでびったり重なり合った3枚の枯葉

の話が続けます。

*

状況を確認しますと、言と幻と現がぴったり重なっているわけです。枯葉の腐敗が進行していますから、剥がそうとすると、3枚の枯葉は破れて＝損傷してしまいます。

* 3枚の枯葉は一体化しはじめている

ということです。

*腐敗の進行によって、3枚の枯葉のあいだに「つながり」＝「むすびつき」＝「細胞壁の破壊・劣化・崩壊にともなう細胞同士の合体」が促進されつつある

ということでしょうか。でも、まだ完全に一体化されたわけではありません。ここで気をつけなければならないことは、「3枚の枯葉」という比喻をつかった場合には、

*最終的にその3枚がどろどろに溶け、一体化してしまう

というイメージが「働く＝ともなう」、という点です。

さて、比喻である「3枚の枯葉」のご本尊（※これも比喻です）である「言と幻と現」は、どろどろに溶けて一体化するのでしょうか？ しませんよね。だから、この比喻をつかって、これ以上、深入りしないほうがいいということになります。でも、つい、調子に乗って深入りしちゃうんですよね。そうした例は、ざらにあります。

*

次に、冒頭で挙げた図を再び取り上げます。

言
／ \
現 — 幻

言 — 幻 — 現

言 → 幻 → 現

以上の3つの図も、「言と幻と現」を記述したものです。微妙に異なっています。なぜでしょう？ 視点＝支点が異なっているからです。つまり、3つがそれぞれ、ある視点に立って、言い換えれば、ある支点を基準にして記述しているから、異なった図になっているという意味です。

さらに言うなら、これらの図＝記述が異なっているのも、図という記述法が「比喩」だからです。さらに言うなら、そもそも、「言と幻と現」という言葉＝イメージが「比喩」だからです。

ただ今書いたことは、すごく当たり前の状況を示しています。そもそも、とりあえず「言と幻と現」を記述したヒトの行動のある側面を、二次元の図＝平面の図として、記述できるわけがないのです。

*比喩を比喩して比喩にする。＝たとえをたとえてたとえる。

のですから、

*ひゅーひゅーひゅー状態

という「比喩」を用いることも可能でしょう。何を言いたいのかと申しますと、

*ヒトが、血道をあげて＝必死になって＝なりふりかまわず日々行っている記述という作業＝習性は、比喩＝たとえ＝こじつけ＝代理任せ＝ほぼでたらめである。

ということです。

*そうしたでたらめぶりを覚悟して＝認識して＝肝に銘じて、記述を行いましょよ

と申し上げたいのです。というのも、

*ヒトが、「何となく、「何となくでない」をしている」＝「何となく「とんでもない」をしている」

という、きのうの記事でも書きましたことを、いけしゃあしゃあとやり続けているさまを見ていて、悲しくなるというか、情けなく思えてならないからなのです。これは、この記事を書いている自分というアホを含めての話です。自分を棚に上げたり、脇に置いたりはいたしません。

*ど真ん中に、このアホを据えて土下座させての話

なのです。現に、「言と幻と現」を「3枚の枯葉」にたとえたり、上に挙げたようなでたらめな図式化をして、

*行き詰まっている状況＝放っておけばそのまま無意識のうちにあるいは故意にでたら

めを続行しかねない状況＝気に留めなければ「何となく・とんでもない」状態にある

ではないですか。ああ、みっともない。ああ、恥ずかしい（※道化や恥ずかしいのって大好き＝太宰治生誕 100 年記念キャンペーン＝「生まれてきてすみません」運動の一環です。ちなみに、たった今書きましたことには、深い意味はありません。暑気払いみたいなものです）。でも、致し方ない。ヒトである以上、どうしようもない。

*

さて、以上述べましたような

* 神経症的心境が、「言＝言語＝ことば」にこだわっている視点・支点

なのです。

* こういう心理状態に陥ると、日常生活を送るうえで、かなりの支障をきたす。

と経験上申せます。ここで、お気づきになられたことと存じますが、以上のようなややこしい記述をしているこのアホこそが、「言＝言語＝ことば」にこだわる傾向が強い見本＝好例です。

一方、

* 「幻＝幻想＝まぼろし」にこだわっているヒトたちは、「言＝言語＝ことば」のレベルで悩むなんてことはまれである。

と言えそうです。何しろ

* 「狂え！ 狂え！ みんな、本能が壊れているんだ。狂え！」的的心境

にありますから、

* あたま＝脳＝意識というスクリーン（※比喩です。このヒトたちは比喩を比喩だなんて意識しません）に映し出される映像を、現実だと言い聞かせて、あるいは、現実だと正々堂々と錯覚して、食い入るように見つめている。

のが、ほぼ常態です。その状態＝常態を楽しんでいます。というか、

* 楽しんでいると感じる余裕もないほど楽しんでいる。

と言えます。この心理的状況がエスカレートすると、日常生活に支障をきたす場合がありますが、それは少数のヒトにみられる現象＝症状で、

*かなりノリノリでも＝かなり熱くても＝かなり面の皮が厚くて鈍感でも、それなりに何とか日常生活をおくることができる。

と言えます。というのも、

*「幻＝幻想＝まぼろし」にこだわっているヒトたちは、「現＝現実＝うつつ」にこだわっている＝うつつにうつつを抜かしているヒトたちとかなりダブっているというか、両者は分かれて存在しているのではなく、2つの傾向のあいだを同じヒトたちが行ったり来たりを繰り返している。両者の違いは、程度の差にすぎず、両者は圧倒的多数派であり、ヒトはこうであるのが、ふつうである。

からです。

*「幻＝幻想＝まぼろし」にこだわっている状態が、沈静化すると、「現＝現実＝うつつ」にこだわっている＝うつつにうつつを抜かしている状態になる。

というのが正確な記述の仕方かもしれません。あくまでも、「かも」です。ということは、さきほど触れた、神経症的心境にある「言＝言語＝ことば」にこだわっている視点・支点に立っているヒトたちに関しても、同様のことが言えそうですが、少し異なる側面があるため、

*「言＝言語＝ことば」にこだわっているヒトたちは、「現＝現実＝うつつ」にこだわっている＝うつつにうつつを抜かしているヒトたちとダブっているというか、両者は分かれて存在しているのではなく、2つの傾向のあいだを同じヒトたちが行ったり来たりを繰り返している。ただし、「言＝言語＝ことば」にこだわる傾向と親和性のあるヒトが、「現＝現実＝うつつ」にこだわる状況に近づく勢いは弱い。両者の隔たりは大きい。

と言えそうです。その点だけに注目して図式化すると、

言←————→現←→幻

というイメージ＝像として記述することができそうです。この図からも、お分かりになると思いますし、きのうの記事でも触れましたが、

*「現＝現実＝うつつ」にこだわる状態が、ヒトの常態であり、この状態にあるかぎり、「言に過度にこだわる」神経症的心境に陥ることも、「狂え！ 狂え！ みんな、本能が壊れているんだ。狂え！」的心境に陥ることもない。

と一般化できます。あくまでも「一般化」＝「一般論」＝「マイノリティはぜんぶ切り捨て」です。

*

さて、自分が「言＝言語＝ことば」にこだわる神経症的心境に陥っていると信じているアホとしましては、「現＝現実＝うつつ」にこだわるのも「幻＝幻想＝まぼろし」にこだわるのも、苦手だと思い込んでいるために、冒頭で取り上げた、

言→幻→現←幻 = げん→げん→げん←げん

という図という記述を、「言＝言語＝ことば」的視点・支点から、言葉を用いて記述したいと思います。

1) ヒトは、他者＝周り＝世界＝宇宙＝森羅万象を、刺激として、知覚器官によって知覚し、情報化＝データ化＝信号化する。なお、ここでの刺激とは、のちに意識において、言＝広義の言語＝表象（映像・音声・物・現象・状態など）として認識されるものである。言として認識されないものは、刺激として知覚されない。

2) ヒトは、1) で受け取った情報＝データ＝信号を、ニューロンを通して脳に伝達する。

3) ヒトは、脳において、1) で受け取った情報＝データ＝信号を、幻想＝まぼろし（＝イメージ）として脳内における意識というスクリーン（※もちろん、比喩です）に映し出す。スクリーンに映し出された映像（※もちろん、比喩です）は、記憶として脳内に保存される。なお、1) と2) がきわめて高速で、しかも精度が高いのに比べると、脳内での意識というスクリーンに投影する作業は、低速で、精度はきわめて劣る。

4) ヒトは、脳において、1) で受け取っていない情報＝データ＝信号も、幻想＝まぼろし（＝イメージ）として脳内における意識というスクリーンに映し出す。この時にスクリーンに映し出されたその映像もまた、脳内に記憶として保存される。

5) ヒトは、3) および4) で記憶として保存された映像を、再び、あるいは、繰り返し、スクリーンに映し出す。そこで映し出された映像は、記憶されているままに再現されるとは限らない。つまり、改変される。改変された映像もまた、脳内に記憶として保存される。

6) ヒトが脳において、3) 4) 5) という形で、意識というスクリーンに映し出された映像＝幻を認識する状態＝行為が、ヒトにおける、知覚する、および、思考するという

状態＝行為であり、その状態＝行為をとらえることこそが、ヒトにおける現＝現実＝うつつにほかならない。

7) 以上の1)～6)に分けて記述した状態・行為を、ヒトは「分けてとらえる＝分かる」ことができない。ヒトにとって、言と幻と現は不可分のものであり、区別することも、分けて認識することもできない。したがって、言と幻と現は、漢字で記述するよりも、げんとげんとげんという形で、ひらがなで記述するのほうが、ヒトにとっての認識を体感しやすいと言える（※きのうの記事で表記された言葉たちが具体的に演じてくれたように、ひらがなの意味の層は「あつい」のです）。

8) 言と幻と現に関しては、各要素に着目すれば「言＝幻＝現＝げん＝げん＝げん」と記述することができ、その各要素のメカニズムの方向性に着目すれば、「言→幻→現←幻＝げん→げん→げん←げん」（※矢印の方向に注意してください）と記述することができる。

【※1)～8)の記述で用いた文体は、断定調ですが、すべてのセンテンスに、「と言えそうです」or「と考えられます」or「ようです」or「みたいです」を、あたまのなかで適宜補って読んでいただくよう、お願いいたします。書かれていることは、ぜんぶ、このアホのでまかせ・妄想です。】

*

以上が、冒頭近くで書いた、

*ヒトにおいて切り離せない＝ヒトが不可分なものとして認識している「もの・こと・現象」たちを、とりあえず「システム」と呼ぶ。

というフレーズの説明です。というわけで、ここまでのくぐくぐした説明から、

*「システム」とは、複数の要素間の「関係＝仕組み＝メカニズム＝働き＝経路＝方向性」を、記述するうえで、ある程度の「有効性」＝「記述の可能性」を備えた、「記述の結果」である。

また、

*「システム」の「記述」を支えるものは「比喩」という仕組み＝働きであり、「システム」に「有効性」が備わっていると判断 or 想定する場合には、徹底した「比喩」の仕組み＝働きの検証を行う必要がある。

と言えそうです。もちろん、これも、でまかせ＝妄想ですので、この

*「システム」の「有効性」における「比喻」の仕組み＝働きの検証の有効性は、検証できない。

と言えます。「言＝言語＝ことば」にこだわると、こうした神経症的状況＝「出口なし」状況＝「行きどまり」状況＝「だめだこりゃ」状況に陥ります。

英語では、こういう状態を

* dead end

と言いますね。The end.

*

この行までお付き合いいただいた方に感謝いたします。どうもありがとうございました。

【※「システムと有効性と比喻」2009-07-17のあとは、ブログを閉鎖し、寝込んでいました。夏バテと、親の介護と、難聴に伴う生活上のストレスが重なって、抑うつ状態が悪化しました。ドクターの指示で、お薬の飲み方を変えたり、書くことをやめて、休養に専念した結果、何とか乗り切ることができました。体質上、強めの薬が飲めないため、毎日ただぼけーっとすることを心がけて休んでいました。】

09.08.01 気になるというか

◆気になるというか

2009-08-01 17:21:13 | でまかせ

気になるというか、ずっとこだわっていることがあります。

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

ということです。たとえば、言葉やお金がそうです。

*言葉もお金も、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」として用いられている。

と言えそうです。

こうした現象＝状況＝事態については、いろいろな人がいろいろな意見を述べて議論しているみたいです。詳しくは存じません。他人様の考えを聞くことが苦手なのです。

*他人様のことは、どうでもいい。

し、

*自分とは関係がない。

という感じなのです。ですから、自分で考えるようにしています。そのほうが楽だし、おもしろいのです。なぜか、こういうたぐいのテーマについて、勝手気ままに考えるのが好きです。眠ることの次に好きです。

で、

*「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いているという現象＝状況＝事態は、ヒトという種（しゅ）の根本にかかわっている。

ように思えてなりません。ヒトが何かを感じたり、考えたり、ボケーっとしていたり、行動したりするさいに、常にやっていることのようにです。たぶん、ふつう、ヒトは意識していませんが、そうしながら生きています。

*そうしないでは、いられない。

または、

*それしか方法がない。

というのが正確な言い方かもしれません。

となると、

*一生をかけて考えるのに値するテーマ

ではないでしょうか。事情があって、無職でこれからも仕事ができる感じではないため、暇つぶしというか、生きていくのを止めるわけにもいかないのです、とにかくというか、

*とりあえず、やってみよう。

というノリで、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

について、考えていきたいと思います。

見通しは立っていません。ですので、

*でまかせに考えていく。

ことになります。

*でまかせ

というと、悪い響きがあるみたいですが、好きな言葉です。そもそも自分には、これしかないからかもしれません。今まで、でまかせにやってきたので、これから先もそうしていこう。そんな感じです。

09.08.02 もう1つ気になることが

◆もう1つ気になることが

2009-08-02 14:24:37 | でまかせ

もう1つ気になることが、あります。

* 数学

に関する事なのです。算数と数学は、大の苦手であまりかかわりたくないし、実際、高校生時代以降はかかわる機会ほとんどなく過ごしてきましたが、気になる存在なのは確かです。

* すごくおもしろそうなのだけど、分からない。

という感じです。だから、数字を使っての操作とか、数学的思考に対する劣等感は強いんです。ああ、何てあたまが悪いんだろう。そう嘆いた、悲しいやら情けない思い出がたくさんあります。

それはそれでいいとして、今、あたまのなかにあるのは、

* 微分

です。微分といっても、今となっては言葉として知っているだけで、その中身については、まったく分からない分野なので、ある1つのことに話を絞ります。

*

微分で、方程式をグラフに描くと曲線になって、その

* 曲線の微小な部分を拡大すると直線に見える。

というような理屈があったように記憶しています。勘違いか誤解かもしれません。だから、自信はないのですが、とにかく、そんなふうな断片的な記憶がありまして、それが気になって仕方がないのです。

なぜ気になるのかと申しますと、

* すごくテキトーに思える。

からなのです。数学に対して、勝手に自分がいだいているイメージを裏切るほどのテキトーぶりなのです。数学って、こんなに感覚的なものでしたっけ。

* もっと冷徹かつ緻密で、感覚などという曖昧なものを排除したガチガチの論理で金縛り＝がんじがらめ状態にある。

ようなイメージを、数学に対してもっているのですが、それは数学が理解できない者の

偏見でしょうか。そうなのかもしれません。いや、きっとそうです。偏見でしょう。数学って、案外感覚的なものなのにちがいない。そんな気がしてきました。だって、そもそも

*ヒトが考えたもの

なのですから。

*

今、PCに向かって文章を書きながら、あたりを見回すと、あちこちに

*曲線

が見えます。たとえば、PCのモニターに映し出されている活字も、直線と曲線から成り立っています。また、PCの脇に家のカギが置いてあるのですが、それには細い紐と鈴がついています。

紐は細い糸を編んだもののようです。その紐が曲線を描いています。虫眼鏡でその紐の曲線部分を拡大してみると、確かに直線に見えます。ここで、大切なのは、

*「見える」

ということです。微分では、方程式をグラフにした場合の曲線を拡大すると、

*「直線になる」

とは言っていなかった気がします。あくまでも、

*「直線に見える」

だったと記憶しています。それ以外のことは、覚えていません。微分というと、そのことだけが、思い出されるのです。「見える」なんて、

*すごくテキトー

じゃ、ありませんか。それとも、そんなことはないのでしょうか。質問できる相手がいないので、どうなのかは分かりません。

*数学の専門家

はどう考えているのでしょうか。学会というかギョーカイに、何か

* 定説

みたいなものあって、テキトー=いい加減=でたらめ=感覚的なんかじゃないよ、と論してくれるのでしょうか。また、数学の専門家以外のヒトは、どう感じているのでしょうか。意見や感想は、千差万別なののでしょうか。

*

連想が働いたらしく、今、思い出しましたが、

* 「限りなく0に近づける」

というフレーズも、あたまに残っています。前後関係は忘れました。数学の授業でよく耳にしたり、目にしたフレーズです。微分だけではなく、数学の違った分野でも見聞きした気がします。物理の授業でのことだったという気もします。

数学も物理も、両方とも苦しくて退屈な授業だったので、混同しているのかもしれませんが。ですから、記憶違いである可能性は高いです。いずれにせよ、もしも数学にそういう言い回しがあるとするなら、これまた、

* テキトー=いい加減=でたらめ=感覚的

な気がします。

* 限りなく

ですよ。詩や宗教や哲学みたいじゃありませんか。言い換えると、

* 無限

です。

*

また、思い出しました。

* 無限大

って言葉がありました。

*∞

なんて立派な記号まであったのも思い出しました。ということは、

*無限小

ってのもあるのかしらん。これはどう考えても、やっぱり、

*テキトー=いい加減=でたらめ=感覚的

なようです。漠然と考えていたことを、こうやって文章にしてみると、ますます、そうした思いが強くなりました。

*

で、

*でまかせ

なのですが、以上のような数学のテキトーぶりは、ひょっとして、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

ということと、

*かかっている=からみあっている=つながっている=かぶっている

のではないのでしょうか。それも、深くかかっているような気がします。根拠はありません。

*でまかせ

です。つまり、

*テキトー=いい加減=でたらめ=感覚的=勘

です。でも、考えてみたいです。おもしろそうです。気になります。

*

で、また、でまかせなんですけど、上で書きましたように、今、

* PCのモニターに映っている活字は、直線と曲線から成り立っている。

みたいなのですが、ディスプレイ上の画像というのは、確か、

* ドットとかいう点、あるいは、画素とかいうものが集まって形をなしている。

とか、いないとかいう話を何かで読んだ覚えがあります。詳しいことは知りません。です。間違っているかもしれませんが、とにかく、そうした前提で話を進めると、さきほど述べました、微分でのグラフ化された

* 曲線の微小な部分を拡大すると直線に見える。

と何やら似ている感じがします。こういう、「似ている」などという根拠薄弱な、

* こじつけ=類推=思いつき=比喩=たとえ=いわゆる1つのでまかせしゅぎ=妄想

には、十分気をつけなければなりません。繰り返しになりますが、早い話が、

* 似ているからというだけの横着

だからです。でも、こういうでまかせって好きです。ついやっちゃいます。やめられません。

*

で、でまかせを続けますが、今問題にしている現象は、いわゆる

* 錯覚=錯視に基づいている

のではないのでしょうか。詳しいことは知りませんが、PCのモニターと同じく画素の集まりであったり、あるいは走査線とかいうものの集まりであったりするテレビの画像は、本来はどうか、一時的にはどうか、

* 「ヒトが感じ取れない時間=瞬間」においては静止画像である

らしいのです。そうした静止した＝

* 「動いていない」

画像を、フィルムをつかった映画と同様の原理で、「1秒間に○コマ」という形で早送りすることによって、

* 「動いている」

つまり、動画と

* 「感じさせる」

仕組み＝仕掛けが働いているという話です。不正確な記述になっている可能性は高いですが、そういうふうに理解しています。

要するに、

* まぼろし＝だまし＝いつわり＝ペテン

だと言えそうです。

で、新聞・本・雑誌に掲載された写真（＝点の集まり）、あるいは、PCのモニターやテレビ画面に映し出された、活字（＝点の集まり）、静止画像（＝点の集まり）、動画（＝コマ送りされた静止画像）が、以上のような錯覚を利用したものであるとするなら、

* ヒトは、日々、物理的レベルで幻（まぼろし）を知覚しながら、いわゆる知的な活動を行っている。

という飛躍した言い方もできそうです。広い意味で、

* ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

の好例とも言えるような気がします。言い換えると、

* ヒトは、自らの欠陥＝テキトーさ＝盲点＝弱点＝限界性を逆手にとって、森羅万象を相手にしている。

ということです。

* 綱渡り

という比喩があたまに浮かびます。

* おととと

という感じです。いずれにしても、

* すごいし、したたか

です。いや、したたかなのかどうかは疑問です。

* 何となく、そうなっちゃった。

のではないのでしょうか。ホモ・サピエンスがこの状態になるまでには、そうとうな年月を経たはずです。試行錯誤の結果＝成果＝「ごくろうさま」というところでしょうか。

*

ところで、さきほどから、何度かつかっている言葉である

* 「まぼろし・幻」

とは、いったい何なのでしょう。ヒトとは切っても切れないつながりがあるようなので、気になって仕方がありません。個人的な定義＝意見＝感想＝でまかせを述べさせていただくなら、

* 「まぼろし・幻・幻想」とは、ヒトにとってのいわゆる「現実・うつつ」にほかならず、ヒトは広義の「言葉・言語・言の葉」（※＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。＞というフレーズの「その「何か」ではないもの」くらいの意味）を用いて互いに伝え合おうと努めている。

ということになりそうです。よく見聞きする「お話＝フィクション＝説＝神話＝紙芝居の台本」です。大切なのは、

* 「努めている」

です。ヒトが個人レベルでいだいている幻を、他のヒトとのあいだで、

* 「伝え合う」

のは、至難の技＝ほぼ不可能であると思われます。何しろ、

* 綱渡り＝おととつと

というトホホな状態＝事態＝境遇にあるのです。ですので、以上述べてきた幻をめぐっての言葉が、これをお読みなっている方に伝わっているかどうかに関しては、

* ほぼ絶望的

である、と言えそうです。でも、これは言葉の発信者からの見方でありまして、

* 言葉の受信者は、それなりに自分の納得のいくように、あるいは、自分の都合に合わせて言葉を受け取る。

のがふつうです。このように、

* 言葉を使えば何とでも言える。

という現実というか幻想というか言葉の有り様（＝ありよう）があり、でまかせしゅぎじっこうちゅうの身には、誠にありがたい状況＝状態＝常態＝事態＝有様（＝ありさま）なのであります。

*

で、微分において、方程式をグラフ化した

* 曲線の微小な部分を拡大すると直線に見える。

という気になる問題は、依然として気になりますが、これから先、何とか

* でまかせで考えていく

方法しか持ち合わせておりません。とはいえ、どうやら、言葉を使えば何とでも言えるようなので、

* 「まぼろし・幻・幻想」＝「現実・うつつ」＝「言葉・言語・言の葉」（※この3者が、なぜ「＝」で結ばれるのかは、おいおい説明していきます）

という、きわめてテキトーな図式＝チャート＝見取り図＝でまかせ図をにらみ、念頭に

置きながら、引き続き、ぼちぼち考えていくつもりです。

09.08.03 さらに気になることが

◆さらに気になることが

2009-08-03 13:45:12 | でまかせ

さらに気になることが、1つあります。これも

*数学

と関係があります。よりもよって、なぜ数学なのでしょう。なにしろ半端じゃなく苦手な科目でした。数学の授業を受けていた中学・高校生のころ、さっぱり理解できなかったのです。

どうして、分かりもしない数学の領域に関するテーマやトピックが、今も気になったり、その種のことにこだわったりするのか、不思議です。数学の授業で見聞きした断片的なフレーズやイメージが、どこか（※たぶん脳でしょうけど）に残っているらしくて、ときどき不意にあたまたに浮かんで、しばらく去らないという感じです。

で、

*微分におけるグラフの曲線

の話というかイメージに加えて、さらに

*確率

が気になって仕方ありません。正確に申しますと、

*確率・統計・行列という言葉とイメージが気になる。

のです。気になるのは、今挙げたそれぞれの領域というか分野の内容ではありません。ぜんぜん、授業が理解できなかったのですから、その内容など論じることはできません。

恥ずかしい話、赤点、つまり 20 点以下しか取れなくて、校長室で再試験を受けるように指示されて、何とか単位をもらっていました。その再試験も、わけが分からないものでした。よく覚えていないのですが、あれは、

*形式的な救済策＝形だけの儀式≠「再試験」

だったのではないかと、今になって思います。当時の数学の先生に、感謝すべきなのでしょう。

ですので、今、書こうとしているのは、「確率」と申しまして、

*あくまでも「確率」という言葉と、「確率」についての個人的なイメージ

をめぐってのお話なのです。

*

で、本題に入ります。

悪態みたいな言い方になりますが、そもそも

*確率・統計なんてテキトーな響きのある分野が、数学という「学問」に存在していること自体が不思議だ。

と思えてなりません。

ところで、ここでお断りしておきたいことがあります。たった今、確率・統計について、

*テキトー

という言葉をつかいましたが、個人的には

*いい意味

でつかっています。微分に関しても同じです。

*でまかせ

は言うまでもなく、

*いい加減＝でたらめ＝感覚的＝勘＝直感＝直観＝行き当たりばったり＝成り行き任せ

といった一連の言葉たちにも、愛着を感じています。ですので、微分にしろ、確率・統計にしろ、その親＝親分らしき数学にしろ、テキトーだと言っているのは、

*褒めている

というか、

*感動している

のです。もうお気づきになられたと存じますが、このブログでは、どちらかというど、

*偏屈でへそ曲がり

な視点から言葉をつづっております。お読みなる方に誤解されるだろうな、と心配しつつも自分なりの言い回し＝言葉遣い＝文体＝スタイル＝スタンス＝タラッタラッタラッタウさぎのダンスで、言葉をいじっています。

で、今、問題にしているのは、愛すべき

*テキトー＝いい加減＝でたらめ＝感覚的＝勘だより＝直感的＝直観的＝行き当たりばったり＝成り行き任せ

といった言葉で飾られるはずの操作＝作業＝手仕事＝お遊びが、なんだか

*いかめしい＝威張った＝冷たい＝上から目線の＝傲慢な

衣をまとって、語られて＝騙られているような気がするということなのです。これは、

*「好ましい＝快い＝気持ちいい＝楽しい」「状態＝状況＝環境」ではない

と、個人的に感じております。

*

*「テキトー=いい加減=でたらめ=感覚的=勘だより=直感的=直観的=行き当たりばったり=成り行き任せ」

という、

*ヒトという種(しゅ)の存在と行動の習性=特性=属性=惰性=性癖=傾向

を、

*的確に=正確に=うまく=ぴったりと表している言葉・イメージ

があるにもかかわらず、

*「いかめしい=威張った=冷たい=上から目線の=傲慢な」「衣=衣装=虎の毛皮のパンツ=虎の威」を、まとわせて誤魔化すのはやめよう。

という感じです。

*

で、話をもどします。

確率・統計は、物理学とも関係しているみたいです。

*神様がサイコロを振っているわけがない

とか何とか、よく覚えてはいないのですが、そんな意味のことを、

*ある物理学者がわめいていた

らしいという噂を聞いた記憶があります。前後関係が思い出せませんし、たった今書いた「神様がサイコロを振っているわけがない」というフレーズが、果たして正確な記憶かどうかもおぼつかないのですが、とにかく気になって仕方ありません。

だったら、調べればいいじゃないの。キーワードを工夫すれば、ネット検索できるはず。そうお思いになる方もいらっしゃるにちがいありません。でも、調べるのは嫌なんです。あたまのなかでわめいている物理学者の名前は、覚えているのですが、そうした手掛かりをもとにネットで検索したくはありません。

なぜかと申しますと、

*実際はどうだったかには興味がない。

からなのです。

*「正しい」vs.「正しくない」は、どうでもいい。

と言ってもよさそうです。

*出るに任せて出てきた記憶・言葉・イメージのほうが、真偽や正誤よりも、ずっと大切だと思っている。

とも言えそうです。ですので、あえて固有名詞は出ませんでした。

いったいどういう神経をしているのか、とお思いの方もいらっしゃるでしょう。ですので、ここで、自己弁護＝弁解＝開き直りをさせてください。

自分にとって大切なことを考えたり、言葉としてつづるにあたって、心がけているのは、

*死の間際の心境でいたい

という姿勢＝覚悟＝スタンス＝おたんこなすです。「死の間際」というのは、もちろん比喩というか、イメージ＝想像＝妄想です。自分がどんな死に方をするかは、ふつう予想できません。ただし、

*自ら死を決意して、死に臨むとするならば、死の間際に、何かを考えたり、何かを書き残すだけの余裕があるかもしれない。

とは言えるような気がします。そんな

*仮定＝想定に近い、想像＝妄想

という感じなのです。分かっていたらでしょうか。

その「仮定＝想定に近い、想像＝妄想」に、まさに「仮に」身を置いてみると、「死の間際」という「仮の」比喩＝たとえが、現実味を帯びて感じられてきます。「たとえる」という言葉の親戚らしい「たとえば」という言い方が、「例示」のほかに「仮定」の意味をもっていることから、お分かりになると思いますが、

*たとえ＝比喩は、想像＝妄想とかなり近い「意味合い＝意味の位置関係」にある。

みたいです。

で、「死の間際」という発想ですが、これは、現在の自分が置かれている精神的および身体的状況と、経済的な状態および社会的な環境といった要因から導かれるものです。

結論から申しますと、これから先、自分が仕事をして食べていくことはかなり難しいし、しんどい。その困難と苦しさに耐える自信はまったくない。突発的な出来事がないかぎり、ゆるやかに最後の瞬間に向かっていだけ。そんな感じです。

*「なしくずしの死」

という小説のタイトルが思い出されます。で、自分が、

*死の間際に、PCのモニターを見ていたり、キーボードを叩いていたり、紙切れにボールペンで何かを書きつけている。

という状況は想像しにくいです。そうはいつでも、

*死の間際におよんでも、何かを考えていたい。

というのが、せめてもの願いです。そのときには、おそらく、PCも、ペンもなく、ただ目を閉じて、

*考えている＝思いにふけている＝夢をみている＝ぼけーっとしている＝もうろうとしている

つまり、自分を意識、あるいはぼんやり意識しているか、または無意識、もしくは意識不明・昏睡状態の境地に

*「いる」＝「ある」

だけでしょう。

*死の間際の心境でいたい

という思い＝スタンスは伝えるのが難しいです。

今、でまかせで浮かんだ比喩＝たとえですけど、

*夢

を例にとるといいかもしれません。

夢のなかでは、自分の思いやイメージがすべて肯定されます。夢のなかで、自分の考えていることの真偽や正誤を確かめるために、辞書を引いたり、事典をめくったり、ネット検索しようという気になるヒトは、ほとんどいないのではないのでしょうか。そんな感じですよ。だから、上述の物理学者については調べません。

*

話をもどします。

*「神様がサイコロを振っている」とは、宇宙が圧倒的な偶然性に支配されている。

という意味だと、仮定して＝たとえてみましょう。また、

*確率・統計とは、偶然性を数量化する作業である。

ということにして話を進めてみましょう。すると、

*確率・統計とは、「限りなく」お遊びに近い作業である。

みたいに感じられます。飛躍すると、

*数学や物理学とは、一般にイメージされている学問から「限りなく」遠くに隔たった一連の作業である。

ように思えてきます。

粗雑＝杜撰（ずさん）＝いかがわしい＝胡散（うさん）くさい言い方＝考え方ですね。でまかせで言っている＝書いているから当然です。で、

*でまかせとは、「神様がサイコロを振っている」＝「神様は賭け・ギャンブルをしている」、つまり「宇宙が圧倒的な偶然性に支配されている」に、全面的に負ける＝負かせる＝任せることである。そして＝だから、ヒトはでまかせに生きることを免れることはできない。

と言いたいです。どうしてかと申しますと、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

みたいで、さらに言えば、

*「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いているという現象＝状況＝事態は、ヒトという種（しゅ）の根本にかかわっている。

からでして、たとえば、

*曲線の微小な部分を拡大すると、ヒトには直線に見える（「何か」⇒「その「何か」ではないもの」）。

し、

*点からなる静止画像をコマとして早送りするすると、ヒトには動いているように見える（「何か」⇒「その「何か」ではないもの」）。

し、

*数学と物理学においては、数量化（「何か」を数量に置き換えること）という作業を大前提にしている（「何か」⇒「その「何か」ではないもの」）。

ようなので、やっぱり、

*「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いているという現象＝状況＝事態は、ヒトという種の根本にかかわっている。

みたいで、もっと短く言うなら、けっきょく、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

らしいからなのです。

問題は、「何か」が何かということです。たぶん、

*万物、あるいは森羅万象

ということになりそうです。さきほど書きました、

*数学や物理学とは、一般にイメージされている学問から「限りなく」遠くに隔たった一連の作業である。

とは、

*ヒトが「何か」の代わりに用いている「その「何か」ではないもの」と言うときの、「何か」とは森羅万象である。

という考え方＝意見＝お話＝紙芝居の筋書き＝でまかせを前提にしています。

*

ここで、きのうの記事の最後のほうでご紹介した、きわめてテキトーな図式＝チャート＝見取り図＝でまかせ図である、

*「まぼろし・幻・幻想」＝「現実・うつ」＝「言葉・言語・言の葉」（※この3者が、なぜ「＝」で結ばれるのかは、おいおい説明していきます）

に、少々変更を加えてみます。すると、

*「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」＝「げん・現・現実・うつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」＝「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」＝「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」（※この4者が、なぜ「＝」で結ばれるのかは、おいおい説明していきます）

となりました。あくまでも、出るに任せて出てきた、でまかせです。

09.08.04 できないのにできる

◆できないのにできる

2009-08-04 16:32:26 | でまかせ

できないのにできる、と思いきむことができるのが、ヒトという種（しゅ）の強さ＝たくましさ＝厚かましき＝頑固さ＝したたかさ＝鈍感さだと感じています。もちろん、自分を棚に上げたり、脇に置いたりせずに、ど真ん中にすえたうえで、土下座をさせての話です。

このブログにおいて、金太郎飴のように切っても切っても出てくる、例のおなじみのフレーズを、また出します。

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

です。

出たあ。また？ 勘弁してよ～。

という感じですね。でも、金太郎飴なのは、ヒトにとって日常茶飯事なのです。常態という状態です。この金太郎飴常態を取り除いてしまえば、ヒトはヒトでなくなる、つまり「ひとでなし」になってしまうくらい、日常的な状況なのです。

要は、この

*金太郎飴的状况＝常態を、どうやって金太郎飴的ではないように自分をだます＝誤魔化す＝ペテンにかける＝錯覚させるか

ですが、悩む必要はありません。

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている、という状態＝常態を忘れるようにできている。

みたいです。ほとんど誰もが、気にせずに生きています。現に、みなさんは、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

なんて、ふだんはぜんぜん意識もしないし、まして気にもかけないのではないのでしょうか。ですので、このブログでは、この金太郎飴状況についてわざと繰り返して触れ、みなさんに思い出していただくと考えております。

*おせっかいは、よしてよ。

とか

*誰も、あんたに頼んでなんかいない。

と言われれば返す言葉がありません。確かに、おせっかいです。頼まれてもいません。ただ、

*自分にとって、非常に気になる問題

なので、

*ひょっとして同じように気になっている方がいらっしゃれば、いっしょに考えてみませんか。

という感じ＝ノリでもあります。

*

で、

*できないのにできる、と思いきむ

に話をもどします。

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

とは、

*ヒトは道具を用いる。

という習性と「関係がある＝ほぼ同義である」ように思えます。ところで、

*道具って何

でしょう？

*○○とは何か

について考える場合、辞書や事典で調べるほかに、

*○○の類語や同義語と呼ばれる言葉

を集めて並べてみる方法があります。また、○○の語源を調べてみるやり方もあります。

いずれの場合にも、言い換えるわけですから、

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。＞という状況＝状態＝常態と似たような作業になる。

と思われます。そもそも「常態」という言葉をつかっている以上、何をやっても似たような作業になるのは、当然なのかもしれません。

* AはXをYすることである。

とか、

* AはBとほぼ同じ。Cともいう。

という具合です。

よく考えれば当たり前です。

* AはAである。Aともいう。

なんて、辞書に書いてあったら、本屋さんを通して出版社に返品してもらうのが筋です。

* 「落丁本・乱丁本はお取り替えいたします」

とよく辞書の奥付に記してありますが、「お取り替え」など不要ですね。もしも、返品を拒否されれば、

* 裁判を起せばいい

でしょう。きっと勝てると思います。ついでに慰謝料もたくさんふんどくりましょう。

*

で、

* 道具って何

ですが、辞書で調べるのも気が進まないのです、道具の「類語＝親戚または兄弟姉妹の言葉」を、思い浮かべてみます。まず、

* 器具

とか、

* 手段

という言葉があたまに浮かびます。

器具の「うつわ・器」という文字からは、お茶碗とかお皿が連想されます。「衣食住」なんて、ヒトにとっての基本的なものをひっくるめた言い方がありますが、ヒトっていやしい＝食い意地が張っていますから、納得できます。

手段という文字をながめていると、自分の場合、「手」という文字が目につきます。そういえば、英語では武器を arms と言いますね。「腕＝ arm 」という一致が気になって高校生時代に英和辞典を引いたことがあります。すると、別項で取り上げてあって、直接には関係なさそうだったので、がっかりした覚えがあります。

日本語でも腕力という言い方があるので、敵と戦うときに腕だけでは足りずに、腕の代わりになるもの、つまり武器という道具をつかったことから、

* 腕 ⇒ 武器となった

と考えたほうが、リアル＝もっともらしいとお思いになりませんか。このブログでは、「腕⇒武器」というこじつけを採用します。

* 「正しい」vs. 「正しくない」

なんてどうでもいいと思っています。

* 「自分にとってピンとくる」vs. 「自分にとってピンとこない」

のほうがずっと大切な判断基準です。こういうテキトーなスタンスが、きのうの記事で書いた、

* 「死の間際の心境」 = 「夢のなかでの全肯定」

です。

*

そんなわけで、

* 腕 ⇒ 武器

と考えると、「手段」の「手」ともつながり、

* 手 ⇒ 腕 ⇒ 器

と、こじつけることができます。

* 「道具」「器具」の「具」は、「具える・そなえる」 = 「用意する」

という感じでしょうか。

ここで注目すべきことは、

* 手 = fingers + hands + arms + shoulders の特権的な地位 = 位置 = 役割

です。ヒトという種にとって、手先が器用なことが、この惑星で大きな顔をするのに役立つことは、古今東西のいろいろなヒトが指摘してきたみたいです。なにしろ、

* 両手を合わせて指を曲げる

だけで、「器」になります。すると、水を救うことができます。

テレビで、おサルさんが川や水溜りの水面に口を寄せて、ちょびちょび水を飲んでいった光景を思い出します。また、木の実を1個片手に持って、あるいは両手に1個ずつ持って食べていたような記憶もあります。ヒトだったら、集めてきた木の実を、両手を合わせた「器」にてんこ盛りにして、むしゃむしゃ食べることができます。

おそらく太古のヒトは、そうやって食べることもあったにちがいありません。道具の発明 = 登場までは、あと数歩です。

* 両手を合わせた「器」とそっくりな形状のもの

を、大きな葉っぱを折り合わせるなり、尖った石（※これはもう立派な石器ですね）で木切れを彫るなり、土をこねて固めるなりすれば、

*道具としての器

ができあがります。

衣食住のなかでももっとも基本的なのは食だと思われませんが、上で述べたように手先がものすごく器用なヒトは、自然界に存在する多種多様な食べ物（＝食べられそうな物）を摂取する能力を備えて（＝具えて）いたのです。つまり、

*雑食できる下地が整っていた。

と言えそうです。

*ヒトは、節操がないくらい雑食が可能なので、節操がないくらい雑食性になった。

のか、と想像＝妄想してしまいます。実際、ヒトっていろいろなものを食べますよね。よく考えると、恐ろしくなります。ヒトまで食べますよ。それはさておき、雑食という特性は、ヒトが、

*できそうなことをするようになった。

一例と言えそうです。

*やればできるみたい。

というノリでしょうか。とするなら、

*できそうなことをしよう。

とか、

*やればできる！絶対にできる！思考は実現する！

までは、ほんの数歩ではないでしょうか。実際、そうなったみたいです。

*ヒトは、自分ができそうなことは、たいていできると確信するようになった。

と考えられます。ヒトのすごいところは、

*できそうなことをできるようにするために、道具＝他者（自分以外の森羅万象の一部）＝「自分の身体の一部の代わりになるもの」をつかうようになった。

ことです。これには、

*工夫＝考えること＝知恵＋経験＝いわゆる「脳・あたま」を働かせる。

が必要です。ところで、みなさん、脳にいいことだけを、じっこうなさっていらっしゃいますか？ 例の本に書いてある、でまかせ以外に（失礼！）。

話を進めます。

*

*○○は道具（※あるいは、手段）である。

とか、

*○○という道具（※あるいは、手段）

と比喩的にいう場合があります。比喩のなかでも隠喩に近いつかい方みたいですが、そういう言い方をすると、

*比喩としての道具＝一見道具ではないように思われる道具＝どちらかという抽象的な手段

を並べ立てることができそうです。つまり、さきほど書きました、

*類語＝親戚または兄弟姉妹の言葉を、思い浮かべる

という方法を実践できそうです。では、やってみます。出発点＝スタートライン＝第一のフレーズは、

*＜道具（※あるいは、手段）＞は道具（※あるいは、手段）である。

および

*＜道具（※あるいは、手段）＞という道具（※あるいは、手段）

です。これじゃ、さっきの、インチキ辞書の

* AはAである。Aともいう。

とほぼ同じじゃないですか〜。よく考えれば当然のことです。気にしないでいきます。たとえば、

* 言葉・言語・英語・手話・数字・記号・論理・神話・お金・貨幣・市場経済・投資・ビジネス・マーケティング・嘘・権力・腕力・喧嘩・戦争・殺人・自殺・犯罪・愛・恋愛・結婚・癒やし・地位・肩書・裁判・法律・選挙・政治・マスコミ・メディア・新聞・テレビ・ケータイ・電話・ネット・デジタル化・電子化・ナノテクノロジー・バイオテクノロジー・IT・メール・ゲーム・手紙・ブログ・SNS・文字・活字・書籍・出版・印刷・音楽・写真・映像・映画・学問・知識・知性・論理・数学・占い・経済学・スピリチュアリティ・医学・宗教・科学・教育・時間・身体・感覚・知覚・脳.....

といった言葉を思いつきました。上でもお断りしましたが、どちらかという、手で触ることができない抽象的なものばかりを挙げてあります。明らかに道具だと考えられる、手で触ることが可能な、PC、時計、カメラ、100円玉、ペンなどは含めませんでした。ですので、リストのなかにある、

* 「新聞」は「新聞紙」ではない

また、

* 「ケータイ」は「ケータイという器械」ではない

とご理解願います。

*

さて、食器・工具・武器・寝具などの明らかに道具だと考えられるもの以外で、

* 道具＝手段と考えられるもの

を列挙しましたが、やっぱりこのブログの金太郎飴に行き着くようです。

* ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

上のリストに挙げたものは、抽象的な手段ばかりですが、見方を変えると、

*システム＝体系＝仕組み＝仕掛け

と呼ぶこともできそうです。ここでいう、

*システムとは、ヒトがつくりだした、複数のもの・こと・現象の関係性である。

と考えてみます。また、

*システムのなかにシステムがあったり、同種あるいは異種のシステム同士が関連し合っている場合もある。

とも考えてみます。さらに、

*システムには、何らかの目的＝役割＝機能を担い、それを達成＝実現させるために、特定の＝限定的な、整合性＝必然性が備わっている。

という特性は、システムのいわば存在理由であり、もっとも重要な属性だと考えましょう。もう1つ重要な条件があります。それは、

*システムを成立させ、機能させるために、ヒトは「記述」という方法に頼らざるを得ない。「記述」とは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いるという仕組み＝システムと同義である。

です。

以上挙げたシステムの特徴は、ペンという道具、新聞紙という製品、ケータイという器械、パソコンという機械、自動車という機械、ミサイルという武器、宇宙船という機械など、手で触ることができる具体的な道具＝器具＝器械＝装置＝機械にも、当てはまりそうです。

*ヒトがしゃかりきになってつくったものは、出来の良し悪しはあるが、ほとんどがシステムである。

と言えそうです。

*

話を、冒頭の

*できないのにできる、と思いきむことができる

という、

*ヒトという種の強さ=たくましさ=厚かましさ=頑固さ=したたかさ=鈍感さ

にもどします。

*ヒトは、依然としてできないことはできない。

にもかかわらず、

*できないことをできる、と思いきんでいる。

と言いたいのです。どういうことかと申しますと、

*ヒトは、月に仲間を送りこみ、月面を歩かせた。

というお話=フィクション=言葉=神話を思い出してください。「お話=フィクション=言葉=神話」を「事実」なり「真実」と読みかえていただいても、いっこうにかまいません。事態は変わりません。見方が異なるだけです。

それはさておき、

*ヒトが、月に仲間を送りこみ、月面を歩かせた。

というフレーズ=言葉は不正確な記述です。

*ヒトという種のうちのごく一部がつくった宇宙船が、ある特定のヒトを搭載し、月に至り、そのヒトがさまざまな機械・器械・道具をつかって月面を歩くという目的を達した。

というべきだと思います。

*月面に着陸したのは、機械・器械・道具であって、ヒトではない。

という点が決定的に重要です。これは、

*〇〇さんが、自動車ですーパーに行った。

が、

*○○さんを、乗せた自動車がスーパーに行った。

という状況と変わりません。もっと単純な例を挙げますと、

*□□さんが、ボールペンでノートに文字を書いた。

が、

*□□さんの手で動かされた、ボールペンの先のインクがノートの紙面に染みをつくった。

という状況と変わらないのと同じです。つまり、

*ヒトは道具＝手段を用いて、自分の代わりに、ある何らかの目的＝役割＝機能を実現させようと努力する（※「努力する」とは「失敗もある」という意味である）。

あるいは、

*ヒトは道具＝手段を用いて、ある何らかの目的＝役割＝機能を代行させようと努力してする（※「努力する」とは「失敗もある」という意味である）。

と言えそうです。

*

ヒトという種は、自分だけでは、もっとも自分に近い、他の種類のおサルさんたちと同程度の行動しかできません。ひょっとすると、

*他のおサルさんたちより、ひよわい＝脆弱（ぜいじゃく）

かもしれません。ヒトの赤ちゃんを見ていると、そう思わないではいられません。赤ちゃんではなく、ヒトのオトナでもいいです。

*無人島とか、樹木の奥深くに、ヒトが1匹というか1人、いや10人でも、100人でもかまいませんが、置き去りにされた。

と仮定してください。生きていけるでしょうか。

もちろん、

*公正を期して、野生のおサルさんと同じ状態=条件で

です。ケータイも、時計も、衣服も、備蓄した食料もなしです。蛇足ですが、素っ裸という意味です。当然のことながら、裸足です。そもそも何歩、歩けるでしょう。

*ひよわい=脆弱=よるべない=なさけない=トホホの極致

では、ないでしょうか。

それにもかかわらず、ヒトが、

*この惑星の支配者のような気持ちになっている

のは、

*できないのにできる、と思いきむことができる。

という、この惑星の生物のなかでは類まれな特性を備えているからだ、と考えられます。

*

ヒトの、とほうもなく誇大な自信を支えているのは、

*代わりにやらせる

という方法=手段=仕組み=仕掛けです。単純化した言い方をすると、

*自分がやるのではなくて、何かにやらせる。

です。これもまた、このブログの金太郎飴である、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

という仕組み=システムと、深く結びついている=からんでいるからではないか、と想像=妄想しております。以下に、2つの立場からの「論争=悪態のつき合い」を想定してみます。

*「ヒトが操縦したから宇宙船は月に着陸したんじゃないの。ヒトがいなければ、宇宙船はうごかない」vs.「宇宙船なしでも、月に着陸できません。ヒトと宇宙船は対等です」

*「ボールペンが勝手に文字を書くわけがないでしょ」vs.「書く道具なしにヒトは文字を書けません。ヒトがいてペン先が文字を描くように、ペンがあってヒトは文字を書くのです」

*「いつか、自動車が自動的にヒトを目的地に運んでくれる日が来るだろう。大したものだ」vs.「大したものって機械のことですか。ヒトが機械に負けた、ヒトはもう要らないという意味ですか」

以上の「想定バトル＝想定罵倒る」を事務的にまとめると、以下のようになりそうです。

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる＞というとき、ヒトと、＜「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる＞という、匿名的な＝非人称的な＝ニュートラルな、仕掛け＝システムとの間に、主従の関係を決定することはできない。

で、

*できないのにできる、と思ひこむ

については、次のように記述することも「できる」ような気がします。

*

*「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」

＝「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」

＝「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

＝「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かける・翳る」

＝「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

(※以上の5者＝グループが、なぜ「＝」で結ばれるのかは、おいおい説明していきます)

そうです。これは、きのうの記事の最後のほうでご紹介した、

*きわめてテキトーな図式=チャート=見取り図=でまかせ図

の変更版≠改良（改正）版です。1グループが加わり込み入ってきたので、見やすいレイアウトに変えました。言うまでもなく、今回の図も、あくまでも、でまかせです。

09.08.05 何もないところから

◆何もないところから

2009-08-05 16:58:58 | でまかせ

何もないところから、何か生まれるなんてあり得ない。そんな意味のことを、これまで何度か見聞きしたことがあります。

漢語系の言葉をつかうと、

*無から有は生じない。

みたいに言うことができ、大和言葉系の言葉をつかえば、

*何もないところから何かが出てくることはない。

と言えそうです。いずれにせよ、

*ヒトにとって、言うことはできても、確かめたり、知ることはできないたぐいのことである。

と考えられます。なにしろ、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

のです。真偽を知ろうとするは諦めたほうが、潔（いさぎよ）いと思います。でも、古今

東西を問わず、知ろうとする人たちが必ずいるみたいです。

ただ、おもしろいのは、

*何もないところから何かが出てくることはない。

と、このブログの金太郎飴的ワンパターンフレーズである

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

とが、深くかかわっているようだということです。

*何もないところから何かが出てくることはない。

というフレーズは言葉ですから、ヒトはそのフレーズに

*「意味」を見いだす

のが、ふつうです。その「意味」というものが曲者でして、実に胡散（うさん）くさくて、いかがわしく感じられます。

*「意味」

とは「何・なん」なのでしょう？

*「なん = none = ない」

のではないのでしょうか。

もしも、

*「意味」というものが「ある・有る・在る」とするならば、

*「ヒトのあたまのなか＝想像＝妄想＝空想＝フィクション＝話＝言葉＝言・げん＝げん・幻＝げん・現＝げん・限＝げん・原＝げん・Gen」に、

*「ある・有る・在る」

ような気がします。

いやー、実に胡散（うさん）くさくて、いかがわしい記述ですね。補足説明として、ここで、きょうの、

*きわめてテキトーな図式=チャート=見取り図=でまかせ図

をご紹介します。

*「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」

=「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」

=「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

=「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かける・翳る」

=「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

=「げん・Gen・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

(※以上の「」にくくられた6グループが、なぜ「=」で結ばれるのかは、おいおい説明していきます)

きのうのバージョンに、1グループ追加しました。でまかせ図なので、でまかせで書いているのですが、ぶっちゃけた話、本気で書いてもいるのです。かなりマジです。あやういですか？

*

話をもどします。

*何もないところから何かが出てくることはない。

と、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

とが、深くかかわっているようだという話でしたね。

*なにもないところからなにかがでてくるということはない。

という大和言葉系バージョンを、

*無 (Mu) から有 (Yu) は生 (Sho) じない。

という漢語系バージョンにして考えてみましょう。もちろん、でまかせで、やってみるのですが、何かできそうな気がしますので、どうかお付き合いください。

さきほど、

*意味なんてものはなくて、あるとすれば、ヒトのあたまのなかにしかない。

という意味のことを書きました。ヒトのあたまのなかだけの話だとするなら、やっぱり、

*ない=無=む= Mu = M+U = むっ+う = 無+有 = 0 + 有 = 有=ある

ゆえに、

*ない=ある

つまり、

*「無=有」 or 「無→有」 or 「有→無」

すなわち、

*すべてでたらめ=ぜんぶでまかせ=何とでも言える=色即是空=空即是色

と考えるほうが、妥当に思えます。

*

ここで、お断り=申しわけ=弁解=言いわけをさせてください。

きょうの記事では、さきほどからさかんに、胡散(うさん)くさい=いかがわしい=怪しげな=尋常ではない、書き方をしていますが、もちろん、わざとやっております。でするので、どうか説明させてください。

1) 言葉を用いれば、何とでも言えるし、何とでも書けてしまう。

2) 言葉が書けてしまうということは、いわば賭けをしているのであり、何かが欠けているからにはかならない。

という状況を、言葉たちに演じて「もらっている」＝演じて「いただいている」のです。

*言葉が道具＝手段である

ことは、きのうの記事で書きました。また、記事の最後のほうで、

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる＞というとき、ヒトと、＜「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる＞という、匿名的な＝非人称的な＝ニュートラルな、仕掛け＝システムとの間に、主従の関係を決定することはできない。

とも書きました。もっと正確に言うと、

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる＞

というとき、

1) ヒトと、ヒトが「何か」の代わりに用いる、「その「何か」ではないもの」という匿名的な＝非人称的な＝ニュートラルなもの

との間にも、

2) ヒトと、＜「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる＞という、匿名的な＝非人称的な＝ニュートラルな、仕掛け＝システム

との間にも、

*主従の関係を決定することはできない。

となります。

言葉を例にとって、具体的に説明します。

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「言葉」を用いる＞

というとき、

1) ヒトと、「言葉」という、匿名的な=非人称的な=ニュートラルなもの

との間にも、

2) ヒトと、＜「何か」の代わりに「言葉」を用いる＞という、匿名的な=非人称的な=ニュートラルな、仕掛け=システム

との間にも、

*主従の関係を決定することはできない。

となります。なお、

*「匿名的な=非人称的な=ニュートラルな」とは、ヒトが生み出した=作り出したものが、ヒトが生み出していない=作り出してないものと同様に、ヒトの思わく=意図とは無関係な状態にあるという意味である。

ということです。

以上のことを言い換えると、

*ヒトが作りだした、「何か」の代用品=道具=手段である「言葉」は、ヒトの思わく=意図を超えたものとして存在し機能する。また、ヒトが、「何か」の代用品=道具=手段をつかうという行動=現象=仕組みも、ヒトの思わく=意図を超えたものとして存在し機能する。

となります。

*言葉たちに演じて「もらっている」=「いただいている」

とは、そうした事情から書いたフレーズなのです。お分かりいただけただけでしょうか。

*言葉たちに演じてもらっているとか、演じていただいていると言っても、言葉を書いているのは、あなたではないですか。

と反論したい方がいらっしゃるにちがいません。

確かにそうです。でも、さきほどの、とちくるった怪しげな文章は、いわば、

*サイコロを振る (※「骰子一擲 (とうしいってき)」なんて言い方もあります)

ようにして、

*出てきた「目」(※サイコロの「目」)

である

*言葉の「表情=表層、動き=方向性、めくばせ=合図」

を見ながら、それに合わせて、つづった=紡いだ=書いた結果なのです。

もちろん、言葉が自然に出てきたわけではありませんから、言葉との

*合作=共演=競演=饗宴=共同作業=コラボレーション

という感じです。言葉の「表情=表層、動き=方向性、めくばせ=合図」などを無視して、こちらが主導して強引に書けば、あのような怪しげで=いかがわしい文章には、ならなかつたらうと思います。

今述べたような言葉のつづり方を、このブログでは、

*でまかせしゅぎ

と、とりあえず呼んでおります。

*「論理的に書く」「筋道を立てる」「系統立てる」「読むヒトにとって分かりやすく書く」

といった、「論文の書き方」とか「作文技術」とか「文章読本」のたぐいに出てきそうな、一連の

*美辞麗句=きれいごと=嘘っぱち=絵に描いた餅=砂上の楼閣

とはかなり隔たった書き方です。むしろ、

*賭博=賭け=ギャンブル=ばくち=一か八か=よーござんすか〜? =骰子一擲 (とうしいってき) =コロりんこ……。出たあ〜!

にかなり近い書き方です。

*

話をもどします。

*何もないところから何かが出てくることはない。

あるいは、

*無から有は生じない。

と、

*ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

とが、深くかかわっているようだという話でしたね。

で、話をややこしくしないために、大和言葉系バージョンを採用して説明を続けます。

*何もないところから何か「出てくることはない」

というフレーズの意味こそが、まさに

*何もないところから何か「出てくる」にほかならない。

と言えます。どうということかと申しますと、上述のフレーズの

*意味は、ヒトにとってのみ「意味がある」

ということなのです。蛇足ですが、

*「意味とは何か」なんて考えても答えは出ないというか、意味はない。

のであり、

*ヒトだけにしか意味のない「意味」とは、ヒト以外にとっては「無意味」であり、その意味では、ヒトはいわば「何もないところから何かを「出している」＝「無から有を「生じさせている」」。

と言えそうです。

* 「何もないところから何かを「出している」 = 「無から有を「生じさせている」」

なんて、

* テキトーな = ふざけた = 荒唐無稽な = いかかわしい = 胡散くさいこと

が可能なのは、

* ヒトがつくった、あるいは、太古に脳に起こったとてつもないズレの結果としてヒトが獲得してしまった、言葉という道具 = 手段

と、

* ヒトの想像力 = 創造力 = 妄想力 = 「何もないところから何かを「出すことができる」」
という確信・妄信 = 「無から有を絶対に「生じさせてやる」」という執念・妄執

とが、

* 相乗作用を起している = 共犯関係にある = ぐるになっている = グル (guru) になっている

からではないでしょうか。

*

以上を単純化すると、

* < 「ない・無」 ⇒ 「ある・有」 > = < 「何か」 ⇒ その「何かではないもの」 >

となり、やっぱり、

* ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

と言えそうです。

09.08.06 めちゃくちゃこじつけて

◆めちゃくちゃこじつけて

2009-08-06 15:22:25 | でまかせ

めちゃくちゃこじつけて、こじつけまくるとというのが、このブログのやり方なのですが、個人的には、

*こじつけ

とは、ヒトという種（しゅ）がごく自然に＝日常的に＝しょっちゅうやっている、作業＝行為＝行動＝習性ではないかと感じております。ですので、このブログで実行中のこじつけと、ヒトという種の行っているこじつけとの間には、大差はないと思われます。

差があるとすれば、

*確信犯か、うっかり犯かの違い

くらいでしょうか。このブログでは、こじつけを、

*方法＝方策＝方便＝戦略＝作戦＝企み＝悪さ＝はかりごと＝「えへー、すんまへん、うっかりやっちゃいました（※実は「うっかり」なんかじゃない）」

としてやっているのですが、きのうの記事で書きましたように、

*でまかせしゅぎ

をじっこうしていますので、何が出てくるのか、どういう展開になるのかは、その都度、言葉というサイコロを振った結果出てくる、

*目（※サイコロの目です）次第

なのです。そういえば、

*目・め

は、

*眼・め

とも書けますね。で、

*眼・がん・げん

とも読めるようなので、さっそく、きょうはめっちゃ早いですが、

*でたらめ図の更新

を行いたいと思います。こんなに早く来るとは思いもしませんでした。なんていうのは、

*嘘

でして、これって、

*やらせ＝八百長＝出来レース

なんですけど、きっと、みなさんは、すでに、薄々気が付かれた＝やれやれと気が疲れたことと存じます。

*

で、このブログで恒例化してきた、

*きょうの「きわめてテキトーな図式＝チャート＝見取り図＝でまかせ図」

をご紹介します。

*「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」

＝「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」

＝「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

＝「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かける・翳る」

＝「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

＝「げん・Gen・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

＝「げん・眼・がん・まなこ・め・見（※げん・けん）・みる・みわける・わかる・わかる・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

（※以上の「」にくくられた7グループが、なぜ「＝」で結ばれるのかは、おいおい説明していきます）

きのうの「でまかせ図」と比べてみると、お分かりになります、また1グループ増えてしまいました。これって、

*言葉というサイコロ

を振りながら、けっこうシリアス＝serious＝silly＋assにやっているのです。

で、

*自動書記

＝児童書記＝コドモみたいなあたまの構造をした書記＝総書記とか、

*自動筆記

＝児童ヒッキー＝コドモ時代のヒッキーちゃん＝歌だ命＝うただいのち、という言葉があります。

*自動的に＝自働的＝オートマに言葉が書けてしまう

なんて、

*恐山のイタコ

＝潮来のイタロウの親戚の説有り、とか、

*デルフォイの神託

=出るホイ・ごきぶりほいほいの投資信託みたいに、すごくいかがわしい=胡散(うさん) くさい=わくわくするようない話=フィクション=ただの言葉=でたらめだと理解しております。ジャズでいう、

*アドリブ=即興演奏

=あっドリフ=昔はええ演奏聞かせてくれたなあ=1966年に来日したビートルズ(≠ or ≡ ズートルビ)の前座を務めたというあのドリフターズに、近い響きのある言葉です。

何を言いたいかと申しますと、おとといの記事で書きました、

*<ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる>というとき、ヒトと、<「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる>という、匿名的な=非人称的な=ニュートラルな、仕掛け=システムとの間に、主従の関係を決定することはできない。

と、それを、きのうの記事のなかで書き換えました、

*<ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる>というとき、1)ヒトと、ヒトが「何か」の代わりに用いる、「その「何か」ではないもの」という匿名的な=非人称的な=ニュートラルなものとの間にも、2)ヒトと、<「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる>という、匿名的な=非人称的な=ニュートラルな、仕掛け=システムとの間にも、主従の関係を決定することはできない。

ということなのでして、これを、言葉を例にとって、具体的に説明しますと、

*<ヒトは、「何か」の代わりに「言葉」を用いる>というとき、1)ヒトと、「言葉」という、匿名的な=非人称的な=ニュートラルなものとの間にも、2)ヒトと、<「何か」の代わりに「言葉」を用いる>という、匿名的な=非人称的な=ニュートラルな、仕掛け=システムとの間にも、主従の関係を決定することはできない。

となり、補足説明をすると、

*「匿名的な=非人称的な=ニュートラルな」とは、ヒトが生み出した=つくり出したものが、ヒトが生み出していない=つくり出してないものと同様に、ヒトの思わく=意図とは無関係な状態にあるという意味である。

ということで、以上を言い換えるなら、

*ヒトがつくりだした、「何か」の代用品＝道具＝手段である「言葉」は、ヒトの思わく＝意図を超えたものとして存在し機能する。また、ヒトが、「何か」の代用品＝道具＝手段をつかうという行動＝現象＝仕組みも、ヒトの思わく＝意図を超えたものとして存在し機能する。

となり、結局、

*でまかせしゅぎ

という、このブログで、じっこうちゅうの方法におきましては、言葉をつづる＝紡ぐ＝書くさいには、

*言葉たちに演じて「もらっている」＝「いただいている」

という次第なのです。

すごく簡略化して言えば、

*言葉はヒトの意図を超えて自立＝自律している。

ということなのです。このフレーズにある「言葉」という言葉を、

*道具＝手段＝器具＝器械＝機械＝メカニズム＝ダイナミクス＝ダイナミズム＝システム＝仕組み＝制度＝体系＝仕掛け＝企み＝意図＝想像＝空想＝夢＝たわごと＝でまかせ＝デマ＝噂＝ニュース＝嘘＝真＝フィクション＝ノンフィクション＝神話＝言説……

という具合に、このブログの、マンネリ化したテーマ＝ほぼ笑点的仲間受け（※というより、ひとり受け）ギャグ状況にあるフレーズである

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。＞

の

*「その「何か」ではないもの」に相当する＝当てはまるものたち

言い換えれば、

*ヒトがご主人様面して、こき使っている気持ちになっている対象たち＝ヒトが、自分の従者＝けらい＝奴隷だと思い込んでいるものたち

と置き換えても事態＝状況は変わりません。

*

ややこしくなってきましたので、簡単な例を挙げます。

昔々のことです。手で握れるほどの大きさの、ほぼ楕円形の石ころが地面にあったとします。それをヒトが見たとします。ヒトは、何やら考えて、その石を拾い上げ、手に持ち、それを

*使って

たとえば、固い木の実の殻を砕いて、中身を取り出して食べたとします。これは、ヒトが、自然界にあるものをそのまま

*道具

として

*用いた＝使った

例と言えるでしょう。

そのヒトが、そのすごく硬い石に愛着を感じて、持ち歩き、楕円形の石の先にあたるちょっと尖った部分を、他の石に打ちつけたり、こすり合わせたりして、自分にとって

*使い勝手のいい形

へと変形させていき、いろいろなものを引っ掻いたり、削ったり、へこませたり、切ったり、砕いたりするのに、

*使った

とします。石は、だんだんそのヒトの手になじんできます。そのうち、なくてはならないものになりました。

こうなると、

*ヒトは道具と化したその石を使っている。＝ヒトは道具を発明した。

と言えるでしょう。

*使っている

とは、

*依存している＝頼っている＝それなしでは、特定の目的を果たせない＝それなしだと、その代用となるものが必要となる

と言えそうです。

*石には意思＝意志はない。

と考えられます。また、

*石には意地もない。

と考えられます。でも、

*石とヒトの間には、ある関係性が生じている。

ことは確かなようです。どんな関係でしょうか？

*関係・関係性

という言葉とイメージが気になります。

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。＞

という考え方＝説＝お話＝言葉＝イメージ＝フィクション＝与太話にこだわるさいには、

*「何か」とは何か？

とか、

*「その「何か」ではないもの」とは何か？

という問いには、あまり意味がない＝有効性がないと思われれます。

*「何か？」という問いには、ある対象の「実体」・「概念」・「意味」をさぐろうとする志向性＝指向性＝嗜好性がある。

感じがします。

*「実体」・「概念」・「意味」という言葉＝イメージは、きわめていかがわしい＝胡散（うさん）くさい＝嘘っぽい＝考えても無駄＝考えても的外れという印象が強い。

というのが、このブログの立場＝見方＝スタンス＝おたんこなす、です。そもそも、

*ヒトの考えること、なすこと、すべてが、きわめていかがわしい＝胡散くさい＝的外れ

なのですが、それにも

*程度＝精度＝確率＝有意水準（※もちろん比喻です）

というものがあまして、「実体」・「概念」・「意味」といった言葉＝イメージや、「○○とは何か？」という問い方を採用した場合の、

*外れぐあい、はなはだしい＝お話にもならないほど＝使いもんになんねーよ＝だめりゃこりゃ、である。

と言えそうなんです。「いえ、そうなんですよ～、奥さん」or「いえ、そうなんですよ～、カワサキさん」と言いながら、肩をポンと叩く、という感じなのです。お分かりいただけるでしょうか。

*

ところで、たった今、おふざけをしました。これって、単なるおふざけではないのです。繰り返します。

*くだと言えそうなんです。「いえ、そうなんですよ～、奥さん」or「いえ、そうなんですよ～、カワサキさん」と言いながら、肩をポンと叩く、という感じなのです。>

これって、「意味」があります？「実体」や「概念」がありますか？「何ですか、これ」って感じですよ。何でもないんです。もしも、あるとすれば、これらの書かれた言葉たちが、それらを読むヒトに喚起させる＝それらを読むヒトのあたりに生じさせる

*実体を欠いた、働き＝機能＝動き＝ゆれ＝ゆらぎ＝ぶれ＝ずれ＝変化＝移送＝関係性＝絵＝図＝チャート＝イメージみたいな「もの」

だという気がします。

*ここでの「もの」は言葉の綾

です。

*日本語をつづる＝書くにあたって、体裁を整えるための飾り＝さしみのつま＝なくてもいいけどないと格好がつかないほどの「もの」

です。「何でもない」んです。ですので、

*まぼろし・ゆーれい・おーら・すぴりちゅある・トイレの壁の染みに見える人面・誰かが水晶玉に見えると語り張りほかのヒトたちには見えない〇〇・絵に描いた餅と同じで、「実体」「概念」「意味」はない。

と、ご理解願います。今、いろいろなものを取り上げて、それが「ない」「ない」「ない」……と書きながら、

*お祓い＝福は内鬼は外＝エクソシズム (exorcism) ＝えっ、糞沈む？ ＝「ぎゃおー！」

を行っている最中なのです。そうでなくても、このブログでは「ない」という言葉の頻度がきわめて高いに、ちがいないのではないのでしょうか。これは非常に大切なことなので、ぜひ、ご承知いただきたいのです。ちなみに、

*「silly + ass」とか、「＝児童書記＝コドモみたいなあたまの構造をした書記＝総書記」とか、「＝児童ヒッキー＝コドモ時代のヒッキーちゃん＝うただいのち」とか、「＝あっドリフ」とか、「＝おたんこなす」……

なんて、上でおふざけをやりましたが、あれは受けようと思ってやっていることでは断じてありません。あんなくだらないオヤジギャグで、みなさんに受けようなんて毛ほども考えておりません。どうしようもないほど、くだらない言葉を適宜に添えることにより、

*みなさん、どうか真剣にとらないでくださいよー。これは「でまかせしゅぎじっこうちゅう」という、いわゆるトンデモブログです。本気で、お読みになっていただくのはかまいませんが、真剣になるのだけはお勧めしません。蛇足ながら、慎んでお断り申し

上げます。

という感じで、いわば「ガス抜き」というか、「いやだ、奥さん、そんな真剣になっちゃ駄目」というノリで肩をポンと叩いているのです。そのところを、よろしく願い申し上げます。

*

どうして、とつぜん寄り道をして、こんな言うまでもないこと＝無駄なことを書いているのかと申しますと、

* 「実体」「概念」「意味」ではなく、「関係性」について述べる＝記述する

さいには、そうした確認＝約款＝但し書き＝PL法に基づく「お客様へのご使用上の注意」＝説明責任が不可欠だ、と思われるからなのです。

* 「関係性」という「実体」を伴わないはずの「もの」を、説明する＝記述する場合には、いわば「不可能を可能だと思い込む」＝「不自由を自由と錯覚する」というきわめて「自覚的な」(※あくまでも「自覚的な」です)作業が必要である。

からでもあります。実は、

* 「不可能を可能だと思い込む」＝「不自由を自由と錯覚する」はふだん、ヒトが誰でも日常的にやっていること、つまり、ヒトの常態である。

のですが、

* うっかり＝深く考えないで＝何も考えないで＝無自覚に＝無意識に＝なんとなく＝自然体で＝当たり前のように、やっている。

という点が、きわめて重要であり、そのことに「自覚的に」ならないと、

* 「関係性」を思考の対象とすることは、かなり困難である＝ほぼ不可能である。

みたいなのです。

たとえば、

* あたまで地動説を理解していても、どう考えても、からだは天動説を支持している。

状況＝状態＝常態に似ています。また、他のたとえを出しますと、

*テレビの画像が色付きの点の集まりである静止画面であり、それがコマとして早送りされていて動画となっていると、あたまでは分かったつもりでいても、ついついテレビ画面の映像にくぎづけになり、スポーツ観戦に熱中し、エールを送ったり悪態をついたりし、あるいはドラマの主人公に感情移入してしまう。

という状況＝状態＝常態にも激似です。

ですので、あまり、真剣にならずに、ときにはあたまを冷やし、よろしければ、ごいっしょに、ひととき本気になりませんか。という、感じ＝ノリ＝次第なのです。

*

話をもどします。

*ヒトが道具として用いている石と、ヒトの間には、ある関係性が生じている。

ことは確かなようです。どんな関係でしょうか？

結論から申しますと、

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。＞の「その「何か」ではないもの」に「相当する＝当てはまる」ものたち、言い換えれば、ヒトがご主人様面してこき使っている気持ちになっている対象たち＝ヒトが自分の従者・けらい・奴隷だと思い込んでいるものたち

と、

*ヒト

との間に、

*ヒトは「主従の関係」を見いだしている。

ようなのです。でも、「ヒトが見いだすもの」であるかぎり、決定はできません。見方を変えると、その逆もあり得ますし、実際、その逆の関係にある場合＝状況＝例も観察されます。ですので、

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。＞の「その

「何か」ではないもの」に相当する＝当てはまるものたち、言い換えれば、ヒトがご主人様面してこき使っている気持ちになっている対象たち＝ヒトが自分の従者・けらい・奴隷だと思い込んでいるものたち

によって、

*ヒトが主導権を握られることがままある。

ため、

*両者の間に主従関係があるというより、1)主従関係が交互に逆転する場合がある、あるいは、2)主従は表裏一体の関係にある。

と言ったほうが妥当だと考えられます。

*

ちょっと、ここで、関係性について、

*一般論

という横着で杜撰な作業＝手続きを、用いて＝使って、考察してみます。

*関係性という抽象度の高い言葉＝イメージ

について考えるとき、大雑把に＝テキトーに＝でまかせ＝連想ゲーム的に、言葉＝イメージを並べてみる方法を取るのが有効であるように思われます。たとえば、

*AとBというものがあるときに、両者の間にどんな関係性があるか。

と単純に考えてみて、思いつく言葉をどんどん出るに任せて＝でまかせに、列挙するのです。では、やってみます。まず、

*対義語を並べるやり方

でいきます。

*大と小・○と被○・やるとやられる・観測すると観測される・マクロとミクロ・無限と有限・絶対と相対・一般と特殊・単数と複数・粒子性と波動性・線形と非線形・受け身と能動的・支配と被支配・SとM・依存と自立・男女・成熟と未熟・もうとまだ・多いと

少ない・有ると無い・早いと遅い・速いと遅い・長いと短い・動と静・増えると減る・無限大と無限小・本物と偽物・真と偽・正と誤・安定と不安定・可と不可・可能と不可能・偶然と必然・秩序と無秩序・整合と不整合・論理的と非論理的・快と不快・高いと低い・強いと弱い・硬いと軟らかい・複雑と単純・優れていると劣っている・プラスとマイナス・陰と陽・ポジティブとネガティブ・白と黒・裏と表・偶数と奇数・熱いと冷たい・激しいと穏やか・右と左・初めと終わり・中心と周辺.....

こんな感じです。次に、

*動き・運動に注目する方法で試してみます。

*引き寄せ合う・反発し合う・しりぞけ合う・連動する・シンクロする・共振する・共鳴する・触れ合う・くっつく・集まっている・散らばっている・同化する・矛盾する・○であって△ではない・△であって○ではない・○であって△でもある・○でもなく△でもない・○ときどき△一時□・かかわる・影響を及ぼす・影響を及ぼし合う・一方がもう一方の周りを回る・くっ付いたり離れたりする・一方がもう一方をおかす・一方が一方に取って代わる・交代する・代行する・代理を果たす・まじり合う・一方が一方にとけ込む.....

また、

*関係性を状態・状況・構造としてとらえる

こともできそうです。

*似ている・同じである・等しい・等しくない・異なっている・違う・差がある・ばらばら・つながっている・結ばれている・からみ合っている・かかわりあっている・重なる・重ね合わせ状態・対称・対称性・対称性の破れ・円環状・等価・ひも状・パラレル・まじわる・まじわらない・不確定・不確定性・ずれる・ダブる・かぶる・はずれる・仲がいい・仲が悪い・親和性がある・一方がもう一方から派生している・一方がもう一方を生む・一方がもう一方を生じさせる・上部構造と下部構造・入れ子構造・ツリー構造・フラクタル・リゾーム・複雑系・カオス・二次元・三次元・四次元・恣意的・表裏一体.....

もっとも安直なやり方ですが、

*「○○関係」という決まり文句＝紋切型を集めてみるとか、そのたぐいの類推で言葉を思い浮かべる方法

も有効かもしれません。

* 相関関係・因果関係・相互関係・位置関係・二項関係・2項対立・離散関係・関数関係・ねじれた関係・主従関係・親戚関係・親子関係・利害関係・力関係・上下関係・比例関係・反比例・相似・相同・写像・関係がある・無関係・依存関係・共依存・関係が逆転する・関係が交互に逆転する・両立する・両立しない・共存・共生・阿吽の関係・触媒・相乗関係.....

以上のようにりましたが、いずれも基本的に2者を前提としたものですし、他にもいろいろあるはずですが、この辺でやめておきます。ブレインストーミングとかいう方法に似ていますね。あれは、いわゆるひとつの「でまかせしゅぎ」ですから、似ているのは当然です。それはさておき、分かったことは、

* 関係性というものはトリトメがない

という点です。実を申しますと、トリトメがないものが好きです。関係性について、もっと考えたり、でまかせに何か書いてみたいです。

09.08.07 銃が悪いのではなく

◆銃が悪いのではなく

2009-08-07 11:23:48 | でまかせ

銃が悪いのではなく、悪用するヒトが悪いのだ、みたいな意味の意見を見聞きしたことがあります。米国の憲法で保障されている

* 武器を所持し、および携帯する権利

を根拠に、銃の規制に反対するヒトたちの言い分です。正確には、

* Not guns, who kill.

でしたか。

で、

*銃は武器、つまり道具の一種

です。このブログの柱である

*＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。＞

というフレーズの

*「その「何か」ではないもの」

に相当します。

銃を、

*核兵器

とか

*麻薬

とか

*お酒

とか

*煙草

とか

*自動車

とか

*トイレットペーパー

とか

*医薬品

とか

*衣服

とか

*言語

とか

*貨幣=お金

とか

*生きがい

とか

*愛

とか

*平和

といった言葉=イメージに置き換えると、リアルに体感できるのではないのでしょうか。
個人差はあるでしょうが、どれについても言えるのは、それが、

*なくてはならないもの

だと考えるヒトたちがいるはずだ、ということです。

*

さて、きのうは、

*ヒトと「その「何か」ではないもの」との関係

および

*ヒトと、＜「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている＞という仕組み＝システムとの関係

について触れました。

そのうち、前者の、

*ヒトと「その「何か」ではないもの」との関係

には、

*主従関係があるというより、1) 主従関係が交互に逆転する場合がある、あるいは、2) 主従は表裏一体の関係にある。

と言うのが妥当だと書きましたが、どうも、そうではないと考えるようになりましたので、変更します。

変更する前に、言葉遣いをすっきりさせてみます。

*「その「何か」ではないもの」

という言い方は言いにくいし書きにくいし、だいいち、ややこしい響きがあるので、あっさりとして、

*道具＝手段

にします。

で、変更をしますと、

*ヒトと「道具＝手段」と間には、依存関係がある。

と言えるように思われます。ただし、依存関係と言っても、もちろん

*ヒトが「道具＝手段」に依存している。

のであり、その逆ではない点がきわめて重要です。

どうして、こんな言うまでもないことを強調するのかと申しますと、ヒトは道具＝手

段を、

*使っている=用いている=こき使っている=自分が主従関係の主であると思い込んでいる

=ヒトは「道具=手段」を奴隷・けらい・従者・使用人みたいにみなしている

からにほかなりません。

*道具・手段には、意思がない。

のが、ふつうです。でも、

*例外は、道具・手段に当たるものが、ヒトや、ヒト以外の生き物の場合である。

と言えそうです。よく考えてみると、

*ヒトやヒト以外の生き物を、ヒトが道具=手段として、使う=用いる=利用する。

という状況は、非常に多いです。思いつくままに列挙してみますと、

*労使関係、雇用関係、雇用契約、搾取、階級、ヒエラルキー、上下関係、奴隷制度、親分子分の関係、教祖と幹部と信者の関係、代議員という制度、司法・行政・立法という代行制度、夫婦関係、親子関係、保護者と被保護者の関係・聖職者と信徒の関係・師匠と弟子の関係・教師と生徒の関係・支配者と被支配者の関係.....

とか

*飼育、家畜、ペット、実験動物、狩猟、漁労、農業、林業、酪農、食品産業、バイオテクノロジー、動物園、植物園、エコツーリズム.....

という具合に次々と出てきます。以上の例をながめてみると、

*ヒトやヒト以外の生き物を、ヒトが道具=手段として、使う=用いる=利用するさいには、部分的に、道具=手段がヒトに依存している場合もあるが、両者の関係が絶たれたときには、道具=手段は解放され自立に向かうこともあり得る。

と言えるような気がします。

また、さきほど「変更する」と書いたことと矛盾しますが、

*ヒトや、ヒト以外のある種の生き物を、ヒトが道具＝手段として、使う＝用いる＝利用するさいには、1) 主従関係が交互に逆転する場合がある、あるいは、2) 主従は表裏一体の関係にある。

と言ってもかまわない、というか、そう言えるにちがいないとも思えてきました。

*でまかせしゅぎじっこうちゅう

ですので、こうしたアクシデント＝不具合＝誤作動＝前言撤回＝軌道修正＝「訂正」＝「リコールのお知らせ」は大いにあり得ます。

特に、

*ヒトがヒトを、道具＝手段として、使う＝用いる＝利用するさいには、1) 主従関係が交互に逆転する場合がある、あるいは、2) 主従は表裏一体の関係にある。

と言えることはほぼ確実だという気がします。エッチな例を挙げますと、

*やる側＝支配する側であるはずのSが、やられる側＝支配される側であるはずのMに、あれこれ命令・指示されて、こき使われる。

という話を聞いたことがあります。心当たりのある方は、いらっしやいませんか？別にSMでなくても、それに似たケースやシチュエーションを体験することって、ありますよね。ほかの例では、

*親が子によって親として成長させられる。

とか

*信者がいて初めて教祖や幹部が「儲＝信者」かる。

とか

*ヒトがペットを溺愛した挙句、ペットロス症候群が高じて他界する。

などという話も耳にします。そうした事例を考慮すると、やはり、

*依存関係および主従関係において、どちらに主導権があるのかは、きわめて曖昧である。

と言えそうです。

*

ここで、ヒトや生き物を道具＝手段とする場合を離れます。

* 無生物である、具体的なものや、抽象的なこと・現象・状態・システムを、ヒトが道具＝手段として使う＝用いる＝利用する場合には、ヒトは一方的にその対象に依存している。

とも考えられます。相手＝対象は無生物ですから、ヒトに依存することはなく、ヒトはそれがなくなれば、

* 不自由したり、困ったり、あるいは命を落とす

場合もあるでしょう。

* 「酒がなければ、死んだほうがましだ」

とか

* 「酒がなければ、死ぬよー」

の「酒」に、さまざまなものを当てはめることができると考えられます。

話は飛躍しますが、次の図をご覧ください。

|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|

●

これは、けん玉の糸と玉のようなものだと考えていただいて結構です。

*きょうの「きわめてテキトーな図式＝チャート＝見取り図＝でまかせ図」

です。

*「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」

＝「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」

＝「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

＝「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」

＝「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

＝「げん・Gen・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

＝「げん・眼・がん・まなこ・め・見（＝げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

＝「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす・まいりました」

（※以上の「」にくくられた8グループが、なぜ「＝」で結ばれるのかは、おいおい説明していきます）

きのうの「でまかせ図」と比べてみると、お分かりになりますが、また1グループ増えています。

いちばん下のグループの一連の言葉＝イメージを絵にすると、たとえば、上で描いたような図になります。

*●は、ヒトを含めた森羅万象である。

と考えてもよろしいかと思います。

*万物は、圧倒的な偶然性に身をまかせて、静止したり、ぶらぶら揺れている。

というイメージでしょうか。さきほど、この記事の言葉たち＝道具＝手段と、この記事を書いているアホとが、コラボで演じました＝共演・競演・狂演しました、

*ぶれ＝変更＝矛盾＝アクシデント＝不具合＝誤作動＝前言撤回＝軌道修正＝「訂正」＝「リコールのお知らせ」

のみっともない

*千鳥足ぶり

も、

*圧倒的な偶然性に身をまかせた結果の、ぶらぶらとした揺らぎ

のほんの小さな一例だと申せば、言い過ぎ＝手前味噌でしょうか。「あんたがアホなだけ」と言われれば、返す言葉はありません。

で、上の図は、まっすぐに垂れて静止していますが、

*●がぶらぶら揺れたり、放り上げられたり、激しく四方八方＝上下左右に飛び回ったり、あるいはぐるぐると円運動をする。

さまを想像してみてください。

*ヒトも、他の生物も、無生物も、時空に生じているであろう抽象的な多種多様な関係性＝現象も、●「のように」「ある・在る・有る」。

または、

*ヒトも、他の生物も、無生物も、時空に生じているであろう抽象的な多種多様な関係性＝現象も、●「のように」、圧倒的な偶然性の支配下に「ある・在る・有る」＝圧倒的な偶然性に身をまかせて＝任せて＝負かせて＝巻かせて「いる・居る・おる」。

言い換えると、

*ヒトも、他の生物も、無生物も、時空に生じているであろう抽象的な多種多様な関係性＝現象も、●「のように」、圧倒的な偶然性に依存して「いる・居る・おる」。

のではないのでしょうか。

* 「のように」

とは、

* ヒトがヒトに何かを伝えたいと欲する

ときに、

* 使う＝用いる＝利用する、道具＝手段である、比喩＝たとえ＝こじつけ＝でまかせ＝
ほのめかし＝ほぼ黙示

という

* 仕掛け＝システムを、成立＝起動させるための、パーツ＝小道具＝（実は）大道具

である

* 言葉＝イメージ

なのです。

* 「のように」があって初めて、「ある・在る・有る」「いる・居る・おる」が成立する。

みたいです。そうです。こ「のように」＝これ（ら）「のように」、

* <ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。>

のであり、

* 生きる、つまり、感じたり、考えたり、行動して、最後には、亡くなる＝無くなる

という具合に、

* ヒトは、その存在を全うするためには、<「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる>という仕掛け＝システムしか、術（すべ）＝方法＝手段＝道具＝代用物を持たない。

みたいなのです。

*不自由=なんだか自由みたいな気がする

ですね。

*どうしようもない = なんとでも言える→なんでもできる

ですね。

*なんとでも言える。

という

*言葉・イメージ=道具・手段

に希望をたくしましょう。ヒトで「ある」かぎり。ヒト「なん」ですから。

09-08-08 どうにもならないときには

◆どうにもならないときには

2009-08-08 11:03:52 | でまかせ

どうにもならないときには、どうにかなるとか、なんとかやってみせると考えたり信じると、どうにかなったり、なんとかなる。

大きめの本屋さんの、ビジネス書コーナーの一面を占める

*自己啓発書

の棚にある本たちには、たいてい、そんな意味のことが書かれています。

*この不景気にもかかわらず

というか、

*この不景気だからこそ

というべきか、とにかく、よく売れているらしいです。やはり、

*ものは言いよう＝言葉は何とでも言える

という言葉だけは、信じてよさそうです。なにしろ、

*言葉は、代理様＝内裏様＝大理様

なのです。

*

まずは、簡単な図式を、ご覧ください。

*A図(天動説似バージョン):「もの・こと・現象・イメージ＝森羅万象の一部」⇒「ヒト」⇒「もの・こと・現象・イメージ＝森羅万象の一部」

これは、理想＝大雑把で横着な考え方＝あり得ない話＝一般に信じられていること＝ふつうの考え方です。こんなふうに、

*五感を、代理として＝使って＝用いて、隔たったものを近くする＝知覚する

ことで、

*ヒトが、世界＝宇宙＝森羅万象を、直接的に認識できる

としたら、楽＝楽しい＝苦労は要らない＝極楽お気楽ですよ。

つまり、

*見たもの、聞いたもの、触ったもの、舐めたもの、嗅いだもの

そして、もう1つ、

*第六感(※実は、第六感については懐疑的なのですが、そもそも五感自体が、いかがわしい＝テキトー＝うさんくさい話ですので、このさい、このまま話を進めます)とか

いうものを、代理とする＝使う＝用いる

ことによって、ピ〜ンか、ビビーンか、ドッカーンか、アッハ〜か知りませんが、とにかくそんな具合に、

*分かつちやったもの

が、

*ほんまもん＝現物＝それ自体＝そのもの

だとしたら、ややこしいこと一切なし＝簡単明瞭＝快眠快便＝すっきりさっぱりって感じだと思います。

ひょっとすると、いや、きっとヒトは、

*自分はそんなふうには森羅万象を相手にして生きている

と、

*考えている

または、

*考えもしないで、なんとなくそんな感じにいる

のが、ふつう＝常態＝常識＝当たりまえだのクラッカーではないでしょうか。「あんたにくだくだ言われなくても、毎日、そして今も刻々とじっこうちゅうです」という感じに、ちがいません。

とは言うものの、自分の思考の極楽トンボぶりのわりには、

*何だかしっくりこないことが多いし、ドジばかり踏んでいるし、あんまり幸せって感じはしないし、どこか間違っているんじゃないか。

って気がする。もしかして、

*ヒトって、もっと複雑なのかもしれない。

し、

*世界って、もっとややこしいことになっているのかもしれない。

し、

*当たり前に見えることが、実は分けわかんないのかもしれない。

もし、そうだったら、どうしよう？ でも、

*どうしようもない。

から、

*ま、いっか。

ああ、おなかがすいた。ポテチでも食べよう。そんでもって、ケータイで、○○ちゃん
と

*馬鹿話

でも、しょうっと。

*

以上が、ごくふつうの生き方の、ほんの一例だと思います。誰もが、たいてい、以上
と似たり寄ったりの日常生活を、送っているのではないのでしょうか。

* B図（地動説似バージョン）：「もの・こと・現象・イメージ＝森羅万象の一部」⇒「代
理」⇒「ヒト」⇒「もの・こと・現象・イメージ＝森羅万象の一部もどき」

というふうに、A図（天動説似バージョン）に、

* 「代理」

を加え、また、さらに正確さを期するために、がんもどきの親戚の

* 「もどき」

を付け足したところで、図式の正確さ＝精度がいちじるしく向上したわけでもありませ
んし、だいいち肝心の根本的事態は、いっこうに変化も改善もしません。

ただ、わりと単純だった

* A図（天動説似バージョン）

をいくぶん、ややこしく＝詳しくして、

* B図（地動説似バージョン）

に変えることで、

*なんで、何だかしっかりこないことが多くて、ドジばかり踏んでいて、あんまり幸せって感じはしなくて、どこか間違っているんじゃないか。

って気がする理由が、

*ほんの少しだけ、何となく分かったような気になるかもしれない。

のです。たとえば、

*言葉もお金も地位も名誉も、幸せや平和や成功や癒やしや安らぎや真理や罪やあの世や来世とかいう、言葉やイメージも、「代理」「もどき」であると考えて、あたまを冷やすだけでも、だいぶ気が楽になるかもしれない。または、少なくとも、ちょっと目が覚めるかもしれない。

あるいは、

*そうした「代理」や「もどき」を使って＝用いて＝利用して、お金儲けをしようとしているヒトたちから、被害を受けることを避けられる＝予防できるかもしれない。

のです。もちろん、個人差はありますし、ケースバイケースですけど。

で、

*でまかせしゅぎじっこうちゅう

の身なので、保証はできませんが、

*暇つぶしに考えてみるくらいの価値はある。

のではないかと思います。ですので、よろしければ、2つの図を見比べてみてください。

* A図 (天動説似バージョン): 「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部」⇒「ヒト」⇒「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部」

* B図 (地動説似バージョン): 「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部」⇒「代理」⇒「ヒト」⇒「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部もどき」

両者の違いは、

* Aに「代理」と「もどき」が加わってBとなった。

という点だけです。

で、説明をしますと、

1) 「代理」とは、<ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。> (※「また?」「はい、また、でございます」) というフレーズの「その「何か」ではないもの」である。

そして、

2) 「もどき」とは、ヒトが見たり聞いたり触ったり舐めたり嗅いだり、さらに、ピーンかビーンかドッカーンかアッハ〜という具合に、「分かっている」とか「分かった」と知覚したり意識したりするものが、実は偽物だ、ということである。

と言えそうなのです (※「うっそー」。「いえ、そうなのです。というか、言えそうなのです、つまり、言えそうな、だけですけど」。「うそみたい」。「はい、確かに、うそみたい、でございます。ぶっちゃけた話、実はうそだと、にらんでおります。ほんとうなんて、ないみたいです」。「うっそー」。「申し訳ありません」)。

で、

* ヒトにとって、五感と第六感 (※やっぱり、いかがわしい言葉です。何がって、五感と第六感の両方なのですが、代行者とかお代理様って、うさんくさいのです。代議員・代議士=政治家とか、国民の権限を委譲されているだけの公務員=役人=官僚を見れば一目瞭然です) で「感じる」世界は、揺るぎないものとして「存在する」。

という、揺るぎない確信=思い込み=妄想があるために、

* 「(世界を) 感じる」⇒ 「(世界は) 存在する」

という、からくり=手品=でたらめは、とりあえず、留保=「どうしようもないから、そういうことにしておく」=放置しておくしかありません。

言うまでもなく、この

* 「(世界を) 感じる」⇒ 「(世界は) 存在する」

というからくり=手品(※もちろん、タネも仕掛けも大有りです)=でたらめは、このブログの強迫観念=オブセッションである、

* <ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。>

という仕組み=システムの1つであると考えております。

強迫観念とは、揺るぎない確信=思い込み=妄想とほぼ同義ですので、

* いわば、みそくそ=くそみそ(※失礼!) 状態=常態であり、くそ vs. みそ(※失礼!) の果てしなく、また仁義なき戦いとなる。

のは、必至です。

*

話がややこしくなってきましたので、言い換えますと、

* < 「(世界を) 感じる」⇒ 「(世界は) 存在する」 > vs. < ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている >

という戦い=紛争=糞争が勃発しそうな気配なのです。というか、もうすでに、最終戦争=最臭戦争=ハルマゲドン=春巻き丼=アルマゲドン=或齧食は、起こっているようにも感じられます。

* < 「(世界を) 感じる」⇒ 「(世界は) 存在する」 > vs. < ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている >

は、ふだんは緩やかに、ヒトのあたまのなかで起こっているもようです。

たとえば、

*複眼を持っているとかいうトンボは、ヒトとは違ったふうに世界を「見ている」んだよね。

とか、

*嗅覚がものすごく発達したワンちゃんは、ヒトが想像できないほどの匂いの世界のなかで生きているんだよね。

とか、

*コウモリは、声帯から発した超音波で障害物を探知しながら飛行するらしいんだけど、どんなふうに世界を感じているんだろうね。

とか、

*〇〇語を母語にしているヒトたちは、虹は7色ではなく、4色として知覚するんだって聞いたよ。

とか、

*イヌイットの言語では、雪の種類や雪の状態を表す言葉の数が、約△△個以上あるって、何かで読んだんだけど、知ってた？

とか、

*砂漠の民って呼ばれているヒトたちの言葉では、ラクダのいろんな姿を、別々の言葉で言い表すんだって、聞いたんだけど、知ってた？

とか、

*インドでは、あの濁ったガンジス川で身を清めるって言うけど、あそこでは、「きれいときたない」と「清いと汚れた」とは、違ったふうに考えているらしいの。

とか、

*聖書に書いてあることは、ぜんぶ、真実で、進化論もビッグバンもでたらめだって、いうヒトたちにアメリカ旅行中に会ったんだけど。

とか、

*ヒトは生きるんじゃなくて生かしてもらんだって、△△ちゃんが言い始めて、さかんに、わたしにいろんなことを勧めるんだけど。

とか、

*あのヒト、思考は現実化するから始まって、心のスイッチとブレーキとか、ひきつけとか引き寄せとか、8つの法則とか、自分に都合のいいことばかり考えると、脳にいいことばかりやるとかを、はしごしているうちに、頑張りすぎちゃって、すごい抑うつ状態に陥って、今、仕事を辞めているらしいの。

とか、

*うちのじいちゃん、新興宗教の渡り鳥やっているうちに、全財産をもっていかれちゃって、役所に生活保護の申請に行ったら、息子の家に行けて言われて、今、うちにいるんだけど、また、どこかの集団のヒトたちと連絡を取り合って、うちのお金を持ちだすようになったんだけど、どうしたらいいと思う？

とか、

*とうちゃんが、先月から、おーらが見えるって言い出して、会社に行かなくなって、かあちゃんもおらも困ってるんだけど、どうしよう？

みたいに、

*思い込み＝世界観＝人生観＝価値観＝宗教観＝生物間の知覚の違い＝「わたしはあなたじゃないんですから」

の問題は、

*正解も正答もない

し、

*真偽も正誤判断できない

し、そもそも

*森羅万象を「観測する」ことはできない

とかっていう話もあるみたいだし、「何が」かは覚えていないんだけど、とにかく、「何か」が、あるいは、「何もかもが」、

*決定できない

とかいう話も、聞いたか読んだ覚えがあるんだけど、どうなってるの？ といった状況に、ヒトが置かれているかぎり、

*＜「(世界を) 感じる」⇒「(世界は) 存在する」＞ vs. ＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている＞

あるいは、

*A図(天動説似バージョン):「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部」⇒「ヒト」⇒「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部」

と

*B図(地動説似バージョン):「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部」⇒「代理」⇒「ヒト」⇒「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部もどき」

との間の

*体感の対立

は、それぞれの説を信じているヒトたちが、ときに

*懐疑的になる

とか、自分とは別の説を信じているヒトたちと、言葉を使って=用いて=お代理様に
して、

*議論をする

とか、取っ組み合ったり、または、血を流し合って、

*争う

とかしたところで解消されることは、ほぼ絶対にはないと思われます。

また、そうした

* 答えの出ないというか、答えのない問題を、使って=用いて=利用しての商売や悪徳商法も、ぜったいに跡を絶たない。

だろうと考えています。

*

で、このブログでは、その

* どうにもならない

事態に対し、

* ヒトは、古今東西、でまかせしゅぎじっこうちゅうである。

ことを念頭に置きつつ、この記事の冒頭に挙げた、

* どうにもならないときには、どうにかなるとか、なんとかやってみせると考えたり信じると、どうにかなったり、なんとかなる。

という、

* でまかせしゅぎ

の、

* 正統派=主流派的=多数派的集団の大イデオロギー

ではなく、

* 異端派=非主流派=少数派たちの、バラバラ=百家争鳴的意見の1ヶ

として、

* 「それでも地面は動く」と捨てゼリフを吐いた、Mr. しょうがとか、Mr. ガリとかいうヒト

みたいに、おしっこを漏らしそうなくらいビビりまくりながら、

*それでも＜ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。
＞んだもんねー。

と、負けたワンちゃんのように、

*遠吠えをする

か、小心＝傷心＝焦心のワンコみたいに、

*きゃんきゃんと鳴く

しかないのです。

*

ああ、

*伝えるのはむずかしい。

個人的なレベルの話だけでなく、

*言葉を使って、ヒトがヒトに何かを使えるのはむずかしい。

というか、伝えるなんて、

*できっこない

気がします。

*言葉を使うとすれば、比喩＝たとえ＝ほのめかし＝黙示もどきがいくぶん有効かもしれない。

という気もしますが、それも至難の業です。あるいは、

*絵、図、記号、数式、ダンス、叫びなどの、狭義の言葉ではない、広義の言葉が、いくらか役立つかもしれない。

という気もしますが、これもまた、至難の業でしょう。

なぜなら、どのような手段を用いても、依然として手段を用いて=使っているわけで、

* B図 (地動説似バージョン): 「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部」⇒「代理」⇒「ヒト」⇒「もの・こと・現象・イメージ=森羅万象の一部もどき」

の、

* 「代理」

と

* 「もどき」

があるのです。こりゃあ、どう考えても、

* 伝わらない=伝染らないんです (※マジで半泣き状態でございます)。

では、

* きょうの「きわめてテキトーな図式=チャート=見取り図=でまかせ図」

をご紹介します。

* 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」

= 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ (全・空・虚) をうつ・うつうつ」

= 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

= 「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」

= 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

= 「げん・Gen・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

= 「げん・眼・がん・まなこ・め・見 (=げん・けん)・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

= 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらり

ん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげ
る・ばくち・ギャンブル・まける・まかす・まいりました」

＝「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足でき
ない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無
限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちが
う・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこ
べ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即
減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・○・
まあるくおさめませー・輪・和・わ・わっ」

＝「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひび
き・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆ
れる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でっ
けー・うへーっ・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ・わけわかんない」

(※以上の「」にくくられた10グループが、なぜ「＝」で結ばれるのかは、もうそろそ
ろ、お分かりいただけたことと存じます)

例によって、最後に2グループ加わりました。で、最後のグループについてなのですが、

*糸電話じゃ伝わらない。

というか、

*「伝染るんです≠伝染らないんです」

という感じです。というのも、しよせん、

ヒト————— (糸) ————— ヒト

です。

*ヒトとヒトとの間に「糸」＝「代理」があるかぎり、「意図」はもちろん、「it = It =
Es = Etwas」など、伝わるはずはなく、せいぜい「もどき」しか伝わらない。

つまり、

*いとおかし＝いとをかし＝糸を架し

じゃなくて、

*ちゃんとは伝わらない=伝染らない。

のです。ぶっちゃけた話、森羅万象=宇宙の根源であると、考えられる=想像・妄想される、物理的=具体的な

*揺らぎですら、ちゃんと伝わらない。

のです。

*「何か・it」の揺らぎ=動き=運動=熱=信号⇒声帯の揺らぎ=振動=声⇒空気の揺らぎ=振動=音(⇒機械の中でのいろいろな揺らぎ=動き=運動=熱=信号)⇒鼓膜の揺らぎ=振動=動き=運動=熱=信号⇒信号=熱=運動=動き=「何か・it」の揺らぎ

ということなのですが、「⇒」を「伝達=伝える」という言葉に置き換えたところで、気が滅入るだけです。もっとも、気が滅入るのはアホだけでしょう。

問題は、以上の

*「揺らぎ」をめぐってのお話=言葉=フィクション=イメージ=与太話=ガセ=でまかせは、物理的次元の伝達・通信から、「意味」と呼ばれるトリトメのない抽象的次元での伝達=解釈=理解=「わかる・わからない」という、比喩=たとえ=代理=「のように」=「もどき」=がんもどき、つまり言葉へと、置き換えられて、ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもない議論へとつながる。

ということです。

*

ややこしいというか、細かいことを言えば、ですけど。でも、その

*ややこしくて細かいことが、ちゃんと伝わっていると思っ込んでいるヒトが、多すぎる。

のです。

*どんなに緻密に=周到に=科学的手続を踏んで、議論しているようでも、ついつい「のように」=「もどき」=「糸」=「代理」の存在が棚上げされてしまっている。

のです。

*

* 「よけいなお節介だ」

と言われれば、

* それまで

なのですけど。まことに、

* 有り難い（※またしても、お節介だとは存じますが、広辞苑あたりで「有り難い」をお引きます）

ことでございます。有難や有難や。

ハイそれまで〜ヨ。

失礼いたしました。

09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

◆こんなことを書きました（その 13）

2009-08-25 08:48:13 | さくぶん

「こんなことを書きました（その 12）」（2009-06-26～2009-07-05）の続きです。今回は、ブログタイトル「うつせみのあなたに」の続編として 2009-07-07 から 2009-07-17 に書いた記事と、ブログタイトル「でまかせしゅぎじっこうちゅう」で 2009-08-01 から 2009-08-08 にかけて書いた記事のダイジェストです。短い解説と、キーワードやキーフレーズが書いてあります。

* 「こんなことを書きました（その 12）」 2009-07-06 : 2009-06-26 から 2009-07-05 にブ

ログタイトル「うつせみのあなたに」に掲載した記事のダイジェスト版です。

* 「いみのいみ」2009-07-07：言葉の意味が、いわば「入れ子構造」になっていることがテーマです。引用という言葉を使って、その構造を読者に体感してもらおうと努めています。辞典・辞書が採用している形式の限界性への苛立ちが、一種の風刺になっています。「経路」という言葉で、「意味」と「無意味」と呼ばれているものの関係を説明しようとしています。「経路」の「意味」をあえて確定しないという、書く上での戦略が、うまく機能しているかは不明です。「意味」を「無意味という意味」にも固定しないように企む。ややこしいですが、そんな感じです。キーワードは、「引用」「注釈」「変奏」「国語辞典」「アンブローズ・ピアス」「悪魔の辞典」「ギュスターヴ・フローベール」「紋切型事典」「ウィキペディア」「新明解国語辞典」です。直接書かなかったキーワードは、「ジル・ドゥルーズ」「意味の論理学」「ミシェル・フーコー」「言葉と物」「狂気の歴史」です。

* 「何となく」2009-07-08：「経路」という考え方を、日替わりで「何となく」に転じて、「意味」の「無意味性」とでもいうべき仕組みについて、「考える」というより、「イメージ化する」ことを試んでいます。論理という手続きを使えば、矛盾とみなされる言葉のありようについて、現代物理学における新しい考え方・イメージを借りて、読者にイメージ化あるいは体感してもらおうと努めています。「何となく」という言葉の意味ではなく、「何となく」という言葉が演じている運動・仕草や、表情・めくばせに目を配っていただければと思っています。最後に、自然言語と人工言語という、自分にとっては非常に苦手でありながら、非常に気になる分野について、「お勉強する」との決意を述べています。今読むと、恥ずかしくて仕方ありません。キーワードは、「一般論」「＝（という記号）」「意味の固定化」「すっきり」「排除・選別」「イメージ」「メッセージ」「矛盾」「論理的」「禅問答」「不条理劇」「ギュスターヴ・フローベール」「ブヴァールとペキュシェ」です。直接書かなかったキーワードは、「量子」「量子力学」「素粒子」「南部陽一郎」です。

* 「記述＝奇術＝既述」2009-07-14：5日ぶりに記事を書いています。その間に、苦手な自然科学の本を20冊図書館から借りてきて、拾い読みしていたからです。小学生時代から現在にいたるまで続いている、自分のいい加減な読書法について白状しています。大学生になって、初めてきちんとした文献の読み方を学んだ経緯にも触れています。翻訳の仕事をしていた頃の思い出も語っています。自己弁護と弁解をしています。メインは、20冊を「読んだ」というより、「見て」得たことについての報告です。今読むと、馬鹿話です。情けないです。キーワードは、「物理学」「化学」「生物学」「数学」「論理学」「遺伝子工学」「プログラム言語」「機械語」「読書感想文」「作文」「レポート」「学術論文」「文学部外国文学科」「卒業論文」「大学院」「引用」「ブリコラージュ」「でまかせ」「翻訳」「意識」「超訳」「自と他」「他者」「アホ」「人工言語」「自然言語」「バイオテクノロジー」です。キーフレーズは、「記述」は、「奇術」であり「既述」である」です。

* 「3人のゲンちゃん」2009-07-15：おふざけをしながら軽い調子で書いていますが、個人的には愛着のある記事です。後に連載する「げん・〇」シリーズのきっかけになった記

事だと言えそうです。要約不可能な感じのする書き方をしています。キーワードは、「学問」「なわぼり行動」「唯幻論」「唯言論」「唯現論」「メタな立場」「フィクション」「説」「物語」「げん・幻・言・現」「トンデモ本」「トンデモブログ」です。直接書かなかったキーワードは、「岸田秀」「丸山圭三郎」「吉本隆明」「宮川淳」「豊崎光一」「蓮實重彦」「渡部直己」です。

*「あつさのせい？」2009-07-16：これも、かなりおふざけをして書いています。確かにこの記事を書いていた頃は、暑かったです。ある川柳もどきのフレーズを何通りかに解釈して、日本語のひらがな表記の意味の多重性について述べています。そのいわば狂言回しとして「げん・幻・言・現」という言葉とそのイメージを利用して話を展開するという方法をとっています。おふざけをしながらも、かなり本気で書いた記事です。今読み返すと、あまり笑う気にはなりません。おふざけをしている記事は、たいてい、抑うつ状態が激しい時に書いているからです。キーワードは、「あつい・暑い・厚い・熱い・篤い」「意味の多義性」「解釈の複数性」「解釈の不可能性」「幻想」「現実」「言語」「知覚」「暗号解読」です。直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」『仮面の解釈学』「ウィリアム・エンブソン」『曖昧の七つの型』です。

*「システムと有効性と比喩」2009-07-17：息切れを感じます。言語に対してぶち当たるといいうつもの姿勢が、心身の疲れのために、勢いを欠いています。「神経症的」という言葉で弱音を吐いています。記事の最後では、dead end と The end. という end がつく2つの言葉を出して、力尽きたことをほめかしています。直接書かなかったキーワードは、「マラルメ」です。

※「システムと有効性と比喩」2009-07-17のあとは、ブログを閉鎖し、寝込んでいました。夏バテと、親の介護と、難聴に伴う生活上のストレスが重なって、抑うつ状態が悪化しました。ドクターの指示で、お薬の飲み方を変えたり、書くことをやめて、休養に専念した結果、何とか乗り切ることができました。体質上、強めの薬が飲めないため、毎日ただぼけーっとすることを心がけて休んでいました。

※以下の2009-08-01～2009-08-08のブログタイトルは、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」です。

*「気になるというか」2009-08-01：ドクターに内緒で、性懲りもなく「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というブログタイトルで記事を書き始めました。その第1弾です。自分との対話みたいな感じで、手探りで書いています。病み上がり半ばのせいか、書いていると言うよりも、「つぶやいている」ようです。まさに「でまかせ」です。自分の「でまかせ主義」の確認みたいです。

*「もう1つ気になることが」2009-08-02：少し元気が出てきた様子がかうかがわれます。日記をつけていないので、この日にどんな心身の状態にあったかを確かめることはでき

ないのですが、数学の微分について、気になっていることを、自分なりに言葉にしようと努めています。テレビやパソコンの画面における動画の仕組みと、微分をからめて、「まぼろし・幻・幻想」について考察しています。キーワードは、「直線」「曲線」「錯覚」「錯視」「無限」「まぼろし・幻・幻想」「現実・うつつ」「言葉・言語・言の葉」です。

*「さらに気になることが」2009-08-03：今度は、苦手な数学の「確率・統計」にかみついています。この日のことも、あまり覚えていないのですが、かみつくだけの元気が出てきたもようです。記事をよく読んでみると、7月の半ばに図書館で20冊の自然科学系の本を借りてきて「見た」ときに取った、走り書きメモをもとにして書いているように思えます。「死の間際の心境でいたい」や「夢のなかでは、(中略)すべてが肯定されます」という文句がありますが、これは今もいただいている感情です。キーワードとキーフレーズは、「確率・統計・行列」「物理学」「神様がサイコロを振っているわけがない」「偶然性を数量化する」「げん・幻・現・言・限」です。直接書かなかったキーワードは、「アインシュタイン」「マラルメ」です。

*「できないのにできる」2009-08-04：道具という言葉を手掛かりに、ヒトが「代理」を使うという習性、および仕組みを説明しようとしています。「道具」を「手段」、そして「システム」へと拡大していき、そうした「道具」がヒトに「使われるもの」としての役割を超えた存在として機能しているさまに、読者の注意を向けようとしています。ヒトが「道具」として使用している対象に逆に依存している状況を、「主従の関係は決定できない」というフレーズで表現しています。キーワードは、「代理」「道具」「使用・使用する」「器具」「手段」「器」「指」「手」「腕」「システム」「機械」「武器」「装置」「月面着陸」「ヒトという種の脆弱さ」「匿名的・非人称的・ニュートラル」「主従関係」「げん・幻・現・言・限・原」です。直接書かなかったキーワードは、「エルンスト・カッシーラー」「クロード・レヴィ＝ストロース」「ブリコラージュ」です。

*「何も無いところから」2009-08-05：「ない」「無」がテーマなので、できるだけ概念化や意味の固定化を避け、おふざけで言葉を遊ばせ、その言葉の演じる表情や動きによって、読者にテーマをほのめかそうという、以前からの方法・戦略を実践しようと努めています。以前のように過激には実践していませんので、軽く読み流し、言葉の身ぶりを体感していただきたい記事です。キーワードは、「でまかせ」「賭け」「げん・幻・現・言・限・原・Gen」です。直接書かなかったキーワードは、「creatio ex nihilo」「マラルメ」です。

*「めちゃくちゃこじつけて」2009-08-06：前回から連続している言葉の「祭典」です。ヒトの存在の原点とも言える「こじつけ」を、記事に書かれている言葉に演じさせて、読者に「こじつけ」というテーマを「観客として見てもらう」という出し物だと思って読んでもらおうと努めています。そのため、かなりふざけた書き方になっています。でも、真剣に書いています。好き嫌いがはっきり分かれる書き方です。波長が合わない読者には、一蹴されるでしょう。反省しています。でも、身についたスタイルなので、致し方ない部分があることは確かです。キーワードは、「サイコロ」「アドリブ・即興演奏」「道

具」「関係性」「する／される」「げん・幻・現・言・限・原・Gen・眼」です。直接書かなかったキーワードは、「creatio ex nihilo」「マラルメ」「ジャック・デリダ」「ジャック・ラカン」「蓮實重彦」「高山宏」です。

*「銃が悪いのではなく」2009-08-07：広義の道具とヒトの関係性がテーマです。さまざまな具体例を挙げて、感覚的にテーマを伝えようと努めています。図や記号も利用しています。概念ではなく、感覚やイメージでほのめかすという方法に、徹底してこだわっています。ただ、この記事を書いた時には、再び抑うつが悪化し始めてきたことは覚えています。今、思い出すとちょっと悲しいです。おふざけをしながらも無理をしているのが感じられます。キーワードおよびキーフレーズは、「銃が悪いのではなく、悪用するヒトが悪いのだ」「武器を所持し、および携帯する権利」「Not guns, who kill」「依存関係」「主従関係」「万物は、圧倒的な偶然性に身を任せて、静止したり、ぶらぶら揺れている」「けん玉」「自由／不自由」「げん・幻・現・言・限・原・Gen・眼・弦」です。直接書かなかったキーワードは、「アメリカ合衆国憲法修正条項第2条」「全米ライフル協会」「依存症」です。

*「どうにもならないときには」2009-08-08：心身ともに相当参っている状態で書いた記事です。翌日かこの日に、ブログを削除・閉鎖しています。記事のタイトルは、その日の自分の状態に重なっているのかもしれませんが。自己啓発書の果たしている役割について書いています。言葉を信じたい。でも、言葉を素直に信じることをためらわせるものが、自分のなかにある。そうした揺らぎが感じられます。それをヒトという種の問題として、一般化することで現実から逃避しようとしているとも言えます。自分の弱さを感じます。病んでいるから、逃げていいとは言えないというふうにも、この文を書いている時点では思います。今だから言えることなのかもしれません。テーマは、知覚機能や言語を含めた広義の道具・代理の自立性と、道具を使う側のヒトの思惑との隔たりです。このテーマの下には、「(自己の) 認識」と「他者」に対する深い疑問があります。ただ、そこまで掘り下げて書くことはできませんでした。いつか、書いてみたいです。キーワードとキーフレーズは、「自己啓発書」「不景気」「知覚」「知覚器官」「認識」「天動説／地動説」「分かる／分からない」「(世界を) 感じる／(世界は) 存在する」「(森羅万象を) 観測する」「糸」「伝染るんです≠ 伝染らないんです」「it・It・Es・Etwas」「有り難い」「げん・幻・現・言・限・原・Gen・眼・弦・滅・絃」です。直接書かなかったキーワードは、「フロイト」「無意識」「自我」「超自我」「フリードリヒ・ニーチェ」「エス」「ジャック・ラカン」「大文字の他者」です。

※自分としては大病だった約半月の後に、リハビリのつもりで開設した「でまかせしゅぎじっこうちゅう」の役割が終わったところで削除・閉鎖をし、心機一転「うつせみのあなたに・・・」というブログを開設しました。10の「げん」についてそれぞれ10本の記事を書く予定でしたが、やがて頓挫します。

以上です。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係ない。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」＝「代理の仕組み」——「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いるという仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

- 09.01.21 ま〜は、魔法の、ま〜
- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1 カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1 人に2 台のテレビ

09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実＝意見」＝両方ともでたらめ

09.04.22 「人間＝機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間＝機械」説 (2)

09.04.25 「人間＝機械」説 (3)

09.04.26 反「人間＝機械」説

09.04.27 あう (1)

- 09.04.28 あう (2)
- 09.04.29 あう (3)
- 09.04.30 あう (4)
- 09.05.01 あう (5)
- 09.05.02 あう (6)
- 09.05.03 あう (7)
- 09.05.04 こんなことを書きました (その6)
- 09.05.05 スポーツの信号学 (1)
- 09.05.06 ドラマ信号論 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (2)
- 09.05.08 信号学的視線論 (1)
- 09.05.09 信号学的視線論 (2)
- 09.05.10 信号論 (1)
- 09.05.11 もくじをつくりました
- 09.05.12 信号論 (2)
- 09.05.12 信号論 (3)
- 09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

- 09.05.14 かく・かける (1)

09.05.15 かく・かける (2)

09.05.16 かく・かける (3)

09.05.16 かく・かける (4)

09.05.17 かく・かける (5)

09.05.18 かく・かける (6)

09.05.19 かく・かける (7)

09.05.19 かく・かける (8)

09.05.20 占い・占う

09.05.21 賭け・賭ける

09.05.22 書く・書ける (1)

09.05.22 書く・書ける (2)

09.05.23 こんなことを書きました (その8)

09.05.24 と、いうわけです (1)

09.05.24 と、いうわけです (2)

09.05.25 あられる・あらず (1)

09.05.26 あられる・あらず (2)

09.05.27 あられる・あらず (3)

09.05.28 あられる・あらず (4)

09.05.29 あられる・あらず (5)

09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

- 09.06.21 うんちと言葉
- 09.06.22 地と知と血 (1)
- 09.06.22 地と知と血 (2)
- 09.06.23 「あつい」と「わからない」
- 09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり
- 09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)
- 09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)
- 09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第7巻

- 09.06.27 空前の「純文学」ブーム
- 09.06.28 「時間」と「とき」
- 09.06.29 「揺らぎ」と「変質」
- 09.06.30 不自由さ (1) 2010 年
- 09.06.30 不自由さ (2) 2010 年
- 09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)
- 09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)
- 09.07.02 うたう
- 09.07.03 まつはいつまでも、まつ
- 09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)
- 09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリスム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喩
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる

09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12.07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

- 09.12.09 ごめんなさい
- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）

09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（4）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（5）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました（その 20）

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界（改訂版）（1）

代理としての世界（改訂版）（2）

代理としての世界（改訂版）（3）

代理としての世界（改訂版）（4）

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第7巻

<https://puboo.jp/book/17483>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/17483>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17483>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第7巻

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
